
今日、聖剣を抜きました

神鳥谷光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今日、聖剣を抜きました

【Nコード】

N8283T

【作者名】

神鳥谷光

【あらすじ】

半引きこもりの大学二年生、星言人はRPGオタク。今日も引きこもって新作ゲームに没頭する。だがある日突然異世界に迷い込み伝説の聖剣を抜いてしまう。その時突如現れた謎の生意気少女とともに、最強？の剣を手にした彼はやがて世界の謎に迫っていく。第二章入りしました。

主にゲーム関係中心のパロディが多く入ります。
結構マニアックなものもあります。苦手な方はご注意ください。

第一話

俺は星言人^{ほしげんと}。半引きこもりの大学二年生。
ただいま投獄中。

いやあ、ゲームの中で主人公が牢屋に入れられるっていうのはまあ王道だけどさ、やっぱりリアルにやられると結構きついものがあるよね。

きつと勇者だって何度も心が折れそうになったに違いない。

誤解しないでほしいのが、こんなことになったのも俺がひきこもりから発狂して全裸でマラソンしたとかそういうわけじゃないんだ。だってつい二、三時間前まで一人暮らしのアパートでゲームしてたんだから。

俺は重度のゲームオタクだ。特にRPGには目がない。さつきだって発売日に買った新作のゲームを、大学の講義そつちのけでプレイしていた。

大量に食料を買い込み、携帯の電源はオフ。

カーテンは締めきりで電気もつけっぱなし。インターホンは切った。といた。

アポなしで尋ねてくる物好きなやつはいない。
完璧な環境。

約一週間引きこもった末、ついにエンディングまで到達した。とりあえずここで一区切りだ。やりこみはまた後にしよう。

達成感とある種の開放感に包まれた後、コンビニでもいくか、と思立立ち、軽くシャワーを浴びた。

溜まったゴミもあとで片付けないとな……。
時刻は夕方過ぎ。

いつものTシャツとジーパンに着替え、さあ出かけるかというところ、ふと何者かの声が聞こえた。

……女の声？

どうせ隣のヤツが女でも連れ込んでんだろ。

だが耳を澄ますと、どうやら声はドアのほうから聞こえてくる。

一体誰だ？ 宗教の勧誘か？

いきなり訪ねてくる女性なんて母親ぐらいしか思い当たらない。

でもこんな声色じゃないしな。

「……ねがい、……しを……」

ドアに近づくと、やはり扉越しにか細い声が聞こえる。

繰り返される聞き取れない言葉。

気味が悪いな、と思いながらも俺はしばらくドアの前で固まっていた。

いつしか聞き惚れていたのだ。その繊細で美しく透き通った音色に。

そう、まるで天使の歌声のような……。われながらクサイ表現だが。

でも決して歌っていたわけじゃない。俺には声の主が泣いているように聞こえた。

強い意思を感じる。誰かに助けを求めるような。それはもはや哀願に近い。

やがて声はだんだんと遠ざかっていく。もう今にも聞こえなくなりそう。

だが俺は、どうしてもそのまま無視することはできなかった。

その呼び声が、あまりにも悲しそうだったから。

スニーカーにつまさきだけ両足を突っ込むと、ドアノブに手をかけ扉を開けた。

……おや？ いつもと何か違う。いや全然違う。

ゲームのやりすぎでぼんやりしていたせいか、頭がおかしくなったのかと思った。

目の前で、金髪の美女がサービスシーン真っ最中だった。要するに入浴中だったのである。

ここ一週間近くテレビの画面しか見ていなかった俺には刺激的過ぎた。

いやあ、すっかり忘れていたよ。この気持ち。

そうか、これはゲームをクリアした俺へのご褒美なんだな。

それでさつきから呼んでいたのか。

なんてやってたら、大きな悲鳴が俺の思考を現実に向き合わせた。なんて叫んでたのかはわからないが、その目つきは間違いなく変態と言っていた。

しかしいきなりこんな外人さん宅に紛れてしまうなんて、ずいぶんグローバル化したもんだ日本も。

でもずいぶん古風なつくりの内装だ。

ゲームでよくある中世っぽい雰囲気を感じる。

ていうかマジでここどこ？
お邪魔しましたって引き返そうにも開けたはずのドアは見あたり
ない。

ドラク の世界にでも迷い込んだか？ んなアホな。

俺が考え込んでいる間に、いつのまにか兵士っぽい格好したのが
三人で俺を取り囲んでいた。

で、まあなんやかんやで今、城っぽいところの地下にある牢で途

方にくれている。

しかし話が通じないよね。何言っても聞いてくれないし。向こうも何言ってるかわからない。

「のび太さんのエッチ！」

「ごめんなさい！」

なんてやる間もなく、連れ去られた宇宙人状態で気が付いたら檻の中ですよ。

ちよつと考えられないですよ、この人たち。

でも俺は心の奥では安心してゐるんだ。

牢獄っていうのはたいていどうにかして脱出するもんだし。

兵士が裏切ったり、抜け穴があったり、となりの囚人が助けくれたり。

大体主人公が獄中で死亡するなんつーゲームがあるわけない。だから安心。

って違うわ！ これはゲームじゃないし俺主人公じゃないし。

多分俺の扱いなんて変態一般人Aぐらいだろう。

いかん、いかんぞ。

俺の経験から言うと、モブキャラが獄中死する確率はひっじょーに高い。

ていうかそういうのってだいたい白骨化してるじゃん。

調べるとちいさな ダル見つけたりして。

やばい、今のうちにちいさな ダル探しておかないと。

……じゃなくて！

でもあるよね。ずっとゲームやってていざ現実に戻ると、通行人がモンスターに見えたり、学校が城に見えたり、ブスがオークに見

えたり。

そういうわけで俺が勇者だということにしよう。

勇者なら安心。きつと美少女忍者が俺を助けに来てくれる。

……ほら来た。

ガツチャガツチャと何者かが近づいてくる音がする。

あゝこれ違う。

お前の処刑が決まったぞパターンだ。

……拷問パターンかもな。

やだなあ、そのうち全身鎧着たジャツジ スターみたいのが出てくんのかな。

めっちゃめっちゃ怖そうだ。

二人の兵士らしき人物が牢の前で立ち止まり、扉を開けた。

「……………！」

……何言ってるかわかりません。

え？ 私を仲間にしてください？ しょうがないなあ。

なんて俺がしょうもないことを考えていると、両脇からがっちり掴まれて、またも捕獲された宇宙人プレイが始まった。

痛い、痛い、がちりホールドしすぎだろこのホモ野郎。

おいおい、まさかいきなり処刑直行コース？

いやでもよく考えたらかが不法侵入ぐらいで処刑のはずがない。せいぜい罰金だろ。金払うから離せや。

俺のポツケには虎の子の諭吉が……。

なかった。思えばTシャツにジーパン、スニーカーという着の身着のまま。

サイフも携帯もまだ机の上に置きっぱなしだった。

弱った。……まあ持つてても役に立ちそうにないか。

階段を何度か上がって上がって、通路を進み着いた先は大広間。相当でかい。体育館の三、四倍はあるな。ぶつとい柱が何本も立っている。

赤い絨毯がレッドカーペットよろしくまっすぐ敷かれていて、その先には玉座が。

もしかして謁見の間ってやつ？ これ。

で、そのまま半分引きづられるようにして玉座の手前へ。

すげえ、王様だよ。

デコレーションケーキみたいな王冠かぶってる。

王冠ってリアルでかぶられるとちよつと引くね。

すんごいダサイ。何かぶつちやっつてんの？ って感じ。

兵士が離れていく。

王が座ったまま口をパクパクさせているが、ちよつと何言ってるかわかんないです状態。

お前が次のレベルになるにはとかが言っていたりして。

ああ、わかった。これは王様に気に入られて解放されるパターンだ。

ここはおべつかトークで王様の機嫌を取ろう。

「いや〜王様、かつこいいすね〜。マジいけてますよその王冠」

そう、時には人間ウソをつくことも必要だ。

社会はそんなに甘くはないんだよ。

……あ、通じてない。

なんか表情が険しくなって……、あ、笑った。そして、真顔。あ、

怒った？

うーん、俺のような庶民には王様の考える事はわからん。

しかし長えなあ。坊主が読経してるのを延々聞かされてるようだ。気づいてないのかね、通じてないって。

おや、誰か寄ってきた。偉そうなチヨビヒゲオヤジだ。

「もういいでしょう」みたいな感じで王に絡んでる。
大臣的存在か？

うわ、また来たよホモ兵士二人組みが。

今度はどこ連れてくんだよ？

広間を出て長い通路を歩かされる。

見たところすごく大きな城だ。天井も高いし。

あんなところどうやって掃除するんだ？

リアルメイドさんが歩いているところを見て一瞬テンションがあがった。

だけどこの先どうなるか不安で見とれている余裕はない。

さっきとは違う階段を降り、暗い通路を進む。

人の気配がする場所から、どんどん離れていく。

ものすごいいやな予感が……。

ま、まさかこいつらお、俺の貞操を……。

通路の突き当たり、大きな扉の前で立ち止まる。

兵士が扉を押し開け、俺を解放した。中に入れのジェスチャーをする。

部屋の中は通路の暗さとは対照的に明るい。

天井は恐ろしく高いが、広さは俺のアパートの部屋並。七畳もない。

ステンドグラスの光が差し込み、どことなく神聖な雰囲気を感じる。

兵士はもうついてこない。ふう、助かった。

ただど代わりに部屋には人影が。

黒っぽい牧師のような格好をしたおじ様が、こちらに微笑みかけている。

……これが私のご主人様ですか。

「……………」

また何か言ってる。

早く服を脱ぎなさい？ ……どうか優しくしてください。

おじさんが指を差す。

その先には台座。剣らしきものが刺さっている。

普通のロングソード？ ……っていうのかな、そんな感じ。

よく見回すとこの部屋にはそれしかない。おかしな所だ。

戸惑っているとおじさんが手を俺の肩に触れてさらに台座のほうへと促す。

や、やめろ、俺に触るな！

セクハラおやしから逃げるようにして台座へと近づく。

……どうやらこの剣を使うということか。

いきなりこんなものを使うだなんて鬼畜にもほどがあるだろう。

うん？ むしろ俺が攻めるのか？

困ったなあ………と思いつつも俺は剣の柄に手をかけた。

そうか、柄の方を使うのかな、などと考えつつ、一気に剣を引っ張る。

その瞬間。

カツと部屋中にまばゆい光が走ったかと思うと、引き抜いた剣が白く発光を始めた。

そのまぶしさに思わず目をつむる。目を閉じていても感じる強烈な輝き。

俺の手に吸い付くようにして離れない剣は、やがて不思議な音を放ち出す。

その音は、大音量ながらもどこか心地よい響きだった。

ずっと聞いていてもいいぐらい。つい最近もこんな音をどこかで聞いたような……。

やがて音はだんだんと小さくなっていく。光も収まってきたようだ。

俺はしばらく目を閉じたまま硬直していたが、何者かの声を聞いて目を開けた。

「ああよく寝た。久しぶりのシャバだぜ」

そこには俺の胸元ぐらいの背丈の少女が、純白の布切れを一枚身に着けてダルそうに立っていた。

剣を握って腰を抜かしている俺を見つけると、そのかわいらしい顔に似合わぬ悪そうな笑みを浮かべて近寄ってきた。

大きく青い瞳がいたずらっぽくこちらを見下ろしてこう言う。

「お前だな？ 剣を抜いたの」

「え？ な、何が」

「その手に持つてるのはなんだ」

「こ、これは棒です。お、おじさんをいじめるための」

「違うわぼけえ！」

すごい怒鳴られた。

久しぶりに言葉の通じたと思ったなら、今度は話が通じないよ。

「いい子だから、帰りなさい。ここから先はとも見せられないよ」「うるせっ、さっさと立ておらっ」

俺のTシャツを掴んで引っ張る。

脱がさないで。おじさんが俺を……。

「ひいひいっ！」

野太い悲鳴が上がった。

もちろん俺のじゃないし、俺が棒をつっこんだわけでもない。おっさんが後ずさりして壁にひっついてた。

「ま、まさか……抜けてしまつとは……」

すげえ、おっさんいつの間に日本語覚えた？ ただの変態じゃなかったわけだ。

でも何ビビってんだ？

「ほれ、あんなのほつといて早く行くぜっ」

立ち上がった俺の手を引っ張る少女。

なんか知らんが助かった。

「ちょっとこの剣戻してから……」

「ばか、それ持ってこい」

え〜。これめっちゃ重いんだけど。

武器にしたってこんなもん振り回して戦えるわけない。

そもそも俺に武器なんて必要ないし。

「いや、ていうか俺この世界の人間じゃないっばいんだけど……」
「知ってる」

「今すぐにも帰りたいたくなく、なんて」
「無理」

渡る世間は鬼ばかり。やっぱ俺異世界に来ちゃったんだ……。
どうしよう。来週までに帰れるかな……。

FFの新作出ちゃうよ。

などと悩む俺のことなどどこ吹く風。

少女は「さっさとついて来い」と俺をせかすと、ずんずん先を歩いていった。

第二話

暗い通路にはこつこつと少女の力強い足音が響く。

その後からは、ぱたぱたと落ち着きのない足音と金属がぶつかる音。

俺ががいんがいとそこかしこに剣をぶつけつつ引きつりつつ後に続いているのだ。

部屋を出てすぐ、俺をここまで連れてきた兵士二人が待ち伏せをしていたが、おっさんと同じようなりアクションで驚くだけ。

少女は眼中にないといった様子でそれを横目を通り過ぎる。

また捕まりたくないの俺もそれにならった。

しかしこれからどうなるんだろう。

こいつきつと何か知っているはずだ。

俺がこの世界の人間じゃないって知っていたし。

多分元に戻る方法も知っているに違いない。

「あの〜お嬢ちゃん」

「……エレナディア」

「エレナディアちゃん」

「……エレナでいい。あとちゃん付けしたら殺す」

いきなり反抗期。

少女にはいろいろ聞きたい事があったが、いまは剣を引きずってついていくだけでも重労働だし、落ち着くまで我慢することにした。

階段を上り人気のある明るい通路へ。

うわっ、ものすごく注目されてる。

あ、メイドさんがなんか落つことした。
すれ違った衛兵っぽいのが幽霊でも見たかのように固まってる。
派手な格好した兄ちゃんが尻もちついちゃったよ。

しかしこいつキラキラした純白のワンピースみたいなの着てるせ
いか余計目立つな。

肌も異常に白い。

靴だつておそろいの白だし。そしてこの生足。

裾が短いんじゃないのか？ 肩だつてはだけてるし、露出度が高
すぎる。

まったくはしたない女だ。

でもやや銀がかつた金色の髪は、歩きたびにさらさら揺れてもの
すごく綺麗。

……触つたら気持ちよさそうだ。

なんて思っているうちに先ほどの大広間に出た。

ためらうことなくエレナは王の面前へ。

俺も慌てて後を追う。

引きずる剣でびりびり絨毯を切ってしまったが気にしない気にし
ない。

「おまえが王だな？ 勇者決まったぞ」

王様へ向かつて言い放つ。

なんとという口の利き方。相手は王様だぞ？

あのダサイ王冠が目に入らんのかこの小娘は。

「……………」

あゝ王様なんかぶつぶつ言ってる。そうそう、通じねえんだよ。

うわ、すごい笑顔。さてはこいつ、小さい女の子が好きな人種か？
ものすごい卑猥な事言っていたりして。

あれ、でもそういやここに来るまでの間も、みんなの言葉がちや
んと聞こえてたような……。

ほとんど悲鳴だったけど。

それにエレナとは普通に会話できる。

わからん、どういうことだ？

「おい、おっさんちゃんとしゃべれよっ！」

な、なんてことを。

この女、処刑されるぞ。

お坊さんに向かって「このハゲ滑舌悪いんだよ！」と言っている
ようなものだ。

ここは大人の俺が場を収めなければ。

「すみません、ちょっと頭が弱い子なんです。後でよく言って聞か
せますから」

「誰が頭が弱いだ」

どかつと振り向きざまにローキックを入れられた。

貴様、命の恩人に向かってなんてことを。

もう知らんぞ。

「無礼者！ なにをしておるか！ 王の御前であるぞ！」

ほーら怒られた。

やってきたのはチヨビヒゲオヤジ。

さっきも偉そうにしてやがったやつだ。

実際偉いんだろう。ここは長いものには巻かれるだ。

「どうも、私星言人と申します。いやあ、お会いできて光栄です」

「貴様は先ほどの……。一体何の用だ！ さつさと牢に戻らんか！
「ろ、牢つて……。ただか入浴シーンを覗いたくらいでぐらいで
そんな……。それにモザイクをかけないといけないようなところは
見てませんよ？」

「女性からも被害が申告されておる。何を言っておるのか知らんが、
それは貴様が判断する事ではない！」

うわっ、なんだよこいつ。俺がハダカを見たのがそんなに羨ましいのかよ。

頭が固いな。団塊の世代かよ。

「なんだよおまえ、変態だったのか」

「ち、違うよ、何を言い出すんだねいきなり」

「軽々しくあたしに触んなよ？」

「触りませんよ……」

触りたいかと思ってたけどそれは過去の話だ。

おやおや、ちょっと警戒させてしまったかな。少し距離をとられてしまった。

「衛兵！ こいつらを連行しろ！」

「はっ！ 大臣殿」

チヨビヒゲは仲間を呼んだ。

すると足早に三人の衛兵がやってきて、俺達を取り押さえようとする。

やっぱこいつ大臣か。
つーか俺大臣ってあんまりいいイメージないんだよなー。
ニセ王子とか言っただけ追放したりするし。

「待てよ、だから勇者決まったって言うてんだろーが」
「何をバカなことを。大体聖剣が……………、なあああっ!？」

芸人ばりのリアクションでチヨビヒゲが絶叫する。
俺の背後に転がっている剣に気づいたようだ。
重いんでさつき床に寝かせておいた。
なんか印籠ばりに効果あるんだよねえこの剣。
衛兵もビビってるし。

「こ、これはまさか？ いやそんな、バカな。……………貴様が抜いたのか？」

「いや、抜けてて雰囲気だったから……………」

何だよ、抜いたらまずかったのか？

「貴様、いったい何者だ……………？」

「大学二年生。学校はズルける」

「ダイガクニネンセイ？ 学校とは騎士学校のことか……………？」

「いやあ、しがないFランク大ですよ」

大学名は異世界じゃなくてもどこそれ？ って言われるからこれ以上つつこまないでね。

「いや、やはり冷静に考えたら抜けるはずがない。貴様、どこから偽物を用意してきた」

「……………疑うなら確認してくればいいのでは」

「それは本物だぜ。あたしが証明する」

衛兵を含めたその場の一同が「何言っただこいつ」という視線をエレナに向けた。

俺ももちろん向けた。

なんの証拠もないくせに何を自信たっぷりと言っか。こいつ剣となんか関係あんのか？

「……そこのおまえ、いやらしい目でこっち見んなよ」
「なんで俺だけなんだよ！」

そこの大臣の方がよっぽどいやらしい目つきだろ。

王様だって。……おいおい、王様さつきからエレナをガン見してるぞ。

なんかまたぶつぶつ言っているし。かなりの危険人物なんじゃないか？

「どうしても本物と言いつ張るか。ふん、……いいだろう、すぐにでも真偽を確かめる方法がある。……おい、お前」

衛兵の一人を手招きする大臣。

恰幅のいい兵士がさつと寄ってきた。

「なんだよ、やる気か？ 望むところじゃなか」

「ふん、威勢だけはいいな」

え？ 勝手に話が進んでますが、誰が聖剣とやらのお力を試すんですか？

「ではお手並み拝見といこっか」

「ちょ、ちよつと待った。なんで俺が？ 別に真偽を確かめるだけなら誰だつていいだろ？」

「さきほどからその小娘が貴様のことを勇者と言っておるが？」

「そ〜だ、勇者だ勇者」

んなめちやくちな。いきなり俺が勇者だつて？ 「冗談きついで。

おい王様、何とか言ってくれ……あれ、どこ見てんの？ そこ何にもないよ？ あ、目つぶった。寝ちゃったの？

完全に蚊帳の外じゃん。

ちよつと頭がイつちやつてるのかもしれないな。なんか洗脳されてたり。

それで大臣が王に代わつてやりたい放題。よくある話じゃん。

「いやいや、やっぱりその剣はゴミということだね、それでいいじゃないですか」

「そうか。ならばさっさと牢に戻るがいい」

「おまえ勝手にゴミにすんな！ ……じゃーこの剣の力を見せりや、勇者と認めるつてことはいーんだな？」

「ふん、いいだろっ」

玉座から少し離れて、広間の中央へと移動する。

なぜか衛兵とお手合わせすることになってしまった。

大臣が呼んだのかいつの間にかギャラリーができています。

俺と衛兵が向き合っているのを皆が遠巻きに眺めている状態だ。

う〜ん緊張するなあ……。

俺は剣を両手でなんとか正眼に構えるも、重さですでに腕がぶるぶる震えている。

え？ これを振り回すつて？ 無理でしょう。

一方の相手は片手剣を軽く持ち上げて、こちらを威嚇するような

ポーズをとっている。

いい構えだ。隙がない。……のかどうかさえわからん。

だが体からほとばしる闘気を感じる。

ちよっとちびりそうだよ俺。

いや、でもこの剣が聖剣ならば、こんな一般兵に後れを取るはずがない。

エレナが自身満々に本物だと言い張るんだから、ものすごい力を秘めているのかもな。

ただその本人がにやにやしてこっちを見ているのが気になるんだけど……。

「さあ、始めい！」

第三話

大臣の合図とともに衛兵が間合いを詰めてきた。

くすんだ茶色の革鎧を身に着けているが、その拳動は素早い。

そして流れるようなモーシヨンで斬撃が右手から繰り出される。

は、早い！……やられる！

そのとき俺の持つ剣が。

どすん！

埃を立てて絨毯の上に落ちた。

そう。俺が剣を手放して後方に逃げたのだ。

衛兵は予想外の反応に攻撃の手を止め、呆然とこちらを見ている。

「おい待て！ 貴様どういっつもりだ！」

怒鳴る大臣。重しを捨てて逃げただけですが何か？

いやいや今のはないでしょう。いきなり本気で襲い掛かってくる
とか。

小僧相手になにマジになっちゃってんの？

「……ちよつと手が滑りまして」

くすくすと観衆から笑い声が漏れる。

女の子にも笑われている……。ガハガハ大声出してるやつもいるし。

笑ってるけど俺と代わってみる。めっちゃ怖えぞこれ。

「ち、ちょっとタイム」

剣をほっぽって観衆に紛れているエレナのもとに向かう。

「あっはっはっは」

「お前も笑ってんじゃねえよ!」
「ばかだなおまえ」

……こんのガキ！ 誰のせいでこうなったと思ってやがる。
おい、誰かこいつの親呼べ。説教してやる。

「おい、あれのどこが聖剣だよ。ただのクソ重い鉛だろ」

「そこまで重くねーだろ。おまえの筋力がしょっぱいんだよ」

「さ、一緒に謝ろう。牢に入ってもきつと美少女剣士が助けに来てくれるって」

「やーだよ」

「……お前、何が目的だ、俺をいじめたいのか？」

「違うって。ほら、カッコいいと見たいなーって」

……ああ、そういうことか。

俺のかっこよさに一目ぼれしてしまったということか。

ちょっと性格はアレだが容姿だけは一級だからな。

少しぐらいなら相手してやらんこともないぞ。

そしてその髪をおもいっきりわしゃわしゃするのだ。

「……わかった。聖剣の力、とくと見せてやろう。しかとわが雄姿をその目に焼き付けるがよい」

「うん。……ぶぶっ」

俺は悠々と元のポジションへと戻った。
吹き出す声が背後から聞こえた気がしたが、きつとくしゃみかなにかだろう。

よっこいしよ、と剣を持ち上げる。

「もうよいな？」

「はいはいオツケーっす」

さつきより周囲の視線が集まるのを感じる。どいつもこいつもどこか半笑いだ。

大臣はあきらかに余裕の表情。楽しんでいるようにも見える。腹立つ顔だ。

どうせなら大臣とバトルしたかったぜ。

武器なし無差別ルールで。

始めの合図の前に、俺は筋力をフル稼動して剣を上段に構えた。
持ち上げるのも一苦労。

こっとなったら先制攻撃だ。

さつきは筋肉なしのもやし野郎と小バカにされたからな。俺の本気を見せてやる。

きつと聖剣というぐらいだから、気合を込めて振り下ろせば不思議なパワーが衝撃波的なものを生みだし、相手を吹き飛ばすに違いない。

「始め！」

合図と共に渾身の力を込めて剣を振り下ろす。

「くらえ！ 空 斬！」

「がきいいん！」

空を切った剣は、そのまま石床に落下し弾かれた。

「あたたた、手が痺れる！」

周囲からどつと笑い声上がる。

「はは、ウケたぜ、ざまあみろ。」

「……じゃなくて。」

「ていうか石床すら切れずに弾かれるなんて、どう考えてもただのナマクラだろこの剣。」

「そのくせ必要以上に重いし……。」

「もう駄目だ。こんなんじゃ絶対勝てっこない。」

「おい、そんなところで素振りか？」

衛兵が構えを崩し、目深にかぶった硬そうな革帽子の下から俺に嘲笑を送る。

「はっ、聖剣だかなんだか知らないが、使い手がこのザマじゃなあ」

口元を吊り上げ、やれやれといったポーズで挑発してくる。

さらに大臣が薄笑いを浮かべて声をかけてきた。

「どうかね？ 降参してもよいのだぞ？ ハッハッハ」

「一兵卒に降参する勇者つてのも傑作ですね、ククク」

「さもおかしそくに笑う二人。」

「同じように群集もざわついている。」

くそ！ なめやがって！ みんなして馬鹿にしゃがる。

……決めた、絶対降参なんかしない。

俺だつてこんだけ馬鹿にされて笑われて、このまま引き下がるほどお人よしじゃないんだよ！

「よし、ハンデをやるう。俺は武器を使わない。これなら勇者様も存分に戦えるだろう」

衛兵は武器を腰に納めると、両腕をだらりと無防備に下ろす。

ふざけやがって……。素手でも身構える必要なんてないってか。

頭に血が上った俺は、走りよって力の限り剣を振り回した。

「うおおっ！」

構えも何もないめちやくちやな攻撃。

衛兵は俺をからかうように機敏な動作でステップを踏む。

スピードもないただの大振りは、すべて軽々とかわされた。

情けなく翻弄される俺を、またも観衆が笑いものにする。

「くそっ！」

すでに俺の呼吸はぜえぜえ言っている。腕ももう限界だ。

対する相手は涼しい顔。動きが鈍くなった俺に、衛兵が反撃する。

どすっ！ がすっ！

拳が、蹴りが容赦なく身を打ちつける。一撃一撃が重い。

身をかばい打たれた手足の感覚がどんどんなくなっていく。

だがそれでも、相手が手を抜いているのがなんとなくわかる。

たかが衛兵のくせになんて強さだ。いや、衛兵といえど訓練を受けた戦闘員であることには変わりない。

身長も向こうが上だし、筋肉のつき方からして違う。町で不良とケンカするようなレベルじゃない。第一俺はケンカだって滅多にしないんだ。

必死に身をよじりなんとか急所は避けていたが、ついに強烈なポディーブローが決まった。

「ぐはっ！」

俺はなすすべもなく崩れ落ちる。

呼吸が……。全身を吐き気が襲う。心臓が止まったかのような感覚さえ覚えた。

さらに間髪いれずわき腹を蹴り上げられ、一気に意識が飛びかけた。

地べたにつづくまる俺をさらに引っぱりあげ、追い討ちをかけようとする衛兵。

「はいはいストップストップ！」

戦いを止める声。

すぐ近くにエレナが走りよってきていた。

不意の乱入者に驚いたのか、衛兵が手を離す。

エレナは前のめりに倒れこむ俺を抱き止めると、顔を寄せて耳もとにささやいた。

「もういいよ。ごめんな、悪ふざけが過ぎたよ。でも、よく頑張った」

その穏やかな声音は、まるで別人のようだった。

やわらかく繊細な体は、暖かく包み込むような優しさで、受けた痛みも吹き飛んでしまいそうだ。

あたかも天使がそこにいるかのような印象さえ受けた。

「ま、今回のところはおとなしくさ……」
「……………いや、待て」

その優しさに身を預ける事は簡単だった。

そして大臣におとなしく従いさえすれば、これ以上痛めつけられることもないだろう。

このまま続ければ再起不能の重傷を負うかもしれない。最悪死ぬ事だってありうる。

すでに勝敗はほぼ決まったようなものだ。あがいたところで何ができようか。

けれど俺の闘志は、まだ消えていなかった。

「こいつは負けイベントじゃねえ」

「え？」

「負けたらゲームオーバーだ」

「なに言ってる……………」

「俺はゲームオーバーってのが大っ嫌いでね」

歯を食いしばり、立ち上がろうと膝を立てる。

「ゲームの主人公は、たといくらゲームオーバーになろうと、俺があきらめない限り何度でも戦いに挑戦できる」

「げーむ、おーばー？」

「俺はいままでどんなムズいゲームだってクソゲーだって、クリアせずに途中で投げた事はねえ」

「く、くそげー？」

「しかしゲームばっかやってほぼひきこもりの俺が、いきなり異

世界にワープして聖剣に勇者だ？ 一体どうなってんだか

「……」

なんでお前が謝る？

「……最高に燃えるじゃねえかよ。こんな鬼畜難度の超ド級クソゲ」

残された力を振り絞って立ち上がる。体中が疼くが、気合で痛みを押さえ込む。

剣を携え再度敵に向きあう。倒れこんだときも剣は手放していないかった。

やけに静かだ。観衆も俺達の姿を見て静まり返っている。

「お、おい、やめろ、もういいって」

「俺はこの剣の力を信じる。ピンチになって真の力が解放される、なんてよくある設定じゃねえか」

本当は剣を信じたわけじゃない。剣を本物と言ったエレナを信じたんだ。

ついさっき確信した。こいつはそんなしょうもねえ嘘を付くようなやつじゃないって。

嘘だとしても、きつとなにか理由があるに違いない。

……恥ずかしいから言わないけど。

「……ありがとう。でもその剣はさ、本当は……」

「……言わなくていい。俺はこいつで勝つ！」

制止しようとするエレナを振り切って、またも衛兵に斬りかかる。

バカの一つ覚えだな、これじゃ。

第四話

「待った！」

だがその時、広間中に響き渡るような大音声が聞こえたかと思うと、眼前を巨大な壁が塞いだ。

慌てて急ブレーキをかけて踏みとどまる。

壁？ ……いや人だ。だが一瞬それと見間違っほどの巨体。ゴツゴツした黒光りする鎧を身に着けている。

体当たりしてもびくともしないだろう。それどころかぶつかったらこっちがケガしそうだ。

腕の太さもハンパじゃない。豪腕の重戦士、とかの呼び名が似合っいそうだ。

だが見上げると意外に温和そうな顔つきをしていた。頭上には茶色がかった髪をとさかのように生やしている。

年の頃は俺より一回り上ぐらいか。

「ザムザ殿、この勝負、私に預からせては頂けぬでしょうか」

大臣に向き直り、大男は言う。

その見た目からはかけはなれた恭しい態度だ。

背に背負う大剣がさらにギャップを強める。

「……ダレルか。これは剣の真偽を見極めるためにだな……」

「私も騒ぎを聞きつけ、先ほどから眺めておりました。しかしそれはもはや誰の目にも明らかであると存じます」

「ならば勇者を騙る不届き者をだな……」

「ならばしかるべき処遇というものがあるはずでは？ これはまるで見世物のような……。ましてや王の御前。大臣殿、いささか思慮

に欠いておられませぬか？」

「う、ううむ……。確かに王の御前で軽々しく勇者や聖剣などと、おこがましいことをしてしまっただな……。まあよい、どちらにせよ剣は偽者。そやつは再び牢に入れることとする」

大臣はダレルという男に気圧されたのか、ばつが悪そうに言う。

「たかが戦士風情が！」とか言い出すかと思いきや、割とあっさり引き下がった。

……気になったのはやたら王の御前を気にしているところだ。王という言葉を出した瞬間に大臣の態度があきらかに変わった。

あんなロリコンじじいをなんでそんなに敬う必要があるんだ？

いきなり登場した大男によって場の空気は完全に飲まれた。静まり返っていた場内が騒然としだす。

観衆からも「さすがダレルだ」「これ以上はやりすぎだろう」「大臣も調子に乗りすぎだ」などといった声が聞こえてくる。

大臣も「皆のもの静粛にせよ」となだめるので手一杯だ。

そんな中、俺は燃え上がった闘志のやりどころを求め前へ出た。

「ちよつと待った。……まだこいつが偽物だつて決まったわけじゃねえぞ」

その一言に、喧騒は止んだ。またも大勢の視線を一身に感じる。

「よせつて、もう」

俺の腕を掴んでエレナがささやく。

でも俺は、どうしてもこのまま引き下がる気にはなれなかった。

先ほどの黒い戦士が厳しい視線をこちらに落とす。

……助けてやったのに余計な事言っただけか。空気の読めないヤツだっと思ってるかもな。

確かによく言われるさ、「お前空気読めねえな、ゲームばっかやってるからじゃねえの？」ってさ。

そんなん知ったことか。それに助けを頼んだ覚えはない。

俺は負けじと相手を睨み返す。こんなことしたら、手の平返されるかもな。

もしこいつと戦ったら……。絶対勝てねえだろうな。

にらみ合う事数秒。

思いがけなく俺の予想は外れた。

男は急に相好を崩すと、大声を出して笑い始めたのだ。

「ガハハハハ！ 小僧、気に入ったぞ！ 先ほどの根性といい、そのふてぶてしさといい。剣は偽物かもしれねえが、おめえは認めてやってもいいぞ！」

先ほどの殷勤な姿勢とは違って変わって、荒々しく豪放な態度。

そしてその笑顔は、無邪気な子供のように底抜けに明るい。見るからに人の良さがにじみ出ている。

なんとなく威勢のいい大工のような、そんな印象を抱いた。

ん？ 待てよ、この馬鹿笑いは……。

「おいあんた、もしかしてさっきからでかい声でガガガ笑ってたかったか？」

「はあっはあっはあ！ 悪く思うな、なかなか楽しい戦いだっただぞ」

そう言ってその熊さえも張り倒しそうな手でバンバン俺の肩を叩く。

……や、やめて、肩が。

こいつ、見世物がどうとか言っておきながらちゃっかり楽しんでやがるじゃねえか。

変なヤツ。

俺は馬鹿笑いする男にすっかり毒気を抜かれて、反抗する気力もすっかり削がれた。

「オレはダレルだ。一応クラウンガードなんつうのもやってる。覚えておけ」

「……ああ、よろしくな、ハッ ン」

「あ？ 誰だそりゃ」

「いや、知り合いに顔が似てて」

「ガハハハ、なんだか知らねえがまあいい。おめえなかなか見込みがありそうだ。牢からでたら兵に推薦してやってもいいぜ」

なんだか知らんが気に入られたみたいだ。兵士になるつもりなんてさらさらないけど。

にしても、やっぱこれからまた牢屋行きか。どうしたもんか……。

とその時群集からどよめきが。

何者かが人だかりをかきわけているようだ。息せき切って俺達がいる中央までやってきた。

俺の姿を認めつつ、大臣に向かって声をかけた。

あつ、この人は。

「だ、大臣殿！ 剣が、剣が抜けました！」

現れたのはさっき俺が剣を抜いたときに部屋にいたおじさんだった。

血走った目つきで息を切らす姿は、ああ、やっぱり変態だったん

「だなぁ、と思うぐらいキモかった。」

「そうだよ、剣抜くの見てたじゃん。今まで何してたの。さっさと証明してくれよ。」

「な、何だとおっ！ ま、まことか！？ だったら貴様、なぜ早く報告にこんのだ！」

「あ、あまりのショックに腰が……」

「またも騒然とする大広間。今回はこれまでの比じゃない。」

「確かにさつき剣引きずつてるの見たぜ」「なんであんなヤツに抜けたんだ？」「本当に聖剣かよ……」

「静かになったり騒がしくなったり忙しいなまったく。」

「おいおい……。これが本物かよ？ どれ貸してみる」

「ダレルが俺から剣を奪い、しげしげと眺める。」

「……どう見てもやや大振りのロングソードにしか見えんなあ……」

「ダレルは少し距離をとって、何度か素振りをする。」

「おいおい、軽々と振り回してるぞ。」

「振るたびにブオツブオツと血の気が引くような風切り音がする。」

「しばらくそうした後、剣を俺に返して言う。」

「見た目よりも重量がありやがるな。他には特におかしなところはねえ。だが、こいつは………剣としては凡庸と言わざるを得ねえな」

「ダレルのようないわばプロにそう言われてしまつと反論のしようがない。」

うっん、どういうことだ？ 剣は聖剣には違いないが、ただのナマクラだったということか？

俺は思わずとなりのエレナを見た。

腕組みしながらうんうんうなつて首をかしげている。

……駄目だこりゃ。

「まあ、そういうこともあるわな！ ガハハハ！」

ガハハじゃねえよ……。

しかし周りも混乱しだしてわけのわからん騒ぎになり始めてる。たいそうに保管されていた剣の正体が判明してパニックになっているのか。

大臣も俺のことなんてそっちのけでさっきから「静粛に！ 静粛に！」としか言っていない。

「ああ、もう、うるせえな！ おら、散れ！ 見世物はもう終わりだ！ ほらほら！」

しびれを切らしたダレルが群集を追い払い始める。

言葉が通じるようになっていろいろ聞きたいことが山ほどあったが、とても落ち着いて話ができる状況ではない。

俺はダレルはじめ衛兵らが騒ぎを鎮圧するのをただ呆然と見守っていた。

第五話

数十分後。

騒ぎは大分収まりほとんど人影はなくなった。

ところどころに数人の衛兵が無言でじっと立ち尽くすのみ。

しーんと静寂に包まれている。時おり離れたところから誰かと話している大臣の声が聞こえるぐらいだ。

「……あ、あのさ」

ずっと考え込んでいたエレナがおずおずと口を開く。

「あたしって今、ふつーに見えてるよな？ 人っぽい？」

何を考えていたのかと思えばそんなことか。

本当に頭が弱い子だったんだな。参ったな、かける言葉が見つからない。

「……なんでそんなことを聞くんだいエレナちゃん」

エレナは俺のすねを蹴ったあと答える。

「……ずっとなんかおかしいなって思ってたんだ。久しぶりの外だーってちよつと頭が変になってたみたいでさ。記憶もいまいちなんだよな」

いまいち要領を得ない。かわいそうに。この先きつと苦労するだろうな。

ていうか俺はケガ人だぞ？ もっといたわれ。痛みは大分引いてきたがまだ少し気分が優れない。

この世界にも精神科医とかっているのかな、と考えていると、遠くで話し込んでいた大臣がこちらにやって来た。

大臣はすっかり憔悴しきった表情だ。

「お、お前達の処遇だが……とりあえず保留とする」

たぶんもう疲れてどうでもよくなっちゃったんだろうこの人。

「……少し尋ねたいのだが」

大臣はエレナを見て言う。

「聞くところによると、剣を抜いた瞬間、少女がどこからともなく現れたと聞いたが……。それがお主か？」

「え？ そーなの？」

「そうだよ！」

もう駄目だこの子。

でも俺も気になっていた。確かにあの時こいつは急に目の前に……。

「そうなのかあ……。やっぱり。ということは……」

「なに一人で納得してんだよ。お前怪しい。何か隠してんだろ」

「だから記憶が曖昧なんだって」

本当かよ。記憶喪失のくせに態度はでかいし。

「お主、この小僧が勇者と言っておったが？」

「剣に選ばれたものが、勇者になる。そんだけ。それは覚えてる」

それを聞いた大臣は思案を始める。なにか心当たりがありそうだったが、俺にはさっぱりだ。

ちようどいい、こつちから聞きたいことがあったんだ。

「あの、さつきからどうにも腑に落ちないことがあるんだが」

「……何じゃ」

「俺は勇者なんかじゃないし、剣もナマクラだったけど、これは間違いなく俺がさつき抜いた剣だぞ？」

重いのでまた床に転がしてある剣を指差していった。

「……聖剣も力を失ってしまったのかもしれんな」

「そもそもさ、何で俺に抜かせようとしたの？ 牢から出してまで」

「それは王の最後の意思だ」

「え？」

「全ての人間をあの剣に触れさせる。……あの剣を抜けるものを探すために。お前のその格好、どこか異国からの流れ者であろう？」

「異国つちゃ異国だが……」

異次元のな。

「今まで誰にも抜けなかったのだ。少なくともこの国に住む人間には」

「王ってあのボケたじいさんだろ？ あんなのが王で大丈夫なのか？」

それを聞いた大臣の顔つきが豹変した。

「き、貴様！ 王を侮辱するか！ それだけは絶対に許さんぞ！」

いきなり激昂し、俺の胸倉を掴んできた。

初登場時から幾度となくお怒りだったが、今度はその比じゃない。

思いがけない反応に頭が混乱する。

なんなんだ？ しょうもないやつを王に仕立てて大臣が実権を握つてるとかじゃなかったのか？

しかしこの大臣の怒り具合はハンパじゃない。王のためにこんなけ怒んのか？

演技でもなさそうだ。そもそもこんなところで俺に役者ぶりを見せ付けても仕方ないだろう。大勢の観衆がいるわけでもないし。

何だかよくわからないがその剣幕に圧倒されて、ものすごい悪者になった気分になった。

ここは素直に謝ろう。

「す、すいません。今のは失言。訂正します」

「……………いくら異国の者とはいえ、勇者アルフレッドの名を知らぬとは言わせんぞ？」

大臣はゆつくりと手を離す。だがまだ強い視線を外す事はない。

……………やばい、知らない。

知らないって言ったらまたぶち切れそうだから適当にあわせておくか。

「いや〜マジ強いつすよねえ。エルフラッド。カッコいいしモテモテだし」

……また胸倉を掴まれた。あれ？今のダメなの？

「……………アル、フレッド……………？」

ぼつりとつぶやくエレナ。

「あたし、どこかで……………」

口元に手を当てる。記憶をさぐるように何事か考えているようだ。

「見ろ、その小娘でさえ知っておるではないか」

「く、苦しいんで離してもらえます？ 知ったかしたことは謝りますから」

なんとか手を離してもらったが、憎たらしそうにねめつけられる。どうなってるんだよといったい。

だが先ほどからエレナの様子がおかしい。どこかうつろな表情で虚空を見つめている。

勇者という言葉になにかひっかかるのか？

「つまりあの王様が勇者だったってこと？」

「……………そうだ。王はかつてこの世界の邪悪を打ち払われた」

へえ、意外だな。俺にはさっき食べたばかりなのに、「ご飯はまだかい？」って言うっちゃいそうなおじいさんにしか見えない。

エレナを見る目もなんかやらしいし。

こんなこと言ったら大臣に投獄されるかもしれないから黙っておく。

「……………さっき最後の意思って言ったけどさ、まだ生きてるじゃん。」

今だっつてほら」

王座のほうへ顔を向ける。

王はさっきの騒ぎの中でもずっと玉座にお座りしていた。いや／＼いぶん余裕ですよねえ。こっちは大変だっつたつて言うのに。

「確かに生きておられる。……………あの状態を生きていくというのならな」

「え？」

「あそこにおられるのはただの抜け殻。王の精神はもはやこの世にはない。…………原因はわからん。おそらくは何かの呪いかと」

そう言われて体に衝撃が走る。

これで謎が解けた。こつも王が敬われている理由。王だけ言葉が通じない真の理由。

王はあんなになつてしまつても、世界を救つた英雄である事には変わらないつて事。

…………つまりエンディング後にとんでもない鬱イベントが待ち構えてたつてわけか。

やつぱどうしようもないクソゲーだなこりゃ。

「もうクリア済みだつたんだな、ここは。ならもう聖剣なんて必要ないよな」

「貴様何を言つている？ 信じられん、本当に今までどこで暮らしてきたのだ？ 今こそ聖剣の力が必要不可欠であろうが」

…………どういうことだよ。まさか地下世界とかに真のボスがいたとかいふ話じゃねえだろうな…………。

とその時黙つて話を聞いていたエレナが、おぼつかない足取りで

ふらふらと玉座へ歩いていく。

だ、大丈夫か……？ 今度は夢遊病？ 大きい病院連れて行かないとダメかも。

俺は本気で心配になって、エレナの後を追いかけた。

王の前でエレナは立ち止まる。

「小娘、何をする気だ！ これ以上王に近づくことは許さんぞ！」

エレナは応えない。ただじつと王を見つめている。

なんとなく邪魔をしないほうがいいような気がした俺は、暴れだしそうな大臣をなだめつつ、様子を見守った。

「……………」

王がエレナに何事か語りかける。

当然俺にも、エレナにも、世界中の誰にもその意思は伝わらないのだろう。

しわだらけの顔に異常に痩せこけた頬。

豪華なローブから伸びる手足は木の枝のように節くれだち、強く触れればぼきりと折れてしまいそう。

王冠にばかり目がいつていたが、よく見ると普通じゃない。相当に弱っている。

いきなり異世界に来てテンパッていたのもあるが、なんで気づかなかったんだらう。

だが王は、またしてもエレナに微笑みかけた。

初めて見たときは情緒不安定なだけだと思ったが、やはりエレナに向けるそれはどこか性質が違っ。

「お、王が……」

大臣が感極まって声を漏らした。おそらくこれまで見せた事のない表情なのだろう。

エレナがさらに歩みよる。もう手を伸ばせば届く距離。

その時、王が震える右手を、ゆっくりとエレナに差し出した。

握手を求めているのか？

最近アイドルと握手するのに何枚も同じCDを買わされるとい
う。

……何を考えてるんだ俺は。これは全然関係ない。

エレナはしばらく立ちつくしていたが、やがてやや遠慮げみに両
手でその手を握り締めた。

その瞬間。

「……………うっ、うあああっ！」

第六話

すぐに手を離れたエレナが、叫び声ともうめき声ともつかない声を上げその場にしゃがみこむ。

苦しみの声は止まない。頭を押さえうずくまるエレナに、俺はあわてて駆け寄る。

「おい、どうした！？ エレナ！」

肩を揺する。体がたがた震えている。呼吸も荒く、顔面は蒼白。得体の知れない発作が起きた人に接しているようだ。

当然俺はそんなときの心得なんてない。ただひたすら、声をかけ続けることしかできない。

「大丈夫か、しっかりしろ！」

視線が合った。涙で濡れているのか水晶のように透き通った青い瞳がゆらゆら揺れている。

何かを訴えるようなその瞳は、俺の目をとらえて離さない。お互いそのまましばらく見つめ合う。

まっすぐな瞳にじっと見つめられ少ししたじろいでした。徐々に手に伝わる震えが収まってきたのを感じた。

やがてエレナはかすかに微笑を浮かべると、ゆっくりと肩にかかる俺の手をふりほどいた。

「気安く触るなって言ったろ」

いつもどおりの口調に少しだけ安堵する。

だが顔色は優れない。心配をかけまいと無理をしているのが一目

瞭然だ。

でもここで俺が焦っても仕方ない。こちらも平静を装う。

「ここで触らなかつたらいつ触るんだよ」

……よくわからないことを口走ってしまった。これじゃただの変態宣言だ。

落ち着け。

エレナの容態が気がかりなのもあつたが、綺麗な目で射抜かれたせいもあつてちよつとときどきしていた。

罵られるかと思つたが、何も言わない。引いてしまったか。

こつそり顔をうかがうと、どこか思いつめたような表情。

あく絶交しようか悩んでるのかな。

やがてエレナはおそるおそる口を開いた。

「……あ、あのさ。おまえ、やっぱり帰りたいよな？ 元の世界に」

なんだ？ 急に。その言い方だと帰してくれるのか？

「そりやできることならな。でもどうやって？」

その答えにエレナは口を閉ざす。

気丈に振舞つてはいるが、返答を聞いた瞬間、表情が変化したのを俺は見逃さなかつた。

俺はその顔から、落胆、諦め、後悔といった感情を読み取る。明確な負の感情。

そして何よりも、悲しみに満ちている。

できることなら、二度と見たくくない。そんな気を起こさせた。

俺はどうしてこんなところに迷い込んでしまったのか。

バカな俺でも、それにはおそらくエレナが関わっているのだろうということはなんとなく想像できた。

こいつは俺がこの世界の人間じゃないって言っても、まったく驚いてなかったし。

それに今の問いかけ。

それは新たな予感を生んだ。

あの時、アパートでかすかに聞こえた声は、エレナのものだったのかもしれない。

助けを求めるような、呼び声。

俺は、無視できなかったんだ。なぜかは自分でもわからないが。

「今はまだわかんないけどさ、あたしがこれから調べて、探してくるよ。いろいろと。だからちょっとだけ待っててくれよ」

だけど、こいつの言動は矛盾している。

自分で呼んでおいて、そのまま俺を帰す気にいる。もう用済みってことか？

……まあさすがにそこまで確証はもてないけど。

それに手がかりもなしに一人で俺を戻す方法を探し出すって？

馬鹿言え。

だいたいそんなガラス細工のように繊細な体で、どうするつもりだ。

俺だって弱いけど、さすがにこいつには負けない。

で、そんなヤツに任せて俺は遊んでるって？ そんなことできるか。

帰れるっていうんならそりゃもちろん帰るさ。この世界も面白そ

うんだけど、やっぱり身の安全が一番。

元の世界が今どうなってるかも気になる。こっちの一時間があつちでは何年分とか、ありがちだろ。

……でもやっぱり、まだ帰る気にはなれない。

どうにもエレナのことを気がかりだ。

小生意気で、チビのくせに頭が高いやつだと思っていたが、なんつう寂しそうな顔をしゃがる。

まあ俺ができることなんてたかがしれてるけど、それでも、見届けたくなつた。こいつの行く末を。

とはいえ普通、会って数時間かそこのヤツにここまで入れ込む事なんてないだろうけどな。

別に少女趣味ってわけじゃないぜ？ 確かにまあ見た目だけは認めるけど。

たださ、こいつ、どことなく似てるんだ。

小さい頃に、いなくなつてしまつた家族に。

二度と会えなくなつてしまつた妹に。

ここまで綺麗じゃないけど、もし生きていたら、こんな風に

エレナは変わり果てたかつての主の姿に慟哭する。

その手に触れた時、彼女は彼と共に戦つた日々を思い出した。

勇者と共に世界を混沌から救い出した時のことを。

その時の彼女は、物言わぬ剣だった。

勇者は剣に宿る彼女を認識することはできなかつたが、おぼろげ

ながら意志のようなものを感じていた。

彼女はそんな勇者の強くありたい、皆を守りたいという願いに応え、力を貸した。

その力は、瞬く間に多くの魔物を葬り去り、その王さえも滅ぼした。

しかし旅の終わりまで、神に抗った彼女はその怒りに触れ封印されてしまう。

勇者は封印された剣を国に持ち帰るも、その体は神の使いによって呪われ、侵食されていた。

時は流れ、彼女は再び封印から解き放たれた。

どういうわけか、剣として下界に降りる前の姿を取り戻して。

その時の衝撃により、記憶はわずかに欠けたものの、力を全て失ったわけではなかった。

エレナは迷う。

自分の戦いに、神の遊戯に、これ以上人間を巻き込んでいいものか。

かつて覇気に満ちた勇者であった青年は、今はまともに言葉を発する事さえできない。

こうなってしまったのも、きっと自分の責任。エレナの心は、罪悪感に苛まれた。

彼は自分の存在を知らないはず。その時彼女はただの剣だったのだから。ましてや今の彼はすでに自我を持たない。

だが、ふと思い返す。彼は自分を見て笑ったのだ。かつての旧友と再会したかのように。

そして再び揺れ動く。

エレナは少年が先ほど見せた強さを思い出していた。もしかして、彼なら。

だが、彼の意志は？

おそろおそろとなりで心配そうにしている彼に尋ねると、すぐ答えが返ってきた。

「そりゃできることならな。でもどうやって？」

今はまだそれに答えることはできない。

だがエレナには彼を無事にもとの世界に帰す義務があった。彼を呼んだのも彼女なのだから。

だが方法は彼女自身にもわからない。

封印され無意識に助けを求めた声が、どういわけか時空を超える力を生み出したのだから。

やはり彼は帰りたがっている。

これ以上巻き込むべきではない、とエレナは思う。自分にそんな権利はないのだから。

「今はまだわかんないけどさ、あたしがこれから調べて、探してくるよ。いろいろと。だからちょっとだけ待っていてくれよ」

なんとかして方法を見つけるしかない。

それまで少年には安全なところで待っていてもらうしかない。

大丈夫。今は自分の体があるのだから。こうして会話をすることだってできる。

だが彼は、少し悩んだ末、不服そうにこう言った。

「待つって、どこでだよ？ いくら俺が弱っちいからって、仲間になつたばかりで酒場に預けるのはやめてくれよ。そんでラストまで放置すんだろ？ 俺もよくやるから気持ちはわかるけどさ、まだパーティーは定員オーバーじゃねえろ？」

彼はたまによくわからないことを言う。

だがその時の彼はどこか楽しそうで、そして頼もしい。

「さっきみたいに、ぼこぼこにされても知らないぞ？ 下手すると死んじゃったり」

「大丈夫だ、こまめに王様に話しかけてセーブするから」

「せ、せーぶ？」

「昔のやつにはセーブだつてないのもあるんだぞ？ パスワードが間違っていますって出て、しょうがないからその前のやつでやろうとしたら今度はメモったのがどっかいつて、ああああってなったり」

「な、なんだよそれ」

「最初はダレルとかにくつついていつてレベルを上げるといふ手もある。いや、あいつをどうにか仲間に入れて……」

「フラグは立っている」だのぶつぶつ独り言を始める。やっぱりどこか楽しそう。

きつと断つても、彼はしつこく食い下がってくるだろう。

エレナはそんな彼を見て、決心する。

彼を尻目に王と向き合い、優しく話しかけた。今度は目を逸らす事はない。

「……アルフレッド。あたし、またやってみることにするよ。見ての通り変なヤツだけど、なんとなく、うまくいきそうな気がするん

だ。それに……」

すごく優しいヤツなんだ。お前と似て。

勇者は微笑む。エレナは、力なく開かれた彼の瞳に、かつての勇ましい光が一瞬だけ甦った気がした。

その瞳は彼女を励ますようにこう告げる。

頑張れよ。

「……………ありがとう。アルフレッド」

第七話

「さあつてと」

エレナが誰にもなく声を発する。

いつのまにか妄想を始めていた俺はその声で我に返り、エレナを振り返る。

にこにここと晴れやかな笑顔だ。顔の血色もすっかりよくなっている。

俺が一人で妄想を垂れ流し出したからあきれていたのかと思ったが、どうやら元気になったようだ。

「そっぴやお前、名前なんだっけ」

名乗ってなかったっけ？ まあいいや。

「星言人だ。まあ変な名前かもしれないが……」

「……ゲント？」

「そっぴだ。決してふりかざしたらベホ ミの効果 que 起きる杖のことではない。発音には気をつけてな」

「言人」

どうせだったらファンタジーっぽくカッコいい名前を名乗るべきだったかな。

馬鹿正直に本名を使うこともないだろ。

そっぴだ、そっぴよう。

「あ、間違えた、カール・アウグスト・ナイトハルトだ。黒い悪魔

と呼ばれている」

「あれっ、そういえば大臣のおっちゃんは？」

スルーされた。

確かにいつものまにか大臣の姿がない。あんだけ王様王様騒いでおいて、薄情なやつだ。

一体どこに……。

辺りを見回しても、やっぱりどこにも見当たらない。

それに、なんだかさつきと周りの空気が違うことに気がついた。

兵士や召使いが慌しそくにうるうるして、どこか落ち着きがない。どうしたんだろうか……。

誰かに尋ねようかと思つたその矢先、兵士が数人のメイドを引き連れて王の元へやって来た。

「さあ、お連れしろ」

兵士が命じると、メイドが三人がかりで王を玉座から車椅子のよなものに移し変える。

王はなんとか歩けるようで、すんなりと椅子に収まったがそこに意志はなく、ただなすがままといった様子だった。

「お前達、何をしている？ 避難命令を聞いてないのか」

メイドを取り仕切る兵士が詰問してきた。

「避難？ なんかあつたんすか？」

「魔物が城下町に侵入した。一般人は城の地下へ退避だ」

「ま、魔物！？ なんで魔物なんか……」

王様が世界を救つたんじゃないのかよ？

……そういえば大臣が何か言いかけてたな。聖剣が必要だとか何とか……。

まさか本当にゾーが。

「さっさとしろ、私もこの後応援に向かわねばならんだ」

さっきまでそこかしこにつっ立っていた衛兵の姿がない。

王の間を守るような衛兵でさえ行かないとまずいのか？

「そんなヤバイのか？ 騎士団みたいのがあるんじゃないのか？」

「この前近隣の村々へ分散して救助に派遣されただろう？ 城の兵力のほぼ大部分だ。まさか王都が狙われるとはな」

おいおい、魔物が勇者の本拠まで攻めてくるなんてセオリーじゃねえぞ。

開発者はなに考えてんだ。ストーリー重視しましたっけ？

「そ、そうだ、ダレルはどうした？ あんだけ強そうなやつがいれば楽勝だろう」

「すでに魔物と交戦中だ。確かにダレル殿ならまず後れを取る事はない。だが現在祝福を受けた戦士は彼一人しかいないのだ。別口から来られたら一般兵には手に負えん」

祝福？ ……よくわからんがとにかくヤバイってことか。

ここで城が落とされでもしたら、のほほんと帰る手段を探している場合じゃなくなる。

魔物に支配された国を残して逃げ帰るっていうのも性に合わない。それにまだ帰らないって、さっき決めたばかりだ。

「俺も連れて行ってくれ！ こんなんでもなんかの役には立ってみ

せる！」

「……いいだろう、戦えなくとも負傷兵の救護ぐらいはできるはずだ。今はとにかく人手がほしい」

本当は戦いたんだけどな。経験値を横取りして一撃にレベルアップするために……。

……しまった、悪い癖だ。ゲームじゃないんだからレベルなんつーもんはないだろ。

あるとしてもレベル1だろうな。

……レベル99でこの強さだったらどうしよう。

「私は大臣殿からダレル殿の救援に迎えと指示を受けている。行くぞ」

大臣いなくなったと思ってたらいつの間にか指揮をとってたのか。騎士団長みたいのもきつと出払ってていないんだろう。

「……一応武器を渡しておく。だがあくまで身を守るためだけに使え」

兵士は紐を通しただけの簡素な道具袋の中から、鞘に入った短剣を取り出して俺に手渡す。

あのクソ重い剣を無理して使ってもしょうがないしな。今の俺にはこれで十分だ。

エレナは黙って俺たちの会話を聞いていたようだが、顔は床に転がっている剣に向いていた。

またなにか考え事か？

「エレナ、お前は避難しろ」

「……え？ いや、あたしは」

どうやらあの剣が気になって仕方ないらしい。
残念ですが界 神様、そのゼツ ソードは役に立たないでしょう。
持つて行くのも邪魔だし、そのまま放置するしかないだろう。

「おい、急ぐぞ」

兵士が一言俺を促し、走り出した。俺もその後が続く。

体が痛みを上げる。さつきボコられた事をすっかり忘れていた。
でも骨が折れてるとかってわけじゃない。これくらいならたぶん
大丈夫だ。

「待つて言人っ！」

背後からエレナの声が聞こえたが、聞こえないふりをして走り続
けた。

きつと「あたしも行く」とか言うような予感がしたからだ。当然
連れて行くわけにはいかない。

ここにいた方が安全だ。ほっておいてもそのうち誰かに避難させ
られるだろう。

大広間を抜け、長い通路をひた走る。

兵士は革鎧を身に着け、武器の入った道具袋を担いでいるという
のにぐんぐん先に行く。

俺が負傷している事を抜きにしてもその脚力の差は歴然としてい
た。

俺たちはエントランス前の広間で一旦足を止めた。人がこった返
していて、走り抜けられないのだ。

ほとんどが城の地下へと避難する町の住人だろう。年端も行かない子供や、赤子を抱いた女性、杖をついた老人などの姿が目立つ。

その合間を縫うようにして、人ごみを通り抜ける。

「地下に避難なんてして、大丈夫なのか？ 城が占領されたり、崩れたりしたら」

われながら不吉な事を口走っていた。

「地下には非常時に備え食物などの蓄えがある。それに通路が何通りも城の外へと通じているのだ」

なるほど。入り口を封じられても逃げられるってわけか。

……でもそうなった場合、たとえ生き延びたところで……。

やっとの思いで人ごみから抜け出すと、夕日が顔を照らした。

そういや俺、ここに来てから一度も外にでてなかったな。

一応太陽らしきものはあるらしい。にしても時間の感覚が狂うな。遠くに煙が立ち昇っているのが見える。焦げ臭い匂いがかすかに鼻をついた。

再び駆け出す兵士の後を追いつ、城下へ向かう。

初めて見る町の景色に見とれている余裕はなかった。

跳ね橋を過ぎ、無人の商店街らしきものを抜け、噴水のある大きな広場に出る。

そこには兵士が十人ほどたむろしていた。

「ここで一息つく。後は指揮官に従え」

共に来た兵士が俺にそう告げて離れていった。

俺が座り込んで呼吸を整えていると、兵士の一人が近づいて来る。

「おう、妙な格好の。お前も来たのか」

聞き覚えのある声。

肩で息をしていた俺は、だるそうに声の主を見上げた。

「……ああ、まあ偽物なりに思うところがあって」

「ダレルさんじゃねえが、お前なかなか根性あるじゃねえか」

先ほど広間で戦った衛兵が、不敵な笑みを浮かべていた。

負傷したのか右肩に血のにじんだ包帯を巻き、歩き方がどこかぎこちない。

「結構効いたと思うんだが、体は？」

「痛えよ、ご丁寧に手加減してくれたみたいだけだな」

「そう怒るな、ほら」

そう言って懐から栄養ドリンクほどの大きさのビンを取り出し、俺に手渡す。

「今度は毒かよ」

「今は貴重なもんだ。ありがたくもらっとけ」

中にどろりとした液体が入っている。おそらくポーション的なものなのだろう。

体はまだ痛むが、俺はそのまま突き返した。

「ケガ人から回復アイテムをもらうのは気が引けるな。それに普通

「強いやつを優先して回復させるもんだぜ？」

「魔物の前じゃ、俺もお前も大して変わらないさ」

あれだけ力の差があったのか？ 魔物って一体どんだけ……。

ス イムみたいのを想像してたら絶対死ぬな。

「よし、戦えるものは続け！ 西門で防戦しているダレル殿の隊に合流するぞ！」

角を生やした兜をかぶった兵が声を上げる。おそらくそいつがリーダーなのだろう。

「俺は救護に回る。持ってけ」

再びピンを俺に押し付ける。

「いや、俺も救護に来ただけだ。戦うわけじゃないし、これ以上は足手まといかも」

「それでも俺よりは役に立つ可能性はある。お前が行ってダレルさんの士気が少しでも上がれば儲けもんだよ」

……ダレル。さつきからそればかり。みんながダレルに期待している。

そりゃ、一目見ただけで只者ではないのは俺にだってわかるが、まるでダレルしか魔物と渡り合えないような言い方をする。

そこまでの差があるのか？ あの男の強さは。

俺はピンを受け取る。

俺みたいなのが行ってダレルの士気が上がるとは思えない。

けど、こいつをダレルに届けるだけでも俺が行く価値はある。

「じゃあ、行ってくる」

「ああ。……これも持ってけ」

兵士は革製の帽子を脱ぐと、俺に向かって軽くほうった。

俺の格好が間抜けだと思ったのかもしれない。

なにせティーシャツにジーパン、それにさっき渡された短剣をぶら下げてるだけだ。

「……死ぬなよ」

かすかなつぶやきを背に、俺は戦場へ赴く一団へと加わった。

第八話

一行は俺を入れて六人。俺はその最後尾についた。両脇に民家が立ち並ぶ大きな通りを小走りで進んでいく。

だんだんと日が傾いてきて、赤く染まった静かな町並みがどこか不気味だ。

人の叫び声が遠くに聞こえ、聞き覚えのない獣のうなり声のような音が空気を伝わって来る。

思わず足を止めそうになったが、先に行く兵士達は特に動じることもなく歩調も変わらない。

……頼もしいな、こんだけ味方がいれば大丈夫だろ。

煙が濃くなってきた。行く手に火の手が上がっているのを確認する。

目的地はそろそろのようだ。

その時先頭の兵士が不意に立ち止まる。

俺にも見えた。さっと四つ足で横切る何かが。

「わあっ!」

間髪いれず左前方の兵士が悲鳴を上げる。

と同時に、体がどさっと地面に転がる。

黒いドーベルマンのようなシルエツトがその腕に食らいついていた。

全身をバタつかせ、必死にまとわりつく獣を振りほどこうとする。

「魔物かつ!」

すぐに先頭の兵士が異変に気づき、振り返りざま抜き打ちに魔物を切り払う。

しかし黒い魔物はすばやい身のこなしでその一撃を避けると、今度はその兵士に向かって襲い掛かった。

それを二の太刀で迎え撃つも、わずかに逸らされ空を切る。

「ぐあっ！」

またも腕に絡みつく魔物。兵士は苦痛に顔を歪めながらも、もう片方の腕で魔物を抱きかかえるようにロックする。

そこに残りの兵士が一斉に攻撃を加えた。

ドスツ！ ザシユツ！

短剣と短めの槍が胴を突き刺すと、突然魔物は塵気楼のようにフワツと消滅した。

「……やったか」

兵士の一人が安堵する。

だが安心してはられない。今ので二人の負傷者を出してしまった。

「情けないな……こんな戦い方しかできんとは」

「たかが雑魚一匹にこれでは……」

勝利したものの、空気は重い。

一人目のキズは思ったより深いようだ。

結局もう一人の負傷者を付き添いにして、しばらくその場に留まることになった。

再び残った者たちで前進を続ける。

しかし、今のが魔物か……。
死骸が一切残らない。なんだか現実味のない、亡霊かなにかと戦っているかのようだ。
本当に生き物なのか？ いや、そういうくくりで考えるのがそもそも違うのかもしれない。

……今ので俺にも経験値が入ったかな？ そういえば金はいくら手に入ったんだ？

あつ、やばい。またまた禁断症状が。

なんか俺一人だけ緊迫感が足りてない気がする。

つつても無理ないだろ。魔物と戦うなんてのはテレビ画面の中の話だったんだから。

どうも一人だけゲームをやっているみたいだ。超リアルなRPGがあつたらこんな感じなのかも……。

俺みたいなゲーム廃人は感覚が麻痺つてて、この世界の人たちとは価値観が違っちゃってるのかもなあ。

実際魔物を見たとき恐怖というよりか軽くテンション上がったし。

ケガをしている兵士とかを見るとやっぱり怖いと言えば怖いんだけど。

しかし敵一匹に二人戦闘不能はよろしくない。

今のはただの雑魚らしいが、これでは先が思いやられる。

大体パーティ編成が悪い。戦士六人とか、どこの縛りプレイだよ。それに実は遊び人が混じってるし。まあ俺だけだよ。

せめて僧侶が一人はほしい。さっきだって回復魔法があれば……。

魔法？ そういや魔法ってないのか？ いや、さすがにそりゃねえだろ。

勇者が力二歩きしてた時代から魔法はあるんだ。
案外イオズン！とか叫んだら使えたりしてな。
そうして俺は一躍ヒーローに……。

「おい、お前ぶつぶつうるさいぞ」

先に行く一人がペースを落として俺に併走する。

……怒られた。どうやら口に出ていたらしい。

「ずい分余裕そうだが、魔物との戦闘経験はあるのか？」

「あるっちゃあるが、ないっちゃない」

「む？ どういうことだそれは？」

「まあ最低でも二百回ぐらいは世界を救ってるな」

「……お前ももう戻った方がいいかもな。そうなるのも無理もない。
限界を感じたらいつでも言え」

兵士はそれだけ言ってまたペースをあげていった。

……恐怖で頭がおかしくなったと思われちゃったよ。参ったな。

道すから、建物に寄りかかり座り込む兵士やそれを手当てする救
護兵らしきものの姿が目立ってきた。

激戦地はもうすぐそこのようなのだ。

さらに進むと視界が徐々に開けてきた。両脇の建物が途切れ、西
門前の広場らしきところにたどり着く。

広場には多くの横たわる兵士。そこかしこで街路樹が倒壊し燃え
盛っている。

門があったと思われる場所は瓦礫と化し、広場全体にも石塊が無
造作に散らばる。

門の跡より遠目、町の外から数多の黒い影が迫り来るのが見えた。町の出口には大柄な戦士と数人の兵士がその行く手を阻んでいる。俺たちはその一隊と合流した。

「ダレル殿！ 援軍に参りました！」

「先頭を駆けていた戦士が声高に叫ぶ。

大柄な戦士　ダレルはそれに応えるように声を上げる。

「おおう！ てめえら、援軍だ！ まだやれるなあ！」

ダレルの励ます声に、兵士の間にも掛け声があがる。

合流組はそれぞれ持参した代わりの武器の交換や、アイテムの受け渡しを始めた。

俺もそれにならない、受け取った小ビンを渡すべくダレルに近寄る。

「ダレル！ これを」

ダレルは俺の姿に気づくと大きな笑みをこぼした。

「ガハハハ！ 小僧、驚いたぞ！ まさかお前がやってくるとはなあ！」

「魔物に占領されそうだったのに、隠れてるのは性に合わなくてね」

「ハハハ！ そうかそうか！」

「ほら、これ」

「ああ、すまねえな！」

ダレルはうれしそうに笑ったあと、小ビンを受け取り蓋を開けて一気に中の液体を飲み干す。

「……こんなひ弱なガキだつてやる気になつてんだ、オレもへばつてる場合じゃねえな」

ダレルは小ビンを投げ捨てるそうつぶやき、傍らに突きたててある大剣に手を伸ばした。

片手で大剣を軽々持ち上げると、ゆっくりと前に歩みだす。

……にしてもでかい剣だな。どこのソルヤーだよ。ザツ スから譲り受けたのか？

「危ねえから離れてろ。こんなとこで死んだらつまんねえぞ」

三頭の魔物が間近まで迫っている。

イノシシを大きくして凶悪にしたような、四足で歩行する獣の群れだ。

先ほど遭遇したものは比べ物にならないスケール。

大きめのワゴン車ぐらいの大きさはある。

大地を揺るがす震動がその重量を物語っていた。

「す、トロング ニマルか!？」

「なんじゃそりゃ?」

「あのモンスターだよ!」

「あん? いちいち名前なんか付けてねえよ」

いきなりあんなのが出てくるのかよ……。レベル一だったら勇者でも瞬殺されるぞ。

「中クラス野獣型だ! 下がれ!」

兵士達はダレルを置いて一斉に後退を始める。

……お、おい、何逃げてんだよお前ら。力を合わせて戦うんじゃ

ないのかよ？

あれをダレル一人でやらせる気か？

そりゃいくらなんでも……。

「何をしている、早くしろ！」

俺がもたついていると、後ろから強引に腕をつかまれ引つ張られた。
た。

転びそうになりつつも西門広場の中央付近まで下がる。

「だ、大丈夫なのかよ！？」

「あの敵クラスになると、かえって我々がダレル殿の邪魔になる」

「邪魔も何も……」

いくらダレルが大男とはいえ、あのサイズの魔物三頭にこのまま突進されたら、吹っ飛ばされて踏みつけられて終わりだろう。

広場に誘い込んで大勢で取り囲むようにして戦うならわかるが、

ダレルが動く気配はない。

凶暴な魔物を前に臆するどころか、大剣を片手に悠然とその場で仁王立ちしている。

グアアアアッ！

凶獣の咆哮がこだまする。ダレルとの距離はもう数十メートルもない。

「ダレル！ 早くこっちに！」

俺は叫ぶが、魔物の咆哮と震動音にかきけされた。

その時、ダレルが大剣を両手に持ち替え頭上へと掲げる。

「な……」

思わず目を疑った。

ただでさえ大きな剣が、さらに巨大化を始めたのだ。

みるみるうちに振りかざした黒い刀身が横に広がり、縦に伸びる。

それは、なんとというか……。天に向かって道路が生えていくような……。

なんだか急に耳鳴りがする。

ダレルを中心に十メートルぐらいの黒い円状の影が発生していた。

円の半径がちょうど形を変えた大剣と同じぐらいの長さ。

猛烈な勢いで並列に突進してきた三頭の魔物は、その影に体が触れたとたん順にスローモーションになる。

ダレルが渾身の一撃を放たんとするその目の前で。

「うおおおりゃああっ！」

ダレルは掲げた大剣を、高らかな雄たけびとともに右から左へなぎ払う。

ズシャアアアアつと魔物を切り裂く、いや押し潰すような音がしたかと思うと、三頭の魔物は同時に白く薄れ消滅した。

俺はその凄まじさに、ただただ驚きの声をあげた。

「す、すげえ……。な、なんだよあれ……」

「見るのは初めてか。剛剣グラヴィアス。精霊に祝福を受けたダレル殿が授かった武器だ」

第九話

ケタ外れの破壊力。

さつき俺が目撃した雑魚との戦いとはまったくの別物。

今のに比べたら子供の遊びだ。次元が違う。

誰かが加勢する間もなかった。そもそもその必要性がない。

一閃のもとに魔物三体を葬ったのだから。

……何だよ、一人テンパツてた俺がバカみたいじゃないか。これならまだまだ安心だな。

俺はダレルへ駆け寄る。

すでに剣は元の大きさに戻り、不気味な黒い影も消えていた。

「すげえな！ これならいくら魔物が来ても楽勝じゃん！」

「……へっ、……まあ、こんなもんよ」

ダレルは大剣を再び地に突き刺し、笑みを浮かべる。

だが俺はその顔にどこかきこちなさを感じた。

無理して余裕を見せているような……。

……しかしすごい剣だ。突き刺さった大剣をまじまじと見つめる。長さは俺の首から下ぐらいはあるから、ざっと1・4、5メートルぐらいか？

見た目は何の変哲もない……、いやこの大きさの時点で普通じゃないけど、何か怪しげな装置がついてたりっていう事はない。

精霊の祝福がどうたらって言うてたから、おそらく魔法の武器かなんかなんだろう。

「なあ、俺もこの剣使ったらあんなふうに戦えるのか？」

「……そいつぁ、……はぁ、はぁ、無理だ」

すぐに異変に気づく。

ダレルの息遣いが荒い。走った後のように呼吸が乱れている。いくら大剣とはいえ一振りしたぐらいでこんな疲れ方をするはずがない。

さつき城の広間で、俺が抜いた剣を軽々振り回しても息一つ乱れていなかったのに。

ということはやはりこの武器が体力を……？

「大変です！ 東門からも魔物が襲来したとの知らせが！」

背後から危急を告げる声。

ここに来る途中で負傷した兵士二人が広場に現れた。恐れていた絶望的な知らせに、広場にいる全員が戦慄する。

「な、何だとおっ！ 敵の数は！」

ついにダレルの顔からも笑みが消えた。

その決死の形相に、俺でさえも今がどんなにヤバイ状況なのかを悟る。

あんなやつらが反対側からも……？

「確認されたのは一体ですが……。巨大クラスです！」

さらに皆の間にどよめきが走る。

中クラスでワゴン車程度ってことは、一戸建てぐらいあんじゃないかねのか……？ いやそれ以上か？

「おいおい……、そいつぁオレが行っても手に負えるかどうか」

「こちらは困ったのでしょうか!？」

「……その可能性もあるな。たまにヤツら、異常に統率が取れている時がありやがるしな」

「もしや他のクラウンガードが不在の時を狙って?」

「ちきしょう……。こんな時だつてのにあのクソ將軍はなにしている……」

本来ならダレルクラスの戦士が他にもいたのか?

でも今は……。

「今向こうはどうなつてんだっ!」

ダレルの語気が荒々しくなる。初めて見たときとは完全に別人。なりふり構ってられないというのがひしひしと伝わってくる。

「警戒に当たっていた兵が応戦しているようですが、戦況はわかりません。唯一の救いはまっすぐ城に向かっているわけではなく、進行速度も遅いということです」

その時またしても地響きが聞こえてきた。

町の外、彼方に先ほどと同型の魔物の姿が。

「チイツ!」

ダレルは再び剣を担ぎ上げ、魔物が迫る方角に体を向ける。

「とりあえず今はこっちが優先だ。奴ら、わき目も振らずに向かっ
てきやがる。東の方は魔物さんが遊んでくれるのを祈るしかねえ」

ダレルはまだ冷静だった。

今ダレルがこの場を離れるのは非効率だ。

仮に兵士を大勢残していったところで苦戦は確実だろう。突破されてしまうかもしれない。

だがダレルならば一人でも食い止める事ができる。

東門まで行くにも距離があるし、新手の魔物はもしかするとダレルでも歯が立たないかもしれないらしい。

「悪いが何人か、おもちゃ役を頼む。ここが落ち着いたらオレもすぐ向かう」

どちらにせよダレルの邪魔になるのなら、俺たちがここにおいても仕方ない。

ならば少しでも役に立てる方へ、行くべきだ。

「よし、今から東門へ向かうぞ！ 体力の余っているものは続け！」

兵士の一人が号令をかけ、それに続く者が四人。

当然俺もその背中を追うべく走り出す。

「……さすがに、死ぬかもな」

ダレルのかすかなつぶやきを、風が俺の耳に運んできた。

東門へ向かう兵士たちの足取りは、さきほどよりあきらかに重かった。

当たり前だ。これからそんな化け物モンスターの元に行くこうつてんだから。

だけど逃げるわけにはいかないんだろう。いや逃げたところで結末は同じなのかもしれない。

俺はお葬式ムードをなんとかごまかそうと、走りながら兵士たち

に向かって質問を浴びせた。

「巨大クラスってそんなにヤバイのか？」

「巨大型を一人で討伐したことがあるのは將軍だけだ」

「遠征中の軍が一隊でも戻ってくればあるいは……」

「せめて將軍殿がいれば……。だが依然として行方が知れんし……」

兵士たちが口々に声を漏らす。

將軍か……。よほどの強さなんだろう。ダレルも口にしていたぐらいだ。

それにもしかしたら遠征中の軍が助けに戻ってくるかもしれないのか。

一応望みがゼロなわけじゃないんだな。

「とはいえそろそろ日没。軍が戻ってくる可能性は限りなく低いな」

照りつける夕日が落ちようとしている。

暗くなったら視界が悪くなってさらに不利になりそうだ。

黒い闇が徐々に迫ってきている。

そう、黒くなって……。

「魔物だ！」

黒い影がどこからともなく現れ、行く手を阻んでいた。

西門へ向かう途中で遭遇した黒い犬型のモンスターだ。

一行は急停止する。

敵は、二体。

こちらは、戦力にならない俺を入れて五人。

さきほどの公式をあてはめると……。四人やられる？

バカな。そんな単純じゃねえ。今度は一体をよってたかってって

いう訳にはいかない。

六対一で二人負傷。五対二なら……？

全滅するかもしれない。

東門へ行くどころか、こんなところで……。

「……お前は戦わなくていい。逃げる」

誰にともなくささやく声。

誰に言っただよ……？

……そりゃ俺だろうな。

「逃げてどうすんだよ」

じりじりと間合いをつめてくる魔物。そろそろ一足で飛び掛ってこれそうな距離だ。

「まだ動けそうな兵士を見つけて東門へ行くよう伝えるんだ」

……そういつ役回りかよ。

クソツ！ 自分の無力さが腹立たしい。一緒に戦う事すらできないなんて。

とはいっても俺にできることといたらそれぐらいしかないのが現状だ。

能力の基礎値が低い上戦い慣れていない俺がこの場にいても、逆に足を引っ張ってしまうかもしれない。

なら今は、できることをするしかない。

「やつらが飛び掛ってきたらまっすぐ走れ。何があるつとひきつける。後ろは振り返るな」

「……そういうセリフを言うと死ぬぜ？」
「死にはせん。いざとなれば我々も逃げる」

そこまで言うと兵士は口を閉じて押し黙った。

俺を守るように四人の兵士が横一列に並ぶ。

おのおのが剣や手槍などの武器を手にし、魔物へ身構えた。

俺は一人だけ手ぶら。それどころか、腰に下げた短剣さえも投げ捨てた。

こんなもん、走る時に邪魔だ。持ってたところでどうせ役に立たねえ。

捨てた短剣の音が合図になったか、魔物が二匹同時に飛び掛ってきた。

兵士がそれを迎え撃つ。

俺が強く地を蹴る。

魔物と兵士がぶつかり合う横を一気に走り抜けた。

ドザッ！

兵士が倒れたか、魔物が地に叩きつけられたのか定かではない音が背後から聞こえた。

第十話

夕闇迫る大通りをひた走る。

西へ向かうときに見られた負傷兵や救護兵の姿はなかった。

応援を頼もうにも人影すら見当たらないのでは話にならない。

すでに皆東門へ向かったのだろうか。

ザツザツと足音だけが不気味に響き渡る。

ほぼ全力疾走に近いスピードで走り続けているため、体力が持つかどうか不安だ。

それに魔物がいつ現れるとも知れない。

西門で討ちもらしたのが市街地に入り込んでいるのようなので、遭遇する確率は徐々に減ってはいるのだろうけど。

さすがの俺も、恐怖と焦りを感じていた。緊張感もすでにピークに達していて、そのせいで余計に体力を消耗する。

だがそれ以上に何もできない自分に苛立っていた。

……くそ、体力ねえなあ俺。足もすでにパンパンだ。それにさっきやられた傷がぶり返すように痛み出した。

徐々にペースが落ちていく。すでに肩で息をし、全身から汗が吹き出している。

苦しい。吐き気がする。強がったりしてみせたが、大広間で衛兵にやられたダメージがまだ残ってる。

そういえばこの数時間飲まず食わずだ。こんなんじゃ、東門まで持たないかもしれない。

走ることさえできねえのかよ、俺は。

フラフラになりながらも、なんとか足を前に出す。

何度も立ち止まりそうになったが、こみ上げる自らへの憤りがそれを踏みとどまらせた。

やっとのことで中間地点である噴水が見えてきた。何人か兵士の姿もある。

仲間を見つけて、一気に緊張が和らぐとともに全身の力が抜けそうになってしまった。

兵士の一人がこちらにやってきておぼつかない足取りの俺を支える。

「おい、大丈夫か!？」

俺は兵士に身を預けてせえせえ言ってるだけで、なにも答えることができない。

「しっかりしろ!」

力なく崩れ落ちそうになる姿を見て、どこか魔物にでもやられたのかと思っただのだろう。

……ただ逃げてきただけだよ、この役立たずは。

噴水の付近まで肩を借りて歩く。他の兵士も集まってきた。人数はざっと十人ほど。

だがそれぞれがどこかしこに包帯を巻いている。服装が違う非戦闘員らしき女性の姿も数人。

歩けずに座り込んでいるものもいる。果たして戦える状態にある者がいるかどうか。

「西門はどうだ!？ ダレル殿は!？」

噴水の段差にもたれるように座る俺に、矢継ぎ早に質問が飛んでくる。

何とか話せるくらいには呼吸を整えることができた。

「……に、西はダレルがふんばってくれている。大丈夫だ、ただ……」

そうだ、東門の魔物だ。こんなところで休んでいるわけには……。

「ダレル殿は来れないのか!？」

「まだ西門にも魔物が途切れないんだ。だから……」

あたりに落胆の気配が漂う。

やっぱりみんなダレルだけが頼みの綱だったんだ。

それもそうだ、まともに戦って勝負になるのはあいつだけなんだから。

それだけが気になって俺に……。

「でも、向こうが片付いたらすぐ来るって！ それまで誰か俺と一緒に東門へ行って……」

「無駄だ」

兵士の一人にびしゃりと言いつ放たれた。最後まで言わずともわかりきっているといった様子だ。

だけど俺だって役割だけは果たす。

「いや、倒せないのはわかってる。けど、ダレルが来るまでの時間稼ぎぐらい……」

「無駄だと言っている!」

兵士が苛立ちをぶつけるように怒鳴りつけた。

その勢いに押され口をつぐむ。

「……すまん、ダレル殿が来れないと聞いて、気が立ってしまった。だが、我々がいくら集まるうと時間稼ぎにすらならんのだ。ヤツはこちらのことなど眼中にない。目もくれることもなく、暴れるだけだ」

「行ったところで何も変わらねえ。もうお手上げだ」

「くそつたれが！」

「情けなくて笑えるぜ」

堰を切ったように愚痴をこぼす兵士たち。みんなやるせない気持ちを抱えていたようだ。

「……だ、だからって……」

何もせずにこうしてるのかよ、とは言えなかった。無駄死にしろと言つのだと同じだからだ。

だいたい俺にこの人たちを攻める資格なんてない。戦ってすらいない俺が。

「援軍の望みは薄いな……」

「西門に向かうか？ 無駄かもしれんが」

「城へ小型の魔物を入れないためにもやはりここで待機すべきだ」

すでに兵士たちの話し声も右から左へ抜けて頭に入っていない。俺はどうすることもできない自分に嫌気が差し、自己嫌悪に陥っていた。

「將軍は今頃どこに……」

「王は無事だろうか……」

……王様か。あの人、大丈夫かな……。
昔世界を救ったって言うが、あんなんで戦えるわけがない。
元勇者か……。

……そうだよ、勇者だよ。ちきしょう、こんなときに勇者は
なにやってんだよ……。

勇者は……。

そういえばエレナは……無事だろうきつと。

今頃は城の地下に避難してるはずだ。

でも怒ってるだろうな。無視してほっぽって来たから。

どうしてもあの剣が気になってたみたいだから、案外引きずって
歩いたりして周りに迷惑かけてたりな……。

ははは……。

そう、あんな風に。

「言人おっ！」

その声にはつと我に返る。

ぼやけた視線の先には、エレナが怒りの形相で剣を引きずり歩く
姿が。

それに気づいた兵士たちの間からもどよめきが起こる。

少女が剣を引きずる異様な光景に、誰もが息を呑んで目を見張る
ばかり。俺も同様だ。

やがてエレナは噴水のそばに座り込む俺の元まで到達する。

剣を傍らに倒すと、紅潮させた白い顔を近づけてきた。

荒い息遣いをしている。幻じゃない。

「はー、はー、おまえ、よくも、無視、したな？」

ぎろり、と青い瞳が睨みつけてくる。だがゼーゼー言ってるせい

か全然迫力がない。

緊迫の連続だっただけに、いきなりエレナが登場し怒っているのを見ると、なんだか安心してどこかおかしかった。

「笑ってんじゃねえっ！」

がしつと髪の毛をつかまれ、顔を目と鼻の先へ引き寄せられる。顔近いつて。

「いてて、やめろ、レスラーかお前は」

「あやまれ。おい、こら」

「……ごめんなさい」

しつこそうだからさつさと謝っておいた。

お前は肩をぶつけられた不良か。んで俺は気の弱い中学生かよ……。

「ふん」とエレナが俺の頭から手を離れたところで、たまらず兵の一人が声をかけてくる。

「お、おい、城から来たのか？ 様子はどうだった？」

「知らない。あたしはまーっすぐこっち来たから」

……あの後ずっと追いかけてきたのか。その重い剣を引きずって。それでやっと今ここまで来たんだな。

「エレナ、避難しろって言っただろ、なんでついて来るんだよ！」

「なんだよ、逆ギレかよ。はん」

エレナは悪びれる様子もなく言い返してくる。まったく、子供かこいつは。

「そうだ。ここは危険だ、こうなったらお前も避難しろ！ 一緒に城にもどれ！」

俺達に向かって兵士が言い放つ。

だがエレナはそれを無視し、傍らの剣を持ち上げる。

「ほら、忘れ物だぞ」

そう言っただけに、差し出してくる。

どちらにせよエレナに持たせるわけにもいかないのだから、仕方なく立ち上がって受け取った。相変わらず重い。

改めて剣を眺める。

聖剣、らしいが、お前いつになつたら力を発揮するんだ？ もし本物なら見せてみるよ、今がその時だろ？

王様があなたになつても大切にしてたんだろ？ ご大層な場所に置かれててさ。その期待を裏切るのかよ。

…… ああ、とんだまがい物なんだっけか。失礼しました。

今はこんな剣でさえも異常に憎らしい。何もできない自分を見ているみたいで。

第十一話

「……言人。本当にあたしに力を、貸してくれるのか？」

エレナが突然かしまつて言う。怒られる前の子供のような、そんな上目遣いで俺を見つめながら。

……俺が力を？ なんの力もない俺が？

今だつて必死こいて走り回ったあげく、結局何の役にも立ってない。

エレナが現れなかったら、うつろな気持ちのままただげつと座り込んでいたことだろう。

エレナを見守るって決めはしたけど、本当に見ているだけしかできないんだ。

魔物に襲われたりしたら、助ける力もない。……せいぜいさつきみたいに逃げて助けを呼ぶぐらいしか。

自分の身の程もわきまえず偉そうにつきまとうなんて、迷惑以外の何者でもない。

どうしようもなく情けないけど、ここは正直に……。

「……ごめん。やっぱり俺は口だけだった。とてもお前の力になんてなれそうもない」

「……そっか。そーだよ……。いきなりこんな所に連れて来られてそんなこと言われてもな」

わずかにうつむくエレナ。声は平静を装っているが、表情を隠すのはうまくない。

視界の隅に映ったのは、俺が帰りたいたった時に見せた、あの顔だ。

……やめてくれ。その顔は、見たくない。

「よく考えたらさ、お前が俺のことを気にかける必要なんてないじゃん。自分のことは、自分で何とかするよ」

「い、いや、それは……」

ひよつとすると俺を呼び寄せたのはやっぱりこいつで、なんとか元の世界に戻そうと責任を感じているのかもしれない。

でも仮にそうだとしても無理にそんな役目を負わすことはない。俺のことなんてほっておけばいいんだから。

本人だって方法がわからないんだ、だったらこれ以上頼る必要性もない。

第一今はそれどころじゃない。

「ほら、だから避難だ。剣は俺が……。しかしなんだってこの重いだけで邪魔な剣を……」

「だ、だって……」

エレナは言いよどむ。

……だから、その顔はやめてくれ！

「こんな剣……」

忌々しげに睨みつける。

鈍色の刀身は刃こぼれこそないものの、ところどころ泥がこびりつき薄汚れている。

どこをとっても平凡。ゲームだったら間違いなく序盤の武器屋で売ってるような。

ダレルの大剣と打ち合いでもしたら、簡単に折れてしまいそうだ。こいつにダレルの剣のような力があれば……。まああり得ないだ

ろうけど。

もしあったとしても、どうせ俺には扱えないだろうな……。あの
大剣だって、おそらくダレルにしか使えないのだろうし。

精霊に祝福がどうたらって言ってたしな。

……いや、待てよ？

これを抜いたのは俺だ。俺以外には誰も抜けなかったと大臣が言
っていた。

ふと思い出す。この剣を抜いたときの事を。

そうだ、あの時こいつは光を……。目も開けていられないほどの
輝きを放ったんだ。

そして不思議な、だけど心地よい音を奏で出した。

ただの金属の塊じゃない。まるでそこに意思があるかのような……

…。

「……………最後はこいつに賭けてみるか」

「え？」

「また笑われちまうかもしれないけど」

「やっぱり嫌なんじゃないのか？」

「何がだよ？ だから戦うんだよ、こいつで！」

「戦うって……どんなひどい目に遭うかもしれないんだぜ!？」

「このままじゃどっちにしる死ぬだろ？ 最高にミジメなままで」

このままじゃ元の世界に戻るところか、さらに異世界に行っちな
いそうだしな。

ダメでもともと、はなから期待なんてしてない。

「それにせつかくどこかのおバカさんが、必死こいて持ってきてく
れたんだしな。使ってやらなきゃかわいそうだ」

最後まで喜ばしてやりたい。

……きつとこいつもこの剣を信じているからこそ、こんなところまで持ってきたんだろう。

「……………ありがとう、言人」

エレナが俺をまっすぐ見つめて微笑む。一瞬で心を奪われそうなあどけない、優しい笑顔。
すごく嬉しそう。

俺はただ、この顔が見たくてこんなバカな事をしようとしているのかもしれない。

「じゃあ行ってみるか。……東門まで辿りつけっかな」

剣を持ち直し、東の方角へ体を向ける。
持っていくだけでもとんだ重労働だ。体力が持てばいいが。
周囲の奇異な視線を一身に浴びるも、どこ吹く風と受け流す。気にしない、気にしない。

「よし、行くか」

すぐ横で胸を張るエレナ。

……なんで勇ましそうにしてるんだよ。

「……おい、待て。お前は帰れ。アホか」

「なんでよ？ あたしがいなきゃ始まらないだろ。さて、うまくいくかな、っつと」

エレナが剣の刀身に手を伸ばす。

おい、いくらナマクラでも危ないぞ、と言おうとしたその時。

光る。

剣が。

エレナの全身が。

まばゆい光で目が反射的に閉じた。

瞼に太陽をまっすぐ見た後のような残像。

再び目を開ける。エレナの姿はどこにもなかった。

でも俺は驚かない。エレナがどこにいるのか、わかっていたからいきなりなことでもまだ頭が追いついていないけれど、これだけは確かに言える。

この剣は、やはり本物だったんだと。単に中身が空だったただけなんだと。

剣が光った瞬間、それを知った。

今俺の体には、剣を抜いたときに聞こえたものとよく似た美しい旋律が流れている。

あの時もあったんだ。どこかで聞いた音色だって。その直感は何違ってたかった。

それは異世界へ俺を呼んだ天使の歌声。助けを求める悲哀に満ちた声。

ずっと気になっていた。

「俺を呼んだのはやっぱりお前だろ？」

「……………たぶん。自分でも無意識だったけど、どうやらそーみただ。なんか恥ずかしいな」

剣へと問いかける。意識に直接語りかけるように返事が聞こえた。それでも戸惑う事はない。

断片的ではあるけれど、頭の中にいろんな情報が飛び込んできた

んだ。

何が起ったのか、何が起きているのか。全部俺にはわかってい
る。

「でもなんで俺なんだろうな」

「……わからないけど、言人が一番最初に応えてくれたからだ、と
思う。……でも、どうして」

さつきからなんでなんでって、バカみたいだな俺達。

「困ってる人を助けるのはロープレの基本だろ。……それに助かつ
た人に感謝されたりとか、平和になった町とかってなんかいいよな」

それでエンディングで泣いたりね。……キモイかもしれないけど。

「……一緒に戦ってくれるか？」

「ああ、もちろんだデイ　ロス」

「誰がデイ　ロスじゃ」

改めて手にした剣を見つめる。

剣はその姿を変えていた。

刀身は常に薄く光を帯び、輝きを絶やさない。

鍔部分は翼をかたどった黄金のレリーフで、中心に蒼い宝石がは
まっている。

天使の美しいはばたき。俺はそんな印象を受けた。

先ほどまでの重さはどこへやら。片手でも軽々持てる。プラバッ
トよりも軽い。

だがそれでいて凄まじい存在感。長さそのものはほぼ変わらない
が、その雄大さはダレルの大剣をも凌ぐほど。

「お、おい！ どうなってるんだ！？ その剣は……」
「さっきの少女はどこに!？」

やがてあっけに取られていた兵士たちが、血相を変えて詰め寄ってきた。

一応説明する事はできるが、今は時間が惜しい。こうしている間もダレルたちは戦っているんだ。

東の巨大モンスターと応戦している人もいるかもしれない。

俺がこの剣でどこまでやれるかわからないけど、こんな所でぐずぐずしている場合じゃないはずだ。

一刻も早く東門へ。ダレルが来るまでの時間稼ぎぐらいはしてみせる。

「どいたどいた、細かいことは生き残ってからだ」

集まる兵士を手で払いのけ、呼び止める声を背に俺は東門へ向かって走り出す。

「よし、行くぞアト イト」

『違っつっのー!』

第十一話（後書き）

やっと剣が覚醒しました。長かったです。

第十二話

すでに恐怖心はなかった。

何が飛び出すかわからない暗がりにも一人で飛び出すなんて、まともな神経じゃない。

ましてやその先に待ち構えるのは未知の巨大モンスター。

これで怖気づかないヤツがいたら、そいつはマジもんの勇者か、気が触れた変人だろう。

みんなには後者だと思われただろうな。

でも俺は一人じゃない。すぐそばにエレナがいる。意識の片隅で偉そうにあぐらをかいて。

それだけで心が安らぐ。気持ちが悪く落ちて着く。ビクビクしながら逃げるように駆けていた時とは違う。

それどころか体の奥底から気力がわきあがってくる感じ。

それに剣が行く手を明るく照らしてくれている。

その光は太陽よりも暖かく、優しく、頼もしい。

手に吸い付いて離れない剣は体の一部と化し、もう一つの生命がこの身に息づいたかのようにだ。

だが確かにこの剣には意思があった。命があった。

こうしてエレナと繋がった俺は、かすかに彼女の記憶の片鱗に触れたのだ。

剣に溶けた少女が何を思い、何を考え、何を願うのか。

少しだけ、わかった気がした。ほんのちょっとだけだ。

足を踏み出してすぐ、腹部に鈍痛が。

短い休憩でごまかしていたものの、積み重なった疲労でガタがきていた体は正直に悲鳴を上げた。

精神力は満ち満ちていたが、肉体はすでに限界だった。

……まったくだせえな、いくらこの剣がすぐたつて使い手がこ
れじゃ……。
でもへばるわけにはいかない。ここは我慢だ。エレナに笑われち
まう。

だがその時、ふと体が軽くなった。

全身を覆っていた痛みと疲れが一瞬にして消えたのだ。体が新し
く生まれ変わったかのような感覚。

それどころか体の芯から活力がみなぎってくる。

それは体中を駆け巡り、手足の節々に至るまで肉体の活性化を促
す。

これならいくらでも走れそうだ。むしろ動き回っていなければエ
ネルギーがあふれ出て暴発しそう。

よくわからないけど、これも剣の力のなのか？

体力が戻ってくると、今度は走る速度に不満が出てきた。

無限に体力が続こうと、俺の脚力ではこのスピードが限界。

今は一秒でも早く目的地にたどりつきたい。

もつと速く。速く。気持ちだけがはやる。

すると突然周りの町並みがぶれだした。

頭に血が上って視界がおかしくなったのかと思ったが、違った。

流れる景色は、列車から眺める窓の外のように。

空気の抵抗が強くなって、びゅうびゅうと風を切る音がする。

いつしか目を開けていられないぐらいにまで、体は加速していた。

まっすぐ東門へ向かって猛然と疾走する。明らかに人間の限界を
超えた速度で。

叩きつける風に息苦しさを感じると、すぐにそれもなくなった。

同時に風切り音もやむ。

とにかく体が軽い。俺一人だけ重力がなくなったんじゃないかと

思ひほど。

これがこの剣の力？ 魔法の力ってヤツなのか？
でもこいつは決して無機質なものじゃない。
明らかに俺の意思を汲み取っている。俺の願いに応えてくれている。

剣に問いかける。

「これはお前が……？」

『まだ本調子じゃないけどな。今はできる範囲で』

やっぱりかよ……。こいつは反則だ。お前連射機使っただろとか
言われちゃう。高 名人ごめんなさい。

「俺さあ、RPGでいきなり改造とかチートとかやるとむなしくなるからさ、嫌なんだよな。それに今だって真面目に鍛錬してる人に悪いような」

『……よくわかんないけど、あたしを使えるのは言人だけだ。ずるくもなんともないよ、それも含めてお前の強さなんだからさ』

俺の強さ、か。俺は強くなったのか？

確かに逃げ足ならメチャクチャ速くなったな。これで魔物に襲われても安心。

……おい、それじゃダメだろ。

かすかに大地の震動を感じる。それに物が崩れるような音がおそらく東門付近で巨大型の魔物が暴れているせいだろう。その時、行く手の先に不自然な黒い塊を発見する。

魔物だ！

思考が緊急停止した。

代わりに魔物に襲われた兵士の苦痛にゆがむ表情が、脳裏にフラッシュバックする。

こみ上げる焦燥と嫌悪感。そして恐怖。サツと頭から血の気が引くを感じた。

影は二つ。犬型のモンスターだ。兵士四人が俺を逃がしたあの時と同じ。

戦いの結末はわからないが、全員無傷ではすまないであろうことは確実だった。

いや、もしかすると……。

俺はもう逃げるつもりなんてない。今はちゃんとした武器だってある。

第一こんなのに恐れをなしていたら、この先控えているボスと戦うなんて土台無理な話だ。

だが、その意志に反し体が勝手に反応しようとする。心の底で、本能が敵を恐れていた。

一度まとわりついた恐怖心とはこうも執念深いのか。

飛ぶように地を蹴る足が急ブレーキをかけようとする。

しかし猛スピードで進む俺の体は、一瞬で魔物に肉薄していく。ダメだ……、間に合わない！

『言人！』

右手に握った剣が名前を呼ぶ。

心の中の、さらに一番奥底で意識が目覚める。

俺は、その声に応えなければならぬ。その声に呼ばれて、俺はここに居るのだから。

その声と共に戦うと決めたのだから。

踏み込む足が力を取り戻す。

魔物の目前でさらに加速した。もう勢いは止まらない。剣を携えた右腕に力を込める。

片手で魔物をのけるように右へ切り払い、がむしゃらに剣を振り下ろした。

なにがなんだかわからないまま、夢中で剣を振るう。

光が音もなく空間を裂き、弧を描いた。

そして俺はそのまま立ち止まることなく走り抜けた。

魔物に食いつかれた様子は……ない。追いかけてくる気配もない。

手ごたえもほとんど感じなかった。が、かすかに真っ二つになった霧のような残像を目の端で捕らえていた。

あれは魔物が消滅するとき起こる現象。さっきも何度か見た。

もしかして俺は……。

『やったな。ちょっと驚いたけど』

エレナが弾んだ声で言う。

闇雲に剣を振り回したただけだったが、どうやらゲンさんも真っ青な逆風の太刀が決まっていたようだ。

ほぼ二体同時に撃破したのか……？

「し、信じられねえ……。俺が……。……よし。この剣を流星刀と名付けよう」

『おい、勝手に決めんな』

「じゃなんて言うんだよ」

『え？ え〜つと、え、えくす、かりばー？ ……みたいなやつ』

「つまらん、ありきたりすぎ」

またしても怪しいなこの小娘。王様は何て呼んでたんだろぅな…
…。
っとそんな場合じゃない。また魔物が入り込んできているということ、標的は近いな。

それにうかれるのはまだ早い。さっきのはただの雑魚だ。
けど今ので一気に自信がついた。これなら、やれる。俺だって戦える。

もしかしたら、ダレルと肩を並べて城を守りぬけるかも……。

く。
だが芽生えだしたわずかな希望を、彼方から届いた轟音が打ち砕く。
その咆哮は空気を振動させ、大地を揺るがし、人間をすくみあげらせる。

一層激しくなる建物の崩壊音。目的地はもうすぐそこだ。
轟音をエレナの力でシャットダウンし、高速で進む視界の先に巨大な影を確認する。

ついに俺は遠目にその全貌を捉えた。
その姿は、さっき得た俺のちっぽけな自信を瞬く間に吹き飛ばしてしまった。

第十三話

東門付近はすでに当たり一帯が焼け野原と化していた。火がそこから中でくすぶりあたりに煙が立ちこめている。

門だけでなく城下町と城全体を囲う城壁部分さえも崩されていた。この巨獣は律儀に門から接近したわけではないようだ。

そりゃそうだ、城壁を破壊する力があるんだから。

それでもまつすぐ城に猛進しないのは、ただ暴れるだけが目的なのだろうか。

緩慢な動作ながらも確実に町を廃墟と変えていく。

だがこんな巨大な魔物の接近に前もって気づくことがないというのはどうにも違和感がある。

見張りの兵士がサボってたのか？ …… そんなレベルじゃないな。

俺は魔物と一定の距離を保ちつつその挙動を傍観していた。

相手は俺のことなど眼中にないようで、襲ってくる気配はないものの、こちらも一体どうやって戦えばいいのか完全に手をこまねいている状態だった。

俺が知っている動物の中に、こいつを例えられるような大きさのものはいない。

巨象？ そんなもんじゃない。共通点は四足歩行だというくらいしかない。

体長はおそらく十五メートル以上はあるはずだ。

獰猛な瞳に牙、体毛はやや緑ががかっていて、頭頂部からしつぽ付近までたてがみが続いている。

四肢の先には鋭い爪。人間が触れたら一瞬でミンチにされるだろう。

前足を叩きつけるようにして破壊行為を行っている。そのたびに粉塵が舞い、震動音が響く。

動物と言うよりも怪獣という言葉がぴったりだ。ウルト マンでも三分以内に始末できるかどうか。

さつき兵士が言っていた意味がわかる。ちつぽけな人間が何をしようといいつには通じないって。

確かにこの剣の威力は凄まじい。腕を振るっただけで軽く魔物を切り離してしまっただから。

だが今度は先ほどの雑魚とは勝手が違う。切り付けようにも大木に彫刻刀を突き立てるようなもの。

切れ味云々の問題ではない。……小さく自分の名前とか彫ってもしょうがないしな。

急所狙いで長期戦に持ち込めばあるいは……。

しかし向こうがどんな攻撃手段を持っているのか定かではない。正面から戦いを挑むのは無謀だ。

みみっちい攻撃でもしたら強烈な反撃が返ってくるかもしれない。……なんかカウンターでメ 才使ってきそうだし。

一発で真っ二つにするには、今の十倍、いやそれ以上の大剣が必要だ。

だがそんなものは……。

「おい、お前何をしている！ 逃げろ！」

魔物が暴れる音に混じってどこからか人の声が聞こえた。

振り返れば負傷者に肩を貸し魔物から遠ざかる兵士の姿が。

まだ戦っている人がいたようだ。俺は急いで駆け寄る。

「だ、大丈夫か!？」

「なぜこんな所に！ 中央に伝令を送ったはずだぞ、応戦しても無

駄だと！」

「そ、それでもなんか出来ることはないかと思って……」

「もうここは駄目だ。すでに皆退却済みだ。……姿の見えなくなつた仲間も何人かいる。これ以上ムダな被害者を出さないためにもここは退くんだ」

「そ、そのうち援軍が来る！ ダレルだつて……」

「厳しいかも知れんな……。ここで死ぬのは簡単だが、地下に逃げ込んだ人々をどこか安全な国に届けるまではまだ……」

確かにダレルでもこいつは……。それにあいつもかなり消耗しているはずだ。

そもそもまだこっちに向かつてきているという確証もない。

敵襲が止まなければずっと西口に釘付けなんだ。

とはいえ、どっちにしろみんなを逃がすために時間稼ぎが必要みたいだな。

……やっぱりやるしかない。

「エレナ！ ブンクだ！」

「……なんだよそれ」

「リイズは使えないのか？」

「はあ？」

ダメか……。後でエレナにお勉強させておかないと。

「ブツブツ言つてないで早く非難しろ！ こっちもお前に構つてる余裕はないぞ！」

「ああ、先に行つててくれ。………もうちょっと見物してから行くから」

聞こえたのか聞こえなかったのか、兵士二人は俺を置いて中央へ

向かっていった。

途中で魔物に襲われなきゃいいが。

残された俺は一人魔物と対峙する。破壊の限りをつくす巨大凶悪モンスターに立ち向かうのだ。

……つっても相手はケツ向けて模型崩しに夢中だけど。

「さて、じゃあやってみるか」

『そーだよ、さっさとやれよ』

「ちびマ オになった気分だぜ。ちよつとでも敵に触ったら即死しそくな……」

『そんなんで死ぬわけねーだろ』

「……お前、さっきからなんでそんなに余裕なんだ？」

『だってヨユーじゃん。ははっ』

「こんなみみっちい剣の癖して偉そうに」

『あんだと？ 剣がみみっちいのはお前のせいだろ』

なんで俺のせいなんだよ。ったく。

でも俺も大人だ。こんなお子様とケンカしても仕方ない。

「エレナちゃん、いい子だからさ、こうどかーんと強力な魔法みたいなの一発頼むよ」

『お前後で覚えてるよ……。そんなの使わないからな』

「使わない？ 使えないという認識でよろしいでしょうか？」

『……………すごいむかつくぞお前。そんなもんを使ってもしょうがないってことだよ。どうやってあれを倒したいんだ？』

「そりゃできれば一撃でぶっ潰したい。だがそりゃ無理つてもんだろ」

『お前がそう思っている限りはそうだろな。……でもそうかな？ 絶対誰が何をして倒せない？』

なんだよこいつ……。いきなりおかしな事を……。何が言いたいんだ？

超 武神 斬でもかませばいけるかもな。でもあんな真似できるか。だいたいいりミットブレイクしてないし。

あいつを倒すには……。超巨大な武器。

「そつだ、ダレルの武器みたいに巨大化すれば……」
『決まったな。……。後は言人しただよ』

俺しだい……。もしかしてさつきみたいに意思を汲み取って形にするって事か……？

目の前で見えたダレルの剣の破壊力は、今も鮮烈に印象に残っている。

迫り来る魔物を物ともせず、一薙ぎで消滅させたあの一撃。剣が巨大化するなんて、普通じゃあり得ない馬鹿げた現象。

とにかくあの時の状況とか、俺の心理状態とかもあってメチャクチャカッコよかつたんだ。一発で懂れた。

あれを俺なんか……。？

いや、違う。そうじゃない。この巨体をぶった切るには、あんなもんじゃ足りない。

あれをはるかに超える一撃を。

……。冗談きついな。できるわけない。

今になって思えば、ダレルがいたところであいつには通用しないかもしれない。

ベストの状態でも厳しいと言うのに、ダレルはきつと疲れ切っている。

とてもあんなのとやりあう余力が残っているとは思えない。

つまりはなからこの国はここで滅亡する運命だったのかも……。
將軍、とやらがいればまた違ったのだろうが、いない人間の話
しても仕方ない。

誰も対抗できる人間がいないんだ。
かつての勇者だって今は……。

違う。そんな運命なわけない。

大臣は言ってた。「今こそ聖剣の力が必要不可欠」だと。

アルフレッドは聖剣が自分に応えてくれなくなっても、捨てたり
なんかしなかった。

大切に保管して、再び剣を手にする人間を探すよう命じたんだ。
またその力が必要になると思って。

だから、これを抜いてしまった俺には全力で戦う務めがある。

この剣は、勇者が遺した、最後の希望なんだから。
そいつを簡単に、裏切るわけにはいかない。

第十四話

剣を両手で頭上に掲げる。

まるつきりさつき見たまんま。ダレルの猿真似。

だけど闘志の強さなら負けてない。

戦闘経験がない、とか武器がない、だとかっていう言い訳はもう通用しない。

だってこれは小手先の戦闘技術が物を言うようなレベルの戦いじゃない。

それに剣は間違はなく本物。エレナにしてみればあんなヤツ余裕剣を扱うのがアルフレッドなら楽々倒してしまえるのだろう。

つまり単純に俺が弱いだけ。

剣を抜いたのが俺じゃなかったら？ エレナが呼びよせたのが俺じゃなかったら？

俺のせいで国が減ぶなんて、そんなこと、絶対……！

俺の想いを受け取ったかのように、剣が鳴動する。

これは……幾度となく聞いた心地よい歌声。これまでで最も生き生きとして、喜びに満ちている。

剣が煌きを増し、光が膨れ上がる。周囲が昼間のように明るい。刀身が変化しても、手に伝わる重さはまったく変わらなかった。

これでダレルの剣と五分。だがこんなもんじゃまだまだ。

こいつをさらに……超える！

その時魔物の動きに異変が。

異常なエネルギーの発生に危険を感知したのだろう。

俺のことなんてそっこのけで暴れていた魔物が急に方向転換し、こちらを正面にして向きを変えた。

俺を「敵」と認めたのか。……さすがにこんだけ目立ちゃ、気に

なるわな。

ズシンズシンと大地を踏み鳴らし近づいてきた。距離がずんずん縮まる。

このままだと……、踏み潰される!?

『集中!』

浮き足立ちかけた俺を叱咤する声。

ここでビビって逃げたら水の泡だ。エレナにも相当バカにされるだろうな。

だけでもう逃げない。そう、集中だ。

まばゆい輝きはさらに天を衝き、はるか頭上を駆け上っていく。もはや自分でもどこまで伸びているのかわからない。

地上にあるはずの剣に、天空より一筋の光芒が舞い降りているかのよう。

これが、聖剣の力……。

眼前に迫る巨体。

巻き上がる砂塵と石礫が視界を曇らす。

獲物を捕らえた野獣の瞳が、咆哮と共に俺を威嚇する。すでに間合いは巨獣の攻撃範囲内。

振りかぶられた巨大な前右足が、横殴りに俺を……。

その刹那。

地上に光の斜線が降り注いだ。

光の粒子が音もなくキラキラと舞い、闇に包まれた大地に輝道を照らし出す。

あたかも人知を超えた自然現象のよう。

果てしなく続く白い束は、混沌から人々を救う一本の光の架け橋となった。

魔物は跡形もなく消滅した。
水平線の彼方まで届いた剣が無に還したのは、邪悪な巨体のみ。
光はやがて夜の闇に吸い込まれていった。

「や、やった……」

振り下ろした剣を見下ろす。

今ので力を出し切ってしまったのかと思いきや、刀身を包む微光が消える事はない。

まだやる気かよ。とんでもねえ剣だなこいつは……。
でもこれで……。

カツ！ ガクン。

目の前がフラッシュしたかと思うと、突然剣が重くなった。
体がつんのめるような形になる。

何だ？ ……あ！ 剣が、元に戻ってる！
光を纏う聖剣が、鈍色の長剣に姿を変えていた。

「やったな、言人！」

不意にすぐ隣から声が。

驚いて首を振ると、そこには微笑むエレナの姿が。
いきなり前のめりになっている俺の首っ玉にかじりついてきた。
驚きの連続に、目が点になる。エレナの方から抱きついてくるな
んて。

両腕で抱え込まれて、ああ……いい匂い……。

……ん？ お、おかしいな……く、苦しいぞ？

「……あ、あの、エレナさん、首、締まって、るんですけど」
「あん？ なんだって？ 聞こえねえよ」

ギリギリと締め付けてくる腕。
の、喉が潰される……。

油断していたせいもあるが、あまりにも綺麗に決まっけていて外れない。

ぐう、こ、呼吸が……。

この細腕のどこにそんな力が……。耐え切れずやみくもにエレナの体をタップする。

「あんっ」

なにやら艶かしい声が聞こえた後、チョーク攻撃が止んだ。
エレナは手を離すと今度はささと距離を取る。忙しいやつだ。

「てめーどこ触ってんだよ！ 信じらんねえ！ 変態か！」
「いきなり現れて締め落とそうとする方が信じられんわ！」

両手で自分の体を抱きかかえるようにして睨みつけてくる。
何だよ俺が悪いのかよ？ もう少して意識が飛びそうだったんだぞ？

もしかしてさっきの、まだ怒ってんのか？

「お前案外根に持つタイプなのな」
「はん、なめられてたまるかよ」

お前はどこのヤンキーだ？ いや、今日びヤンキーってのも……。いちいち発言には気をつけるってか？ めんどくさいヤツだ。

「にしても見たか？ 今のすごかったな」
「まー、ほとんどあたしのおかげだけだな」

よく言うよ。あとは言人しだい、とか言っておきながら。

「あたしが九十五割ぐらいかな。おまえには五割ぐらいくれてやる
う」

「お前バカだろ」
「あんだと!？」

また今にもつかみかかって来そうだ。だが今度は反撃を警戒しているのか、むやみに取り付いてこない。
学習能力はあるみたいだな。

……と、遊んでる場合じゃなかった。

このあたりにはもう魔物は見当たらないけど、西の方はどうなっているだろうか。ダレルは？

早く状況を確認しなければ。

でもまさかあの巨大型モンスターを俺が撃退したとは夢にも思っ
てないだろうな。

みんなびっくりするに違いない。

えらい褒められちゃうなこりゃ。

「おまえ何にやついてんの？ やらしい事考えてんじやないだろう
な」

「いやらしい？ 確かにある種いやらしいかもな……ふふふ」

「うわっ、危ねえこいつ」

自然と勝利の笑みがこぼれていたようだ。

エレナにこのさわやかスマイルはまぶしすぎたか。あんなに離れ

ちゃって。

「おい、そんなに離れるなよ、魔物がまだいるかもしれないだろ」
「だから魔物から離れてんだよ」

俺魔物扱いかよ……。ひどいやツだ。

「とりあえず西門のほうへ向かおう。……なあ、この剣また重くなつたんだが、どうにかならないのか？」

こいつを持っていくのは骨が折れる。また軽くしてくれないかな。

「いやあ、あたしもよくわかんないんだけどさ。乗り移ってないと元に戻っちゃうみたいだな」

この剣に関して。

エレナが剣に溶け込んだとき、俺の頭にもいくらか情報が流れ込んできた。

彼女が元は剣に憑依した存在だということ。

剣を抜いたショックかなんかでそれが解けてしまったこと。

その時ちよつと記憶も飛んだらしい。ついでに俺の言語能力も上がったそうだ。

いや、俺としてはただ普通に日本語を話しているつもりなんだが、なんか知らんが通じるようになった。

とにかく言葉を交わしたいと思っていたから、おそらく剣の力と関係があるのかもしれない。

だがエレナに関して、肝心な部分。

なんで剣に憑依なんてしていたのかは一切わからない。

今は出たり入ったりできるみたいだが、それまではずっと剣の中

だけの存在。

そもそもあいつ何者だ？ 人間なのか？ とり憑いたりするのって幽霊とかの類じゃないのか？

「なあ、お前って一体なんなの？」

これはいい質問だ。大胆。我ながら男らしい。だが言い換えればデリカシーのかけらもない。場合によってはその場で絶交されてしまうかもしれない。気が弱い人なら相当へこんでしまうだろう。

しかしこれが俺だ。回りくどいのはキライなのだ。それにエレナにはこれぐらいが丁度いいだろう。生意気な小娘で売ってるぐらいだ。

ぬるい関係はゴメンだろ？ ドライに行こうぜ、エレナさんよ。

「な、なんだと思う？」

エレナはなぜか恥ずかしそうに体をもじもじさせて言う。こんなん見たことないぞ。

なんじゃその気持ち悪い態度は。そこはいつもの調子でスパッと言い切れよ。

血液型聞いてんじゃねえんだぞ？ なにじらしてんだよ。

「さあ？ でも人間じゃないよな」

またも直球。いや、だって普通に考えてあり得ないだろ。剣に乗り移って出たり消えたりして。

「そ、そう？ みんな人間だと思ってるじゃん」

「その言い方だと違うみたいに聞こえるんだが」

「そ、そんなに気になるかあ。そうかあ〜」

照れ笑いしながら頭をかくエレナ。

うわ、なにこれ面倒くさい。なんなんだよまったく。

「もうちょっと仲良くなったら教えてあげるっ」

「可愛く言ってもダメ。さっさと白状しろ」

「あんだよ、別にいいじゃねえかよ何だってよお！ とりあえず謎の美少女ってことにしとけよ！」

……よくねえだろ。逆ギレかよ。妖怪変化に付きまとわれるのも気分がよくないしな。

しかしなんだって隠したがるかねえ。

もしかしてこいつ、自分でもよくわかってないんじゃないか……？

とその時、遠くからザツザツと足音らしきものが聞こえてきた。あたりはすっかり平らで東門の面影もないが、音はさっき俺達が来た方角から聞こえる。

魔物！？ ……じゃない。

音がするほうを振り向くと、暗闇の中おぼろげに人影が見えた。

一回り大きな影と後を追うようにいくつかの影。

何者かが数人、こちらに向かって走ってきているようだ。

第十五話

「おおーいー!」

呼びかけてくる太い声。この声は……。

「ダレル!」

影の正体はダレルと四人の兵士だった。

東門周辺はところどころ倒壊した建物が焚き火のように燃えていて明るいので、顔の表情まではつきり判別する事ができた。

ダレルはいかつい黒の甲冑を脱いで軽装になっている。部分的に左腕が包帯に巻かれていた。

けど大剣を背負ってやってきたこいつは、まだ休むわけにはいかないといった顔をしていた。

「お、おい! 巨大型はどこいった!? さっきこっちの方がものすげえ光ってたが、あれはなんだったんだ?」

「聞いて驚け。俺が魔物を倒したのだ」

「冗談言ってる場合じゃねえんだよ! どこだ、魔物は!?!」

……怒られた。

後ろの兵士なんて殴りかかってきそうな目つきで睨んでくる。

誰だよ褒められるとか言ってたやつ。

「そうあせんなよオッサン。魔物なんかどこにもいねーだろが」

「んなつ!? 子供がなんでこんなとこにいやがる! 逃げ遅れたのか!?!」

仰天するダレル。兵士の一人が保護しようとエレナに近寄るも、寄るんじゃねえオーラを出されて戸惑っている。

「……こいつはラチが明かないな。エレナ、剣を見せてやるっ」
「めんどくせえな、なんであたしがいちいち……」

渋るエレナ。

憑依してくんないと説得力がないんだけどな……。
とりあえず剣を見せてみる。

「この剣で魔物をぶった切ったんだよ」

「笑わせんなよ。そいつはただのナマクラだっただろっが。まぐだそんなもん持ち歩いてんのかい」

「むっ。なんだって？」

エレナのプライドに火がついたようだ。俺の持つ剣に近寄り、手を伸ばす。

なるほど、けなせばやる気になるのか。覚えておこう。

ピカツと閃光が走る。まぶしいのはわかっていても反射で目をつぶってしまっ。

すぐに輝く剣が再び姿を現した。

案の定ダレルたちは目を丸くしている。

「ほら見る、ねんがんの聖剣をてにいれたぞ！」

「こ、こいつは……。マジもんか？」

「お前そこは殺してでもうばいとる、だろ」

これだから素人は。「な　なにをする　きさまらー！」ってやりたかったのに。

まあ無理もないか。いきなりこんなものを見せられたら。

突如出現した光る剣に、兵士たちは驚きで声も出ないようだ。ダレルだけが好奇のまなざしで見つめている。剣には目がなさそうだからな。

「ちよ、ちよつと触らせてみるよ」

「わっ、やめるセクハラだぞ」

ああつ、やめて。情けなくも強引に剣を奪い取られた。それは俺のだぞ。丁寧に扱ってほしいもんだ。エレナ、頑張つて耐えるんだぞ。

ダレルはお構いなしに剣を荒々しく振り回す。兵士たちは固唾を呑んでその様子を見守っている。

「さつき振ったときと変わってねえ気がするんだが……」

「残念だったな、エレナは他の男にはなびかないのだ」

鍔の紋様など剣の姿はそのままだが、ダレルが手に持ったとたん刀身から光が消えていた。

「なんだって？ ……そういやさっきの嬢ちゃんはどこいった？」

気づくのおせえよ。

エレナの声も聞こえないみたいだな。今は俺にも聞こえてないけど。

きつと悪態ついてそうだな。

気安く渡してんじゃねえよ！ とか。

その時またしても閃光が。

目を開けると早くもエレナが現れ、剣が元に戻った。

「おわっ！ ……なんだ？ どうなってるんだ!？」

「不思議少女エレナちゃんだ。よろしくな。……つぐつ」

無言でひじ鉄を脇に入れられた。

犯人は知らん顔でそっぽを向いている。

でもかわいもんだ、俺以外に触られるのがそんなに嫌だったのか。よしよし。

ちよつと呼吸困難になつてるけど、これも愛情表現の一つなんだろう。

ゆつくりその場にうずくまる俺。

や、やつぱり……く、苦しい。

このクソガキ、マジで入れやがって。加減つてもんを知らんのか？ 今に見てるよ……。

「……と、とにかく聖剣だ。そいつの力でなんとかなつたんだ。あとダレルのおかげだ」

ダレルがいなけりやこうもうまい具合にはいかなかっただろう。

俺なんてエレナと会う前に死んでたかもしれない。

それにさつきもイメージしたのはダレルの剣。

いつの間にか ラスティングゾーンっぽくなつてたけど……。

「聖剣か……オレあ、話に聞いたことしかねえが、あれが本当なら信じられなくもねえが……」

剣を俺に返し、腕を組んで考え込むダレル。かがんで見上げているのもあるが、改めて大きい体だと感じる。

まだ疑っているようだ。兵士たちもおのおの意見しあつてまとまりがない。

でもどうやっても魔物の姿が見えない今、信じざるを得ないという結論に達するのは明らかだ。

「すると嬢ちゃん、あんた、精霊の類かなんか？ 見かけねえ顔だしな……」

「え？ ……ま、まあそんなとこかな」

「ま、そうだろうなあ……。しっかし珍しいなこんなとこで」

なぜか今のでダレルと兵士たちは納得したようだ。

おいおい、そりゃねえだろ、もつと疑えよ。

人が剣に乗り移ったりするのが日常茶飯事なのか？ ここは。

精霊つてのがどんなのかは知らないけど、エレナは挙動不審だし。

まあいいや、これはおいおい追求する事にして、状況把握が優先だ。

やっと痛みがひいたので俺は立ち上がり、ダレルに質問する。

「なあ、西の方は大丈夫なのか？ 魔物は」

「……あ？ ああ、お前と何人が行ってから割とすぐ攻勢は止まった。おかしなぐらい急にな」

おかしいと言えば、俺も腑に落ちない点がある。

「あんなでかい巨大モンスターってしよつちゅう襲ってくるのか？」

「いや、直接城付近に現れたのは聞いたことがねえ。少なくともオレの知る限りでは」

そりゃそうだろうな。だいたいしよつちゅうあんなのに襲われてたらとつくに廃墟になってるだろう。

「まあ悩んでも仕方ねえ。まだ小物がうろろしてるかも知れねえし、夜が明けるまでは完全に気は抜けねえ。町の皆様方は朝まで

地下にカンヅメだな。逃げ遅れは……いるかもしれねえが、もうつかつに身動きしねえ方がいいだろ」

完全に気は抜けない……か。でも滅亡の危機に比べればもう平和になったも同然だ。

俺だってまだまだ戦う力はある。小型の雑魚ならいくらきたって問題ない。

内心胸をなでおろす。

でもこうして勝利を収められたのもみんなのおかげだ。

ダレル、兵士みんな、そしてエレナ。

後で改めて礼を言わないとな。

そういえばエレナにはまだ一言もお礼を言ってなかったな。

「なあ、エレナ……」

と俺が声をかけようとしたその時。

「……………返してもらおうか、剣を」

聞きなれない声がどこからか響いてきた。

俺だけに聞こえたんじゃない。その証拠にみんなが声の主を探して辺りを見回している。

「……………それは、私のものだ」

しわがれた老人のような低い声色。だがその声は異様なまでに透き通り、不気味にこだまする。

「だ、誰だ!？」

「どこから……?」

誰何の声を上げるも、返事はない。必死に周囲に姿を探すも、俺たち以外に不審な人影は見当たらない。

誰もが幻聴かと思いきや、呆然と立ちつくしていると、やがて西方の暗がりから足音がゆっくり近づいてくる。

足音は間違はなく人が歩く音。魔物の類ではない。

だが俺は魔物以上に不吉なものを感じた。それはとてつもなく強い負のオーラ。

とても人間とは思えないぐらいの。悪魔か何かが存在するとしたら、きつとこんな……。

全身に悪寒が走る。戦慄を覚えているのは俺だけだろうか？ いや、そんなはずはない。

これに何も感じないのなら、そいつは動物としての機能が欠落している。

きつとみんな俺と同じ気持ちで固まっているはず。

このままここにいて、いいのだろうか、と。

だが俺の予想は外れた。

くすぶる火の明かりに照らし出されたのは、豪華絢爛な装飾が施された冠と赤いローブ。限界まで痩せ細った老人。

それはこの国の王。そしてかつての勇者、アルフレッドだった。

第十六話

意外な人物の登場に誰もが目を見張る。
すぐにダレルと兵士たちが王の元へ駆け寄った。

「何故このようなところに！」

「危険です、早く城へ！」

次々に言葉をかけるも、まるで聞こえていないかのようにゆっくりと歩み続ける王。

兵士たちは無理に押さえつけるわけにもいかず、注意を促し続けながら周りを並んで歩く。

その進む先は、じっと立ちつくしている俺とエレナの方に向けられている。

ふと横のエレナの様子を伺うと、明らかに顔に警戒の色が浮かんでいる。

エレナは勇者の剣として、アルフレッドに力を貸した。

こいつにとってアルフレッドは共に戦った仲間みたいなものはずだ。

その記憶は剣が目覚めた時、かすかに俺にも流れ込んできた。ただ今エレナは、まるで親の敵を見るような目で……。

王が俺たちの五メートルほど手前で立ち止まる。

「……………さあ。返せ。神剣エレナディアを」

しわがれた口から声が漏れた。

だが本当にこの衰弱した老人が発したものとは思えない、ぞつと

するほど冷たく尖った声色。

神剣エレナディア……？ エレナの名前と同じ……。

神剣？ 聖剣じゃないのか？

「……しょうがねえな。おい、王にそれをお渡ししろ。そいつのこ
とだろ、剣つてのは」

ダレルが困惑の表情で俺にそう言う。

王がいくら呼びかけても無反応なので途方にくれているといった
様子だ。

確かにこいつは城にあったもので、勇者のものだ。

俺が引っこ抜いて勝手に持ってきたんだから、返せと言われれば
拒否権はない。

でも……、渡してはいけない。なぜかはわからないが、そんな気
がする。

躊躇していると、エレナが鋭く叫んだ。

「ダメだ言人！ 渡すな！」

エレナは王から視線を外すことなくじっと睨みつけている。

きつと俺と同じく胸騒ぎを感じているのだろう。

もしかしてそれ以上の物を嗅ぎ取っているのかもしれない。

相手はわずかに身を揺らしながら立ち、その視線の先はどこか中
空をさまよっている。

「……参ったな。おい、嬢ちゃん、こいつは王様の命だ。そうやっ
てはねつけていいもんじゃ……」

「……その剣の名をアルフレッドが知っているはずがない」

ダレルが嗜めるように言うのを、エレナは強い口調で遮る。その瞬間、王の目玉に赤い光がカツと宿った。

ボウッ！

爆発音のような音が聞こえたかと思うと、俺はいつの間にか後ろに数メートル吹き飛ばされていた。

体を地面に打ちつけ転がる。剣は意識して強く握り締めていたため、手放さずにすんだ。

なんとかして身を起こすと、王の周囲にいた兵士たちやダレル、エレナも離れた位置にいた。

みんな同じように見えない衝撃を受けたようだ。

慌てて倒れているエレナに駆け寄る。

「エレナ！ 大丈夫か！？」

「……ああ、たいした事ない。でも気をつける、あいつ……」

高らかな笑い声が響き渡る。

今度のは、間違いなく王の声じゃない。

この声域は、女だ。

「久しぶりですねえ？ エレナディア」

ゆらゆら体を揺すりながら王が近寄ってくる。

その中に、何者かの強烈な意識を感じる。まるで何かを取り憑いているような。

エレナは立ち上がる。どこか怪我をした様子はなさそうだ。

「くだらないお芝居をしてみましたね」

「ラファ……。やっぱり、お前が……」

「少し留守の間にどういうわけか剣が封印から解かれていて、驚き

ましたわ。どうにも解せませんね。ゼス様じきじきの封印のはずなのに。ただの人間には絶対に解けるわけがありません」

何だ？ こいつ……何を言っている？ ゼスって一体誰だ？

エレナには通じているようだが……。

「ならば力の程を見せてもらおうかと魔物をけしかけてみたのですが、思いのほか手こずっていたようですね？ たかがあの程度に」

「お前の仕業か……」

「神剣エレナディア。とはいえ所詮そんなもの。なのに何故……、何故お前ごときがこうもっ！」

再び衝撃波のようなものが巻き起こる。

今度は身をかがめ足を踏ん張りなんとか耐えた。距離があつたためかエレナも無事だ。

「ゼス様はなぜこんな小娘に入れ込むの？ 封印などせずさつさと消滅させるべきだったのよ。私の方がすべてにおいてはるか上。あの時は……何かの間違い」

怨嗟に満ちた恨み言をエレナに向かってぶつける。

反論することなく黙って歯を食いしばるエレナ。

「さあ、かかって来なさい？ 今度はここであなたを消滅させてあげましょう」

王の瞳に宿る赤が全身に広がり、邪悪な波動が体全体を包みだす。悪意に満ちた禍々しいオーラ。それを前にして俺は、剣を取り落とさないように握っているだけで精一杯だった。

エレナは毅然とした態度で言い放つ。

「アルフレッドを、傷つけるわけにはいかない」

「相手が元勇者では力を出せない？ ……いいでしょう、もうこの男は返してあげましょう」

そう聞こえた後、突然アルフレッドが倒れこんだ。

エレナがすぐにそばに駆け寄る。

状況を把握できずにただ眺めていたダレルと兵士たちも、一斉に王の元へ集まった。

だが俺は、その頭上に姿を現した存在に見つめられ、金縛りにあったようにその場を動けなかった。

俺を射抜く鋭い紅蓮の瞳。人の背丈ほどある巨大な白い羽。

腰元まで垂れる金色の髪に、身に纏うのは漆黒の衣。

美しい女性が宙に浮いていた。

まるでゲームとかアニメに出てくるような……。

あれは……、天使？

「アルフレッド！」

「王！ お気を確かに！」

みんな王が心配で気づいていない。空を舞う謎の女性に。

天使のような姿をしているが、あれはどこか……違う。

神聖な存在とは程遠い、凶悪な邪気を感じる。

こうして見つめられているだけで、全身が凍りつき胸を締め付けられるようだ。

それは巨大型のモンスターなんかよりはるかにおぞましく、絶対的な恐怖心を植えつけてくる。

やがて天使は俺から視線を外し、地上に身を降ろすとアルフレッ

ドへと近寄る。

「な、何だ貴様は!？」

兵士の一人が気づき声を上げる。と同時に、天使が華奢な細腕を持ち上げ兵士の胸元に手をかざした。

ドウッ!

次の瞬間、兵士が数十メートル先で仰向けに寝転がっていた。兵士は微動だにしない。

皆が異変に気づき、現れた謎の女性に目を向ける。

ダレルと兵士たちはすばやく距離を置いて身構えた。

叫んだのはまたしてもエレナ。

「天使が人間に手を下すのは禁止のはずだぞ!？」

「殺したわけじゃありませんよ? まだ生きていますでしょう、おそろくは。……邪魔なの」

にたりと妖しい笑みを浮かべ、同じように手をかざす。

ドンッ! ドンッ! と数メートル離れているにもかかわらず兵士が次々に撥ね飛ばされていく。

だが一人だけその攻撃に耐えた戦士がいた。ダレルだ。

わずかに刀身を膨らませた大剣を地面につき立てて、それを盾代わりにして謎の衝撃波を防いでいた。

ダレルの周りに円状の黒い影が出現している。

「あら? 魔力を持った人間がいるようですね?」

「……何もんだてめえは」

天使がゆっくりとダレルに歩み寄る。

ダレルは不敵な笑みを浮かべ、つき立てた大剣に気合を込める。

するとダレルの周囲に展開している黒い円が直線状に形を変え、まっすぐ伸びた影は天使の足元を捕らえた。

だが天使の動きに変化はない。音もなくダレルとの距離をつめていく。

「な……？　グ、グラヴィアスが……」

「それはセフィの武器ですね？　重力系の力のようですが、魔力の源はその武器ですか。……小賢しい」

通用しないと見るや、ダレルは剛剣を引き抜く。

魔物の類と判断したのだらう、ダレルの顔色が変わった。

大剣を振り上げると同時に刀身を巨大化させ、横殴りに斬りつけた。

ゴウツ！　ものすごい風圧とともに刃が襲う。

だが天使は音もなく、素手でダレルの一撃を受け止めていた。魔物を紙のように切り裂くその一撃を。

刃は厳密には天使の手には触れておらず、ダレルが寸止めしているように見える。

おそらく常にバリアのようなものが身を守っているのだらう。

「う……、ど、どうなって……」

「私にも多少は重力系の心得はありますよ？　……ほら」

大剣が投げ出され、ダレルの巨体が不自然に地に崩れ落ちる。

さらに大の字になって、土の上につつ伏せに張り付く。

みしみしと体が地面に食い込むような音。

上から見えない圧力をかけられているようだ。

「ぐおおあああ！」

苦悶の声を上げるダレル。ズズズと大地が揺らいているのを感じる。

だが揺れと悲鳴はすぐに止んだ。

大柄な体はびくりともしない。

ダレルが気絶したのか、はたまた……。

「ダレル！」

なんとか身を奮い立たせてダレルの元へ走り寄ろうとするが、またも天使に一睨みされて体が動かない。

天使はすでにダレルのことなど眼中になく、アルフレッドに寄り添うエレナにゆっくりと歩み寄る。

「さあエレナディア、あなたをこのまま消し去るのは簡単ですが、それだと私の気が晴れませんからね……」

エレナは何も答えない。

じっと仰向けになったアルフレッドの背中を支えている。

「いつまでそうしているのです？ もはやその抜け殻には何の価値もないでしょう？ ……しつこい男でしたよ。さすが人が勇者と呼ぶだけの事がありました。私の呪縛の中にいながらも、何度も意識を甦らせては反抗の意志を示す。だが今は……」

その時、小さくささやくような声が漏れた。

「勇者が、再び目を覚ましたのだ。」

「……………君は……………」

「アルフレッド！」

アルフレッドは上体をゆっくりと起こし、エレナを見つめる。わずかに見開かれた瞳は、穏やかで、暖かい光を放っていた。その口元が力なく動き、かすれた声で優しく語りかける。

「その声……ずっと、聞こえていたよ。戦いするとき……美しい旋律……。誰かが見守って……くれているのを……」

「あたしが……。あたしが余計な事をしなければこんなことには……」

「やはり君が……私を……」

「……ごめんな……こんなことになるなら初めから……」

「……いつも私の事を……」

「エレナ！ 危ない！」俺は力を振り絞って二人の元へ駆け出す。

「……エレナというのか……。……ずっと、伝えなかったよ……」

ありがとう。

アルフレッドの体を、白銀のヤリが貫く。

それは、彼の背後から、天使ラファの手によって放たれたものだった。

第十七話

神劍が再び目覚めた時からさかのぼること約半世紀。

アルフレッドは、グランダール国王オーギュスタンの第三王子として世に生を受けた。

彼の父であり王であるオーギュスタンは、歴戦の覇者として近隣諸国にもその名を轟かす人物である。

アルフレッドには同じく豪勇で知られる年の離れた二人の兄がいた。

その二人もまた精霊の加護を受けた戦士。魔物が現れるところを幾度となく転戦しては、その名を馳せた。

そんな中末弟として誕生したアルフレッドは、生まれつき体が病弱だった。

一人だけ母親に似たのだろうか、血を分けた兄弟とは思えないほど体つきは貧弱で、よく病気をした。

同い年の子が戦の鍛錬をする横で、彼だけは勉学をさせられた。

いざ戦いが起こっても、できることといえば兵をねぎらう事ぐらい。共に戦いに赴く事は許されなかった。

だが彼は決して出来損ないと誇りを受ける事はなかった。それほど

ころか親兄弟をはじめ、国民全てに愛された。

理に合わぬ事は徹底的に糾弾し、兵が帰らぬ者となったときは共に泣く。

戦にこそ出れなかったが、まっすぐな正義感と博愛心に満ちていた彼は、人々からの人望は厚かった。

しかしそれを良しとしないものがただ一人だけいた。

それは彼自身であった。

厳しい訓練を積み、魔物と戦わなければならないはずなのに、自分だけぬくぬくと生活している。

あまりにも強すぎる正義感が、彼自身を許さなかった。

そんな気持ちとは裏腹に、周囲は彼を常に厳しい監視下に置く。

それは彼の素行に原因がある。ある時無理強いして剣の稽古に参加し、大怪我をしたのだ。

怪我と共に病気を併発し、一時は非常に危険な状態にまで陥った。

それ以降彼は、武器の類に触れさせてもらおう事すらできなくな

そんなアルフレッドを不憫に思ったのか、父オーギュスタンは彼の誕生日に一振りの宝剣を贈った。

その剣は、武器と言うよりも装飾品。とても実戦に耐えられるような代物ではない。

だがアルフレッドにとっては唯一手にすることのできる剣。

彼はいついかなる時もそれを肌身離さず持ち歩くようになった。

お前の名前はエクスカリバーだ。伝説の聖剣だ。カッコいいだろう。

そうやってアルフレッドはその剣を大切にしていた。

いつの日かこの剣で皆を守るのだ。そんな願いを胸に秘めて。

アルフレッドは病気がちになりつつも無事に育った。 齢十七。

そんなある日、戦線に赴いていた父の訃報が届いた。共に従軍していた二人の兄も行方不明だという。

国全体が悲しみに包まれる中、アルフレッドはいても立ってもいられず、戦線に加わるべく城を飛び出す。

だが城を出てすぐ、魔物に襲われてしまふ。

アルフレッドは果敢にも宝剣を抜き、立ち向かった。

無謀としか言いようのない戦い。またたく間に追い詰められ、死に直面する。

だが彼は最後まで逃げなかった。死よりも何よりも、このまま何もできない無力な自分を恐れた。

その後、偶然哨戒中の兵士に助けられ一命は取り留めるも、アルフレッドは城に送り返され軟禁される。

自室に閉じ込められた彼は、ひたすら自責の念にかられた。

剣を手にして魔物を打ち払い、皆を守る。そんなものは自分の幻想に過ぎない。ただの絵空事だったのだと。

父を失った周囲の自分への気遣いも、彼を苦しめた。魔物に立ち向かった彼の行動を褒め称えるものだった。

そんなつもりじゃない。結局自分は何もできなかった。ただただ情けなかった。

絶望した彼は連日自分を責め続けた末、やがてその矛先を宝剣に向けた。

今は亡き父がくれた剣。いっそう大切にしなければならぬのに、当り散らした。

なにが聖剣だよ、このっ！ 役立たずめ！

他人に触らせる事さえ嫌だったはずの剣。それを乱暴に壁に叩き

つけては、足で踏みつける。

宝剣はもともとが丈夫なつくりではなく、すぐにぼろぼろになり醜く変形してしまった。

変わり果てた剣を前にして我に返ったアルフレッドは、おのれの卑小さを嘆き大粒の涙を流した。

そんな彼をそっと見守る姿があった。それは一人の天使。

あてどなく世界を見渡していた時に彼のことが目に留まったのだ。

彼女もまた、悩んでいた。自分が何をすべきか。

彼女の仲間はあるものは人間を脅かし、あるものは人間の力となつた。

彼女達の目的は、ただ主である神に認められるということのみ。

人間に敵対しようが味方しようが、それは当人の思いのまま。

人間が苦しもうが悲しもうが気づかり知らぬこと。

だが彼女は、目の前で嘆き苦しむ少年をこのまま見捨てる事ができなかつた。

彼女は少年と同じく、純真無垢な優しさを持っていたから。

少年の切なる願いに、応える事にしたのだ。

それが何をもちたらす事になるのか、その時の彼女は知るよしもなかった。

まだ生まれて間もない、幼い子供だったのだから。

そして、少年の剣に天使が宿った。

少年の純粋な願いに応え続けたその剣は、やがて神と肩を並べるほどの力を持つ。

他の天使たちは畏怖をこめて剣をこう呼んだ。

神剣エレナディアと。

第十七話（後書き）

いきなり回想です。

どこで入れるか迷ったんですが、どっちにしる切れが悪かったの
このあたりで。

もっと早めの方がよかったかもしれませんが。

第十八話

その身を貫かれた勇者は、口から血を吐き出すと再び地面に倒れこんだ。

ヤリは蒸発するように消え、アルフレッドの体を中心に血だまりが形成されていく。

「うふふ……勢い余ってやってしまいましたね。どちらにせよもう長くはなかったのだから、ゼス様も大目に見てくれるでしょう」

エレナはただ俯いている。亡骸と化したかつての主をどんな想いで見つめているのだろうか。

俺は急いで走りよったものの、そのそばでただ立ち尽くすことしかできない。

かける言葉が見当たらなかった。

その昔この二人がどんな思いで戦っていたのかなんて、俺にはわからないのだから。

「エレナディア、もう茶番はおしまいにしましょう。すぐあなたも同じように葬ってあげますよ。なぜか剣を持っているその男と一緒に」

ラファが空中に飛び上がり、ゆらりと赤い瞳を怪しく光らせる。

まただ、また体が……。

天使はその手に、どこからともなく身の丈程もあるヤリを生み出した。

それはさつきアルフレッドを貫いた、銀に輝くヤリ。今度のものは一回り大きい。

重圧感のあるそれを片手で軽々持ち上げ、狙いをつける。視線は

まっすぐ……俺。

そして天使は、放つ。天から生まれ落ちる稲妻のような一撃を。

しかしそれよりも早く、エレナの手が俺の持つ剣に触れていた。

その瞬間。

怒り、悲しみ、憎しみ、様々に入り混じった負の感情が、悲痛な叫びと共に体中を駆け巡る。

心臓を激しい鼓動が刻み、全身の血液が逆流を始め、目からは自然に涙が流れ出す。

体が熱い。耳を突くのは身が引き裂かれるような、悲鳴。

剣が、泣いている。叫んでいる。

いつもの美しく安らく旋律はそこにはなかった。

悲哀に満ちた天使の歌声は、激しい憎悪にかられた恨みの声へと変わっていた。

突如として上空に雷雲が形成され、雷鳴が轟き風が吹きすさぶ。まるでその声に共鳴するかのように。

いつしか俺の体は天高く舞い上がっていた。剣が空に向かって上昇を始めたのだ。

重力を感じることなく俺は片手で剣にぶら下がっている。

剣は俺の体と一体化したように吸い付き、放さない。

その刀身はもはや、剣の形を成していなかった。

まるでヤマタノオロチのようにいくつにも枝分かかれし、炎が燃え盛るように黒い波動の奔流が渦巻く。

今までのような白い輝きではない。暴力的なまでの黒。

何十もの巨大な龍の首が、伸縮し互いに絡みつき、荒れ狂ってい

るかのよう。

ラファが放った稲妻は、生き物のように蠢く黒い刃に飲み込まれ、知らぬ間にかき消されていた。

「こ、これはどういうこと！？ さっきの戦いではこんな力はなかったはず……」

驚愕する天使。

その声に聞きつけ、何十もの鋭い闇の束が獲物を見つけたかのように鎌首をもたげる。

それは空全体を覆いつくすかのように、うねりを上げて標的を取り囲んだ。

エレナの叫びが、次元を切り裂いて一斉に天使へ喰らいつく。

「ちいっ！」

ラファは周囲に球体のフィールドを展開した。塵気楼のように彼女の体が揺らめく。

だが数多の黒い凶刃は勢いを衰えさせることなく空間に侵入し、中空に舞う天使を容赦なく全方向から串刺しにした。

それはまさに一瞬の出来事だった。

「……うっ、ぐ……ま、まさか……これほどまで……」

なすすべもなくあらゆる角度から全身を貫かれた天使は、かすかにうめき上げる。

「……ふふ……ぜ、ゼス様はもう一度ご所望、だ、そう、ですよ。……勇者と、魔王の戦いを。……つ、次の魔王は……どんな……」

ラファはそれだけ言い残すと、精彩を失った赤い瞳をゆっくり閉じた。

やがてその体は徐々に形を失い、光の粒子となって消えていく。最後に残った羽根だけがひらひらと桜のように舞い、地面に落ちると同時に消えた。

天使ラファは消滅した。

だが、エレナの暴走は止まらなかった。

黒い波動はやがて一つになり竜巻のように姿を変える。

剣は、さらに高く高く上空へ。剣と一つになった俺の体もどんどん高度を上げる。

そこかしこで落雷が起きている。町や城にも落ちたようで、再び火の手が上がりだす。

……このままじゃ、国が……。

「エレナ！ やめろ！ もう天使は消えた！ これ以上は……」

いつもなら返ってくるはずの声がない。聞こえてくるのは怒りとも悲しみとも取れない、泣き叫ぶ声だけ。

剣からは黒い波動が何も無い空中へ竜巻状に放出される。

溜め込んだエネルギーを発散させるかのようには。

「エレナ……」

アルフレッドと一緒に必死で守ろうとしたものを、自分でぶつ壊しちまうなんて、最高のバッドエンドじゃねえか。

ゲームオーバーよりたちが悪い。

なんとかしてノーマルエンドぐらいには持っていけないものか。

何か手は……。俺は一体どうすれば……。

……そうだ！ もし俺が剣から手を放せれば。

そうすれば……。きっと剣の力は消える。

剣単体では、おそらく力を発揮できないはず。

でも、もしそんなことをしたら今度は俺が落下して死ぬな。この高さじゃ、ほぼ確定だ。

剣を手放してしまつたら、俺はただの運動不足の大学生だ。

下を見下ろすと、西から東に駆けずり回った広い町が、足でまたげるぐらいに小さくなっている。

死ぬ、か……。

でもアルフレッドが命を賭けて戦つて、守つたんだ。この世界を。俺だつてそのぐらい……。

なんて思つたりはできないよな。

俺には世界を救おうなんてだいたいそれた考えはない。

俺はアルフレッドのような強い人間じゃないし、みんなから尊敬されるような人間でもない。

自己犠牲だなんだつて、そんな崇高な精神、持ちあわせてないんだ。

でも俺は決めた。

その身を投げ打つことを。

とはいっても勇ましい決断だとかつて、勇者の真似事をするわけじゃない。

それは、俺が、弱いから。

このままだと、頭がどうにかなくなってしまいそうだから。

だってどうしても耐えられないんだ。これ以上エレナの泣き

声を聞いているのが。

剣の暴走は止まない。無尽蔵にエネルギーを拡散し続ける。今これだけの力があるなら。エレナが自我を失っている今なら。

そして、剣が俺の願いに応えるならば、きっと。

俺は神の剣に願う。

自らの消滅を。

ブツン。

俺の意識は途絶えた。まるで電源が切れたかのように。

気がつくと、うつ伏せになって机の上につ伏していた。

顔を上げると、目の前にはテレビが。

付けっぱなしの画面には「ジエンド」の文字。

ゲームのコントローラを握ったままだった。

あれ、寝落ちしちゃったか。

ああ、そういやまた引きこもってゲームやってたんだっけ。

部屋を見回すと締め切ったカーテンにまっぴかりの電気。

やけに静かで、何の物音も聞こえない。もう深夜か？ 今何時だ？

時間を確認しようとするが、視界がなんだかぼやけてはつきりしない。

あれ、時計つてどこにあっただけ。意識もどこか朦朧としている。夢の中にいるようだ。

その時どこからか声が聞こえる。

テレビ……？　じゃない。玄関の方からだ。

なんだよ誰だよ？　なんか気分悪いから無視しよう。

多分睡眠不足だ。こういうときはもう寝てしまっに限る。

また机の上につつ伏せになる。

だが声は止まない。呼びかけるように、誰かの名前を呼んでいるようだ

どこかで聞いたような……。

まあいいや。

さっきまでやってたゲームの余韻か、いい夢が見れそう。

変なストーリーだったけど、それなりに楽しめた。

確か聖剣を使って敵を倒して……。

……いや、違う。

そもそも俺がエンディングの途中で寝落ちするなんて、絶対にあり得ない。

そもそもエンディングってどんなのだった？　ラスボスだって倒してないような……。

またしても声がする。

今度はさっきより大きい。声は、泣いているようだった。

なんだよ、誰が泣いてるんだよ。参ったな……。

このまま寝たら、また寝覚めが悪そうだ。しょうがないな全く……。
渋々立ち上がる。だがその途端激しいめまいが。体のバランスを崩し倒れそうになるが、何とか踏みとどまった。
……やっぱり調子が悪いな。早いとこ休まないと。

足元をふらつかせつつも、なんとか玄関に向かって歩き出す。
縦長の小さい部屋だ。しょぼいキッチンやら何やらをわき目に五、六歩大またで歩けばドアは目の前。

のぼすが、今は果てしなく遠く感じる。
もう二十歩は歩いたはずなのに、一向にドアに近づかない。
その上、体が重い。絶えず地震が続いているかのように揺れを感じる。

マジでこりゃどつかおかしい。やっぱり戻って、さっさと寝よう……。
俺はきびすを返す。
だがその背中を叩く、震えた涙声。
今度は、聞こえた。
間違いなく、俺の名を呼ぶ声が。

あいつが、呼んでいる。

気を抜けばどこかに飛んでしまいそうな意識を、声へと集中させる。

目を閉じ、耳を澄ませ、ひたすら声を頼りに歩き出す。
闇雲に進んでもダメなんだ。

俺は部屋の出口を目指しているんじゃない。この声の元へと向かうのだから。

そうだ、あの時も俺は、この声に呼ばれて……。

声に導かれるようにゆつくりと歩みを進める。

もうどれくらい歩いたのかわからない。

体が不調を訴え、何度引き返せと警告したとか。

でも、もう後戻りできない。すでに俺は、一度この声に応えてしまっただけだから。

共に戦うと、約束したのだから。

確実に前へ進んでいるんだ。呼び声が、どんどん大きくなってきている。

やがていつの間にか、声はもうすぐそこまで来ていた。

目を開くと、眼前に玄関の扉。

隔てるものはこの扉のみ。

ドアノブに手をかける。

だがその体勢のまま、しばし逡巡する。

俺は逃げただけだった。

俺がいなくなれば、あいつがどんな反応をするかなんて、わかりきってたはずだ。

その姿を思いっきり目の当たりにしただろうに。

でもああするしかなかった。あの時は。

他に方法があったのかも知れないけど、俺にはそれしか思い浮かばなかった。

だけど、ここから先は違う。

勇者でさえも成し遂げられなかった事。

それは……。

俺は扉を開けた。

視界が、闇に包まれる。

「言人！」

目を開けると、目を真っ赤に腫れ上がらせた少女の顔が飛び込んできた。

空色の瞳はまっすぐ俺の顔に向けられている。

「……エレナ。無事だったんだな」

エレナはただ大きくうなずくと、両腕を俺の首に回し抱きついてきた。

すぐ耳の横ですすり泣く声がある。鼻水もずるずる言ってる。女の子にこんなに泣かれたのはいつぶりだろう。

……嘘です。生まれてこの方初めての経験です。

俺は仰向けに横たわっていた。所々黒く汚れた白い天井。

どっかの病院のベッドで寝てるのかな……。

いや、病院なんかじゃない。ここは……。

周りには同じように負傷した兵士が、敷物の上に横たわっている。そしてそれを心配そうに見守る人々。

医務室とかって呼べるほどのものでもないな。床が固くて、体の節々が痛い。

「……しかしこれは、何エンドなのかねえ……」

エレナが少し落ち着いてきたところで、上体を起こす。

首にかじりついたままエレナはなかなか腕を放してくれない。

「エレナエンドか？ つつてもトゥルーエンドには程遠いな」

部屋の隅に立てかけてある剣を見ながら言う。
しっかり回収してあるわけね。

「……ふふ、なんだよ、それ」

やっと泣き止んだエレナが、顔を綻ばせる。

その表情は、なんとというか……、神聖で神々しい、とかつて言うつもりはないよ。

ただ、すごく可愛いなって。それだけ。

「天使の微笑み……ね」

なにもあせってクリアすることはない。

せつかくなら、いろんな選択肢をためしてみてもいいだろ。

それに今はもうすこしだけ、この笑顔を眺めていたい。

死の間際に感謝の言葉を告げた勇者も、それを望んでいたのだから。
うから。

第十八話（後書き）

これで第一部完了です。

本当はもっとキャラをいっぱい出してコメディっぽくする予定だったのですが、

思いのほか分量がかさみこのような有様になりました。

次回更新は間が開くかもしれませんが、ここまでお付き合いしていただいた皆様、

どうもありがとうございました。

第十九話

俺は星言人。引きこもり気味のゲーム大好き大学生。

今日も一人暮らしの狭いアパートの一室で、安物の座椅子に座りながらひたすらゲームに没頭する。

……だったはずなんだが、俺は今だっ広い部屋でやたら大きな椅子に腰掛けながらため息をついている。

魔物の襲来からしばらくたった。正確に日付を確認したわけじゃないけどたぶん一ヶ月ぐらいだろう。

その間は王様の葬儀やら町の復興やらで大忙し。俺も雑用にこき使われてあつという間に時間が過ぎていった。

いつしか城に寝泊りするようになり周りになじんでいくにつれ、すっかり異世界から来た事なんか忘れかけていた。

何を言っても話半分にししか聞いてくれないし、そもそも必死こいて証明したところで何が変わるというわけでもない。

だがそのこととは別に、ようやく国全体が落ち着いてきたそんな折、聖剣の話が持ち上がった。

結局あの巨大モンスターを退治したのはなんだったのだ？ という話になり、一命を取り留めたダレルたちの証言もあり犯人が特定され、あれよこれよという間にこの状態。

なんだか知らんが俺はこの馬鹿でかい謁見の間とやらで、アホみたいに大きな玉座に座らされている。

アルフレッドには子供がいなかったらしく、跡継ぎでもめる前にとりあえず暫定的に置いておこうということらしい。

俺は断固拒否したが、剣を使える「勇者」王様とかいう短絡的な思考しかできない大臣の強い勧めもあり（ほとんど脅迫に近かった

が「いやいやながらそれに従っている。

でもこれはあくまで一時的な処置であり、牢獄入りの不審者から正式に王の身分に成り上がったというわけではない。

無駄に広い謁見の間は衛兵が数人定位置につっ立っているだけで、しんと静まり返っている。

俺は頬杖をついてぼけっとしてるだけ。

いや〜さすが窓際族ならぬ王族。まったくやることがない。

前の王様があんな状態だったから、王がいてもいなくても国が回るように仕組みができてるんだよね。

当然勇者とかも訪ねてこないし。

来たら来たで「なんばんのぼうげんの書に記録するのじゃ?」とかやんのか? 腹立つからレベルーで上書きしてやるうか。

どうせひのきのぼうを渡すだけの簡単なお仕事だろ? いや、嫌がらせか。どっちにしろやってられんわ。

まあいいこともあるっちゃあるんだけどね。

衣食住には困らないし、牢屋にぶち込まれるよりはマシだ。

こつして仕事もせず偉そうにふんぞり返っても咎められる事もない。

それどころか周りがいろいろと世話を焼いてくれる。

ほら、メイドさんがお茶を持って来たぞ。

玉座の脇に置かれた背の高い小さなテーブルに、ゆっくりと銀のトレイがのせられる。

そしてトレイの上で湯気を立てているカップを手に取り、おもむろに玉座の手すりに横座りする。

ずず〜とおいしそうにひとすすりすると、ぺんぺんと俺の頭をはたく。

メイドが。

「いいご身分だねえー、言人様」

「……ずいぶんメイドが板についてきたじゃないか」

やっぱり異世界だからね、メイドとかの認識もちよっと違うのか
もしれないね。

こっちのメイドはこのぐらいフランクに接してくるわけよ。やっ
ぱりコミュニケーションは大切だからね。

まあそんなわけないんだけどね。

「しかしさすがに主人の分のお茶がないというのはどうなのかな。
お前何しに来たんだってことになるだろ」

「王様の機嫌をとりいらっしやっただよ」

「すぐく気分を害したのだが。……あちっ！」

「あーあ、ちゃんと飲めよ」

「飲めるか！」

俺の膝にカップの熱湯を注いだメイド。もといエレナ。

こいつも俺同様、よくわからない待遇を受けている。

別にメイドとして働かされているわけではない。単純にメイドの
格好をしているだけだ。

最近はおっぱらの服装で、本人によるとここではこの方が前の
純白のワンピースよりは目立たないから、ということらしい。

俺以上に不審人物であるこいつは、またもやダレルたちの口から
すでにその正体が広まっている。

なんか知らんが剣に乗り移る精霊、つてことでみんな納得してい
るらしい。それで拒否反応を起こす輩もいない。

聞くところによると、こういうイレギュラーな存在はこの世界で
はみんな一緒にたに精霊として片付けているらしい。

珍しいことには違いないが、それほどとりたてて騒ぎ立てる事でもない、といったところだそうだ。

……いや、騒いでるな。

それはもう、俺の存在が霞んでしまうほどに。

「……最近えらく人気じゃないか。どこへ行ってもお前のウワサが飛び交ってるぞ」

「なんかうつとうしーんだよなあ。なんなんだろうな」

「まるで天使だとかってな」

「まあ、そりゃしゃーないかな」

ちょっと特別な存在でいて端正な容貌。そういうこともあって、男連中はもちろん、女子の間でもさんざんもてはやされている。

誰に対してもこんな調子だから、逆にそれがウケているらしい。逆についていかもう訳がわからんが。

「実はほんとに天使でしたっけか」

「おまえ信じてないだろ」

「あのラファっていうやつはかなりそれっぽかったけど、どうもな。お前羽もついてないし、よわっちいし」

「いや強ーし」

「俺がいなかったらただのクソガキだろ」

「あたしがいなかったらおまえただのもやしっ子だろ」

例のブツは、豪華なかさ立てのようなものに差して玉座の脇に置いてある。

また暴走して手に負えなくなったら嫌なのであれ以来一度も憑依させていない。その必要性もなかったし。

ぜひ聖剣を一目だけでもという者が後を立たないが、全て断って

いる。

……おかげでまた偽物説が浮上したりしなかったり。

「そういうおまえもなんか女の子にちやほやされてるみたいじゃない?」

「まあ美男子の宿命かな」

「え?」

「……そんなに不思議そうな顔しないでくれ。冗談だから」

「あー、……まあまあいけてると思うぞ。そんな落ち込むなよ」

「……どうも、ありがとございます」

一方で俺のほうにもモテ期が到来していた。

とはいえ玉座に座っているというだけで、俺の事を何か勘違いされている女性の方が多数なわけだが。

とにかく声をかけられることが多くなった。あいつら何かにつけて個人情報聞き出そうとしやがる。

まあそれはいいんだけど、こちらら面白トークスキルなど持ち合わせていないもので、ちょっと困ってしまうんですがね。

しょうもない話に無理に愛想笑いされてもねえ。それに時々目が笑ってないときがあるので怖いんですよねえ。

「しかしどうしたもんか。元の世界に戻る方法を探すどころか、町の外にすら出してくれないし」

「まあそうあせんなよ。代わりに情報集めてもらってるんだろ?」

「かほーは寝て待て」

「そろそろ禁断症状が出そうなんだが」

「何の?」

「コントローラー握りの」

「何の?」

「……なんでもない」

ずっとこんな息が詰まるようなところにいたら、どうにかなりそ
うだ。

もちろん一日中椅子に座ってるわけじゃない。そろそろ約束の時
刻だ。

その時、広間の入り口から猛然とこちらに近づいてくる人影が。
ダツダツダと荒々しい足音が場内の静寂を破る。

赤い絨毯の上を一気にかけてきた人物は、玉座の手前でブレーキ
をかける。

「エレナちゃん、探したよ！ 一緒にお昼にしようか。今日はね…

…」

「やだ」

あつ、こいつは関係ない。ただの追っかけだ。

サラサラな金髪に、トレードマークらしい豪華な刺繍の入ったマ
ントが目を引く。

まだ幼さの残る顔立ちにキラキラした翠色の瞳。よく通る清らな
声。

青年の整った顔はころころ表情を変える。

「えっ。もう食べたの？ ……うんじゃあ……」

「スヴェン君。なら俺が付き合おうか」

「あ、アルフさんこんにちは。 ……えと、自分もう飯すんでるんで
結構です」

「てめえこら……」

俺は今アルフって呼ばれている。

それまではおい、とかお前、だったんだけど、またも大臣様の素

晴らしい発案のおかげだ。

本名言ったら鼻で笑われたし。訴えようかと思ったよ。

第二十話

「お前も毎日飽きないな。何度来ても娘はやらんぞ」

「アルフさんのことは尊敬してますけど、これは譲れないっすよ」

「おい。誰が娘だ」

この実直な？ 青年はスヴェン。まあ青年っていつても年は俺の一個下らしいんだが、とにかく毎回こんな調子だ。

これでも国の遊撃隊長らしく、一週間ぐらい前に十人程の隊員と共に城に戻ってきた。

その時エレナを見かけて、一発で気に入ったらしい。

まあそついう輩はゴロゴロいるんだけど、熱心さではこいつがトップだ。

「……エレナ。俺は本気なんだ。一目見たときから君のことが……」

急に真剣な表情でまっすぐエレナを見つめるスヴェン。

エレナは無言でちよつと困ったように視線を逸らす。シリアスに来られるとこいつは案外弱いんだよな。

スヴェンもまあまあ男前だから、こんなふう言い寄られたら悪い気もしないのかも。

……ていうか俺の目の前で勝手にラブロマンスしてんじゃねえよ。よそでやれ。

「ま、前も言ったろ？ こいつに勝ったら考えてやってもいいって

こらこら、そうやって人を指差すんじゃない。

「そんな、敵うわけないでしょ。伝説の勇者になんて」

伝説の勇者。心地よい響きだ……。
そしてとっても強いのだ。せいぜい敬うがいい。

「……いや、でももしかしたら油断しているところを狙えば俺だつて……」

「ちよつと待った。スヴェン君、今とっても不吉な事を考えていないかい？」

「多少はハンデくれてもいいでしょ」

「ば、バカ言うなお前！ 絶対不意打ちとかすんなよ！ フリじゃねえからなマジで！」

「なにそんなあせってんすか？」

ま、まずい、危険だ。もしそんなことされたら瞬殺される。こいつはバカだからやりかねない。

スヴェンの実力は相当なものだ。伊達に隊長をやっているわけじゃない。それにダレルと同じく妙な武器を持っている。

それと同クラスの戦士と思って差し支えない。

つまり神剣抜きの俺がどうひっくり返っても勝てる相手じゃない。今いきなりこいつの気が変わって襲い掛かってきたら、マジで洒落にならん。

できればあの剣は使いたくないし、エレナも人間相手にその気になるかどうか。

全部事情を説明すればいいのだが、とある理由でそうはいかない。スヴェンは俺が強いからこそ剣を使えると思っ込んでいるのだ。そもそもこいつがそんな勘違いをしているのも……

「これ、スヴェン！ アルフ殿を困らすでない！」

このクソチヨビヒゲ、じゃなかった、大臣ザムザのせいだ。

壁際の扉を開けてやってきた大臣は、足早に俺たちの間に割り込んできた。

しかしこの人の豹変振りには怒りを通り越して呆れるねもつ。アルフレッドと同年代ということもあって、このおっさんの勇者好きは異常だからな。。

王が死んだと知るや、しばらく部屋にこもって姿を現さなかったらしい。

だけどその後は俺に標的を絞りがつた。

玉座に座るか牢に入るか選べとか気違いだろ。

牢に入るなら自分も王の後を追うとか言い出すし。

「別に困らせてなんかない。親父は引つ込んでてくれ」「何だと？ 親に向かってその口の聞き方はなんだ！」

そんでこの息子だよ。全然似てねえし。

茶髪で髪が薄くなっている一方、動くたびさらりとなびく金色の髪。

やや太り気味の体型と、引き締まったしなやかな肉体。

顔つきも似てる要素が見当たらない。

だが親子揃ってまったくうざったい。そこだけはそっくりだ。

「……ちよつと、ザムザさん」

「はいはい何ですかな」

大臣を手招きすると、すばやく玉座に身をすり寄せてきた。

「そんな寄らなくていいです。……それとなくスヴェンに説明していつて言ったじゃないですか」

「いやいや、その必要はないのです。アルフ殿はどっしり構えてい

て下さればそれでいいのです」

「あいつ俺を闇討ちしかねない勢いなんだが」

「ほっほっほ。まさか。勇者に剣を向けるなど、そんな教育をした覚えはありません」

このおっさんは当然事情を知っている。さんざん無様な姿を見せたからな。

だが俺のそんな姿を知る人たちを口止めしているのもこの人だ。

大臣の主張はこうだ。

アルフレッド亡き今、国民の不安を和らげるのは勇者の存在。

新しい勇者の出現によって魔物は撃退されたということになっている。

下手に真実を公表するよりも、王の後を継いだたくましく強い勇者という印象を与えるべきだという。

言い分はわかるんだけどね……。騙しているようでどうも気が引ける。

「……まあいいや。で、今日はもういいですよね？ 時間でしょ？」

「ふむ、まあ構いませんが、アルフ殿と是非お話したいという申し出が何件かありましてな。私も親交のある貴族の娘もおりまして

無碍にするわけにもいかんのですが、どうですか？」

「どうもなにも……」

「じゃあその間エレナちゃんは俺が預かっておくよ！」

「スヴェン！ お前は遠征の報告書を書き直して再提出だ！ なんだ『魔物をたくさんやつつけました』とは！ 子供の日記じゃないんだぞ！」

「なんでだよ！ その通りじゃん！」

「お前には武才に恵まれなかった私に代わり、兵として王の役に立

つよう育てたつもりが、いかんせん偏りすぎたようだ。やはり再教育が必要だな。そもそもお前は……」

大臣の説教が始まった。これも何度か見たパターンだ。

さてと、今のうちに逃げるか。

俺は立ち上がるとそそくさと玉座から離れた。エレナはぼーっと

二人の様子を見ていたが、俺が逃げたのを見てその後にく。

、言い合いする二人を横目に、俺たちは謁見の間を後にした。

第二十一話

俺とエレナは二人並んで通路を歩く。

やっぱりこいつと一緒にいるとどうも目立つ。誰かとすれ違った
びに視線を感じる。

格好こそメイドなのだが、歩き方が堂々としているというか、慎
ましさがない。

すでに城中の人気者だから「ああ、あれがああ……」みたいな感
じで思われているんだろう。

俺自身も豪華な赤っぱいマントなんて羽織ってるから余計だ。T
シャツとGパンは押収され着せ替えられた。

とにかく今最も注目を浴びるコンビなのだ。

「お前さあ、俺に勝ったらとかなんとか変なこと言うなよな」

「い、いやほら、大切な人を取り合うみたいないな感じで」

初めてスヴェンに詰め寄られた時、テンパってアホな事ぬかしや
がったんだこいつは。

「なんで俺がお前をスヴェンと取り合わなきゃなんねえんだよ」

「あゝ、あたしがいなくてもお強いもんねえ言人様は」

「……………い、いやいやエレナさんあつての勇者ですよ」

「うんうん。そーだろ」

満足りにつなずくエレナ。

ぐう…………。なぜ俺がご機嫌取りをせねばならんのだ。

しかしいざというときにこいつが非協力的だった場合、いろいろ
とまずい事になりそうだからな。

ここは我慢だ。

「近頃はスヴェンのような、物騒な輩がいますからね」

「安心しろって。死にさえしなけりゃーなんとか再生してみせるよ」
「……できればそこまで行く前になんとか話を付けたいのですが」

なにを言ってるんだこの小娘は。もう剣の中にずっといた方がい
いんじゃないのか。

ああでもまたあの剣の力を借りるのは勇気がいるなあ。暴れだ
したらマジで手のつけようがないし。

「あら、アルフ様。こんにちは」

行く手にメイドが立ちふさがり声をかけてきた。

微笑を浮かべゆつくりと優雅にお辞儀をすると、胸元までかかる
黒髪をかきあげ背筋を伸ばして姿勢を正す。

伏目がちに切れ長の目をまたたかせ、控えめにたたずむ姿はそれ
だけでも絵になりそうだ。

彼女はリーナ。メイドの中でもエリートらしい。大臣の勝手な命
令で俺の世話もしてくれている。

同い年ぐらいのはずだが、いちいち動作が洗練されていていつも
押され気味になってしまう。

その同じ格好してるやつにも少しは見習わせたいよ。

にしても美人メイドに身の回りの世話をされるなんて、一度は夢
見るシチュエーション。

のはずなんだが、今となってはもう面倒なのにつかまったという
気分にはかならない。

「どちらへ行かれるのですか？」

「ええっと、とりあえず時間がきたから逃げてきた」

「そうでしたか。それでは……」

「言人、食堂行って飯食おつぜ」
「そ、そうだな」

ビクビクしつつエレナの提案に賛成する。

「アルフ様がわざわざ食堂などに足を運ばれる必要はないのですよ？ 私がお部屋にお持ちしますから」

「い、いやたまにはさ……」

「も、もしや私に何か落ち度があったのですか!？」

「ないって！ むしろ完璧すぎるぐらいだよ」

「ありがとうございます。もしそのようなことがあれば私、すぐにも首を」

「り、リーナもどうぞだ一緒に」

第一印象はおしとやかを超えて機械的ですからあつたが、徐々にボロがでてきた。

今は軽くホラーでもある。優れた人間ってというのはやっぱりどっかおかしいのかねえ。

「わっ、私ですか。おっ、お断りです！」

反射的にお断りですか。そうですか。

「……あつ、せつかくですがお断りさせていただきます。お仕事がありますので」

丁寧に言い直したぞ。なんなんだよ。

「休憩とかないの？」

「皆さんが休んでいるときこそ働くのです」

「サービス業は大変だねえ、休日に出勤だからね」

「きゅ、休日ですか。休日は何かと予定がありまして……、い、いえ決して他の殿方と予定があるというわけではないのですが」

「え？」

「ああっ、ええつと……も、申し訳ありません、急ぎますので失礼します」

リーナは慌てて一礼し、くるりと身をひるがえすとなぜか来た道に戻っていった。

おいおい、自分から絡んできといてそれはないだろ。

「フラれてやんの」

エレナがにやにやしながら茶々を入れてくる。

「バカお前、今のはうまく追い払うテクだ」

「どーだか」

「引けば押してくる。押せば引いていく。まるでさざ波のような……。不思議な娘だ」

「なんだそれ。今度あたしが代わりに誘ってやるつか」

「それはやめて」

「なんでだよ。おかしなやつだな」

いや別に引け目を感じているとかそういうわけじゃないよ？ 決して。

俺は勇者だからね、美女を何人もはべらせて当然なのだ。

……ってどんな勇者だそれは。

「二人きりだと気まずいとかそういう理由じゃないんだ。権威をかさに着てあれこれするのはパワハラといって訴えられるんだぞ」

「なさけないやつだな。ビビってんのか」
「ち、違っわ！」

会話がうまく弾まない、というか通じないことが多いんだよ。
自分のような凡人には理解できないのですよ、エリートのご思考回路は。

俺たちは結局そのまま食堂へ向かった。

昼のピークを過ぎていくせいか人影はまばらで、やや落ち着いた雰囲気。俺とエレナが顔を出すといやな顔一つせずに料理を出してくれた。

巨大な長机が所狭しと並べられた部屋の隅に陣取って昼食を取る人がいないほうが騒がれなくてちょうどいい。

「しかし全然情報が集まらないんだがどうしたもんかね」

「世界をまたぐ方法を探せー、なんて、頭がおかしいって思われるかもな」

「他人事のように言うな。まあ元の世界に帰る方法がわかったとしても、もう少し付き合っただけだよ。なんかやばいんだろ？」

「この世界」

「やばいのはずっと前からだけどな」

向かい合ったエレナが野菜入りのポタージュをすくいながら言う。

「こんなにのんびり食事できるとそうも思えないんだが」

「もともとこの国はさ、魔物の発生源からは遠いし普段はそんなでもないんだよ」

基本的に魔物は無差別に暴れるため、こちらは戦力を分散しそれ

に備えなければならぬ。

そのため国の騎士団の大部分が各地の村や砦に常駐している。だが魔王が誕生すると、魔物が組織を作って戦いを挑んでくるそう。

魔王には好き勝手暴れる魔物を統率する力があるのだ。

強い力を持つ天使が、資質を持つ生物に乗り移る。そうするとそれが魔王になるという。

ちなみに生物とは人間でも動物でも、魔物でもいいらしい。

霧のように消える魔物が人間と同じ生物だなんて認めたくはないが。

前回の魔王は天使ラファが乗り移った人間。エレナとアルフレッドによって倒され、ラファ自身もキズを負ってどっかに逃げた。

だと思っていたが、封じられたエレナの様子を見るため案外近くにいたということだ。

勇者を呪いつつ。

「今は魔王だつていないんだろ？」

「うん。それに候補の一人は……」

「消滅したってか」

「そう。ラファはまた魔王になるつもりだったみたいだ。で今は他に何人かの天使が魔王になろうといる争っている状態」

「乗り移るだけだったらすぐ済みそうだけだな」

「天使と乗り移られる側の波長って言うのかな。そういうのもいろいろあってすぐには見つからないんだ。あと器となる強い生物自体の数が少ない」

「ならそれを阻止しないと……」

はやる俺とは反対に余裕そうにパンをかじるエレナ。

「いやーあんまり意味ないかもね」

「なんでだよ？」

「天使の目的はさ、人間を滅ぼす事じゃないから」

「どういうことだよ？」

「まー簡単に言うとかにかく世界を盛り上げて、どっかで偉そうに眺めてるクソやるうに気に入られればいいってこと」

「クソやるうって……、それが神か？」

「……あたしもまだペーペーだから、あんまり昔の事は知らないけど、知る限りでは人類を根絶やしにっていうことはないよ。現にこうしてみんな生きているわけだし。それにそんな事したら、あいつの反感を買うかもしれない」

「お前の発言は矛盾してないか？ ……お前だって」

「あーあたしはいいんだよもう。そいつと一回やりあってこのザマだし。もう神の使いだかなんだかよくわからない存在になっちゃったよね」

エレナは自分が何者かわからなくなったたというのに、特に悲観する様子もない。

むしろ何かに縛られる事もなくなってせいせいしているという感じだ。

いや、でもいろいろなしがらみは残っているはずだ。ラファがエレナを恨んでいたように。

「アルフ様、本日もご機嫌いかがでしょうか」

第二十二話

背後から男の声がしたかと思うと、俺の皿に伸びた大きな手がソーセージを一本かつさらっていった。

「おい、俺の食事を邪魔すると死刑だぞ」

「がははは！ そいつぁ勘弁願いたいものだな！」

巨漢の大男、ダレルは口をもぐつかせて隣の席にどかっとなり込んで座り込んだ。

地味めな薄い布の服から褐色の健康そうな肌が露出している。

気候は春先といった感じなので、その格好はまだ肌寒いはずだがそれでいいのか？

「偉くなったもんだなあ、おい！」

てのひらでバシバシ背中を叩いてくる悪漢。

スキンシップのつもりなんだろうが、こっちからしたら罰ゲームレベルの張り手だ。

「うっ、いてっ、や、やめる。食い物戻すだろうが！ 大臣に言いつけるぞ」

「いじめられっこのガキかよおめえは！」

「うるさい、猫かぶりのジャイアンめ」

こいつは上の人間に対しては慇懃な態度のくせに、俺のような弱者の前ではガキ大将になる。

単細胞バカじゃなく頭も回って意外と口が立つんだよ。

初めて会ったときも大臣を言い負かしてたし。

「おまえ、さつき権威がどーたら言っでなかった？」
「いいんだよ、無礼なヤツには相応の対応してもんがある」

自分の身は自分で守らねば。まあ自分で守ってないけど。

「仲良しだなあおめえら。まあそれもそうか、相棒なわけだから」
「頼りない相棒だな」

「ふっ、どっちがどうだかね」

「ほー強く出たねー。スヴェンとどうやりあつか見ものだ」

「………すいません失言でした」

このガキマジで覚えとけよ……。スヴェンのことは元はといえばお前が原因じゃねえか。

なんとかして使い手が俺しかないという事をわからせてやらねばならんな。

あれ？ でも剣が使えなかったら困るの俺だけ？ いやいやそんな不公平な。きつとどこかに穴がある。

「で、何の用だそのゴリラ」

「おいおい、そりゃねえだろ。さつきから探してたんだぜ？ おとつい言っただろ、今日も訓練つけてやるってよ」

「あ、ああーそれね。今日はちょっと忙しいから………」

「おっと？ もう音を上げたってか？」

「い、いやいや、そんなまさか。ただ体の方が不協和音を奏でていてだな」

「勇者がひよろひよろだと知ったら国民は嘆くだろうなあ」

「声がでかい！」

わざとやってるんだよこの男は。俺より一回り年上のいい大人が

こんなことして楽しいのかねえ。

「俺なんかに構うよりも他に有望な若者がいるだろ？」

「それがなあ、この前の戦いで意欲がそがれたヤツが増えちまっつてな。相手が相手だけに仕方ねえと思うんだがな」

頑張ったところで魔物には歯が立たない。そういう現実を突きつけられた者が数多くいるってことか。

そんな気持ちになるのも無理はないだろうな。

「でもさ、お前とかスヴェンみたいなヤツだっているんだしき。スヴェンがもう少し早く戻ってきていれば、なんていう話も聞くし」
「あいつと協力すれば巨大型ぐらいは何とかなっただかもな。だが、その後のあれはどうしようもねえ。ケタが違う」

ダレルはラファが消滅した事を知らない。エレナの方がそれをはるかに上回った事も。

ダレルに限らずその事実を知るものは俺たち以外にはいない。

「今度あんなのが来たら、マジで終わりかもな……」

「だ、大丈夫だって。ありゃなんかの間違いだろ。パラメータ設定間違えたただけだって」

「そんな時やお前らの力だつて必要になる。スヴェンの小僧よかよっぽど頼りになるだろ。だから少しでもお前の地力を上げておくんだよ」

実際に天使を目撃したのはダレルと数人の兵士のみ。それもすぐに意識を失っていた。

みんなが城下の被害を拡大させたのは謎の魔物の仕業だと思っラファている。

真犯人は暴走したエレナなんだけど、危険分子扱いされかねないから黙っておく事にした。

「……しかしありや一体何なんだったんだかなあ。精霊によく似てたってオレと一緒に見たやつらも同意見なんだが、仲間なのか？ 妙な事言っただけの気がするんだが、気絶したショックで思い出せねえんだよな」

ダレルたちが精霊と呼ぶもの。エレナによるとそれは天使のことらしい。

魔王が誕生するのも、人に力を与えるのも天使。

魔法なんかの現象も、全て天使の力によるものらしい。ただこの国にはほとんど普及していないみたいだけど。

一人考え込むダレルを横目に、ひそひそとエレナに尋ねる。

「……説明しなくていいの？」

「……別に、精霊でも天使でもいいーだろ。変に混乱させてもさ」

エレナはこんな調子で何かと隠したがる。まあ不安を与えたくないってのはわかるし、信じてもらえるかも微妙なところだ。

「まあいいや、こまけえことは。まだケガが直らないやつも多いし、命令はずっと待機だし、オレもヒマなんだ。付きあえや」

太い右腕をガツと首に絡めてくる。気持ち悪いのですぐに全力で振りほどいた。

うわ、暇つぶしってぶっちゃけやがったよ。

「……け、ケガ人はおとなしく休んだらどうだ」

「オレか？ オレはもう完治してるぜ？ 精霊グレイヴァースに与えられた剣の魔力を治癒に向ける事もできんだ、すげえだろ。大体鍛え方からして違うしな」

「俺も剣欲しいぞ。どうすりゃもらえるんだ？」

「サンクチュアリに行けばもらえるかもな。精霊さんに気に入られればの話だが。つってもおめえにはもういいのがあるだろ」

「ダメだありゃ、わがままで。……いつて！」

テーブルの下で足を踏みつけられた。対面に座っているエレナは涼しい顔だ。

「そついや嬢ちゃんも精霊の仲間だったか。だったら知り合いなんじゃねえのか？」

「セフィのことだろ。……あたしはあいつ苦手だけど」

「ならせひ俺を紹介してくれ。アルテ ウェポンが欲しい。チキナイフも捨てがたいな」

「やだよ、ばーか！」

なに怒ってんだよ……。さつきから沸点低すぎだろ。

「おめえにゃあ無理だろ。認められんのはほんの一握りだ。それにな『アタシ、たくましい人が好きなの』とか言ってたからなあ」

「……ホントに精霊か？ そいつ」

ましてや天使だなんて信じがたい。ラファみたいなのを想像したら面食らいそうだ。

「さて、うつかりしてたら日が暮れちまうぜ。おら、もういいだろ、行くぞ」

ダレルにがっちり腕をつかまれ、無理やり立ち上がらせられる。

「お、おいもつと優しくしろ！ 肩が外れたらどうすんだ！」

「外れっかよこんなんで」

「せーぜー頑張れよ」

どうでもよさそうにわずかに手をヒラヒラさせるエレナを尻目に、俺はなすすべもなくダレルによって拉致された。

第二十三話

「あゝ死ぬ……」

あの後ダレルにさんざんしごかれ、日もとつぷり暮れた頃になつてやっと解放された。

中庭を走りこみの後、神剣、いや鉄くずをひたすら素振り。

あの野郎、俺が最近ちやほやされてるのが気にいらねえのかどんどん追い込んできやがる。

腰が入ってないだの踏み込みが甘いだの。

ちきしょう、勝手に一人で甲子園目指してりゃいいんだ。

水浴びをして汗を流した後、体をきしませながらも見た目は堂々とした足取りで城内を歩く。

もう本当は杖でもついて歩きたいぐらいなんだが、勇者たるものそんな無様な姿を晒すわけにはいかない。

というか周囲の視線が痛いからきわめて平静を装わなければならぬだけだった。

ああ、一刻も早く横になりたい。

早くも筋肉痛が襲ってきたせいで自室への道のりも余計遠く感じる。無駄にでかいんだよこの城。

城の中にまるまる個室を与えられているが、さすがに王の部屋を使うわけにはいかず、空いた客室をあてがわれている。

それでも十分もといったアパートの一室より広い。

三階まで階段を上り、通路を進む。部屋まであと少しというところがかすかに嫌な予感がした。

そんですぐに的中した。

「アルフさん！ 勝負！」

背後から何者かの声。

反射的に振り向くと通り魔スヴェンが凶行に及ぼうと駆け寄ってきていた。

「おわっ！ 何だお前！」

「今こそ勝機！」

「ま、待て！ やめろ、そんな死人にムチを打つような真似していいと思ってるのか！？」

「でも俺はこうしないと先に進めないんだ！」

「カツコよさそうなセリフだがお前がやるうとしてしていることは最低だぞー！？」

この育ちのいいおバカな青年は、葛藤の末に疲れきった人間を不意打ちする結論に達しました。

ああ、嘆かわしい。

……いや、葛藤なんてなかったかもな。

「おい、いいか。エレナは俺に勝ったら、と言った。それはつまり百二十パーセントの俺を真正面から打ち倒せということだ。俺を暗殺しろという意味ではない。アホかお前は。卑怯者呼ばわりされて嫌われても知らんぞ？」

「そ、それは……卑怯者でも何でもいいけど嫌われるのは……困ったなあ」

「ちなみに今の俺はフルパワー時の一パーセントにも満たない」

「な、なんでそんな低いんすか……」

「そりゃあれだよ、度重なる疲労で」

「今日そんな大したことでないっすよね？ ずっと見てましたけど」

なにつ、ずっと見てやがったのか！ この変質者め。

……いかん、確かにスヴェンからすれば俺の訓練は低レベルすぎる。

「い、いや、今日のはちょっとしたりハビリだ。疲労つてのはあれだ、シーと戦ったときの古傷が……。ボスの癖にべ マ連発するんだぞ？ 考えられない」

「……なんかよくわかんないっすけど、すごい戦いがあつたんすね……」

ふう、なんとかごまかしたか。

ここは適当に言いくるめて追い払おう。

「あれ？ でも親父から聞いた話だと勇者はキズ一つ負わないって……」

「ああ、あのおっさんは勇者マニアだから、ちょっと脚色が過ぎるんだよ。それにキモイしウザイからさ」

「そうですよ、いくらなんでもおかしいと思ってましたよ」

思わず日ごろの鬱憤が出てしまった。にしても親父をけなされても怒らないのか。親不孝なやつめ。

教育がなつてないな。

「じゃあいつになったらフルパワーになるんすか？」

「それはもう運だ。エル ドアから源氏シリーズと正宗を盗むぐらいの確率だ」

「……？ まあなんだろうとあきらめませんよ俺は」

バカめ。その昔無謀な挑戦を続けたプレイヤーと同じ苦しみを味

わうがいい。

「じゃあ明日の昼過ぎにエントランス広間で待ち合わせましょう」

「お前俺の話聞いてないだろ」

「待ってますから。それじゃ」

一方的にそういい残すと、しゅたつと素早い身のこなしで来た道を走り去っていった。

デートの約束じゃねえんだぞ……。誰が行くか。

おかしなのに絡まれさらに疲労が増したところで、やっと自室に到着した。

だがドアを開けると更なる刺客が待ち受けていた。

「あつ、アルフ様」

エリートメイド、リーナだった。

おせっかいにもゴミ一つない部屋を掃除していたようだ。

室内にはやや大きめのベッドにタンス、木製のテーブルと椅子ぐらしか目立った家具はない。

なるべく掃除しなくてもいいように普段からできるだけ綺麗にしているつもりなんだけど、リーナにすればまだまだ甘いということなのだろうか。

シーツの交換やら衣類の洗濯やらいろいろあるというが、年頃の男子の部屋に年頃の女子がちょくちょく出入りするのはあまり良くないと思う。ええ、そう思います。

掃除してくれるのはありがたいが、どうにも慣れない。

エロ本隠しといたらびつちり整頓されてたりね。まあそんなもんないけど。

「悪いね、いつも」

「お仕事ですから。……あ、全部が仕事っていうわけじゃないです」

「え？ どういうこと？」

「い、いえ間違えました。お仕事ですので当然です」

なにを言っているんだこの娘は。

すでに疲労がピークに達していた俺は、それ以上追求する事もなくどさつとベッドの上に腰を下ろした。

「あー疲れた。もう寝よう」

「ね、寝るのですかっ！ わ、わかりました！ でも、その、ま、まだ少し早いのでは……？ それに私ちよつとだけお仕事が残ってます」

「いやお前は寝なくていいから」

「お、お前だなんて……」

「あっ、ゴメン、つい反射的につっこみが。どうもエレナといると口が悪くなるな」

「いえっ、いいんです。何でも言うてください」

何でもねえ……。とりあえずやりにくいからさっさと出て行ってくれないかな……。

でもそれ言つと「なにか私が気分を害すようなことをしましたか！？」なんてことを……。とかって始まりそうだからなあ。

俺が何も言わずに悩んでいると、リーナはおずおずと口を開いた。

「お疲れのようですけど、……。あの、も、もしよろしければマッサージでもしましょうか……？」

「いえいえ結構」

「じ、じゃあベッドに横になってもらって……」

「いや結構です」

「業務外のことですので、至らぬ点もあるかと思いますが」

ダメだこれ。完全に聞いてないわ。

リーナはいつもの微笑を絶やさず俺に近寄ってくると、ベッドの上につつ伏せになるよう促してきた。

「マッサージって後で強面のおっさんが出てきたらヤダなあ」

「大丈夫です」

すでに疲れきって抵抗する余力のない俺は、よくわからない文句をつけつつもなすがままになる。

大丈夫ってなにか大丈夫なんだよ……。

「……では、失礼します」

横たわる俺の背中に、柔らかな圧力がかかる。

こ、これは気持ちいい……。さすがはリーナ、謙遜しておきながらも何でもそつなくこなすな。

「ど、どうですか？」

「……結構なお手前で」

あまりの心地よさに体の力が抜け、口を開くのも面倒になってきた。

絶妙な力加減。それにやたらいい匂いがする。悪くない……。いや、最高だ。

やばい、どつと眠気が……。

早くも意識が飛びそうになっていると、急にドアがバタンと開け放たれる音で我に返った。

「おらー、言人いるかー」

勢いよく入ってきたのはエレナ。うつ伏せになっていた俺と目が合った。

「あっ」

エレナは眼前の光景を見て一言声を発すると、驚きの表情のまま固まった。

やがてその白く透き通った肌が、徐々に赤みを帯びていく。

「し、しつれいしましたあっ」

慌ててドアを閉めて、部屋から出ていった。

何だ今の女の子っぽいリアクションは……。らしくないな。「あく偉そうにマッサージなんかさせちゃってるよ」とか言つと思つたのに。

「ど、どうされたんでしようエレナさん」

「……部屋間違えたんじゃないのかな」

リーナは不思議そうに尋ねたが、そのままマッサージを再開する。あーダメだこりゃ、もう耐えられない。

俺は強力な睡魔に襲われ、いつの間にか意識を失っていた。

第二十四話

翌日。

目が覚めるとちょうど朝日が窓から差し込み始めていた。

俺はどういうわけか仰向けにきちんと掛け布団をかぶって眠っていた。一瞬混乱しかけたが、すぐに昨日の出来事を思い出す。

そういえば晩飯も食わずに寝ちまつたんだっけ。リーナに礼も言わずに寝落ちして悪いことしたな。

昨日のマッサージが効いたのか、思ったより体の疲労が少ない。

腹減ったな、なんて思っているとテーブルの上に朝食らしき布のかぶさった皿が置いてある。

彼女が用意していつてくれたのだろう。やっぱりできる子だなあ。リーナ様様だ。

それでもあんまり迷惑をかけたくないの朝とかは手伝い不要と伝えてあるのだけど、こういう時はありがたい。

元の世界であるレベルのメイドを雇おうとしたら、一体どのくらいかかるものやら。

などと考えながら半ば寝ぼけ眼で朝食に手を伸ばした。

城全体が活動を始めた午前中。今日も謁見の間で楽しい楽しい王様プレイの時間だ。

あゝヒマだな、なんてダレしていると、広間の入り口に一人の兵士が現れた。

いつもはいかにも金持ってますって身なりの奴らがたまにご機嫌取りに来るぐらいなので、ちょっと珍しい。

足早に玉座の前までやってくると、片膝を付き俺の顔を見上げながらこう告げる。

「アルフ様、ダレル殿より至急城の入り口前へ、との事です」

あの野郎、昨日の今日でまたしごく気か。だけど今はまだ自由時間じゃないし、ダレルといえどそんな用得俺を呼び出す権限はない。ということとは……。

「何かあったの？」

「はい、レティア殿率いる隊が帰還したとの事です」

「……わかった、行くよ」

また出払っていた国の兵が戻ってきたか。こうしてふんぞり返っていても仕方ない。

俺は立ち上がると、先に行く兵士の後に続いて城の入り口へと向かった。

国の軍や部隊編成に関して俺はあまり聞かされていないが、知限りでは基本的にダレルやスヴェンクラスの人間が十〜二十数人からなる隊を率いて行動しているらしい。

魔物があつちこつちで暴れるため繁忙期だそうだ。

近隣の村や他国へ派遣していたりで、常に城を守っている兵は案外少ない。

本来城の立地からしてここは安全地帯で、兵を配置する必要性が薄いのだ。

世界地図とやらを見せてもらった事もあるが、ここは大陸の南端に位置していて周囲を海や山に囲まれていた。

まあ結構おおまかで適当な地図だったので、実際のところどうなのかは引きこもりにはわからん。

今回また一隊が戻ってきたという事は一段落着いたということか、それとも国の様子になったのか。

魔物襲来の話やアルフレッドの死去、それに变なのが王になってる事も聞いているだろうし、やっぱ後者だろうな……。

スヴェンの時もそうだったが、出迎えるのは気が重いな……。嫌な予感しかない。でも現状が変わるならそれもいいか。

なんといつてもいつまでもこうしているわけにはいかないしな。

エレナがどういう気なのか知らないが、俺たちにはやることがある。

この世界に混沌を持ち込んだのは神の使いとその主。

エレナはかつてその主に反抗した。人間を弄ぶような振る舞いを許せなかったから。

『本当にあたしに力を、貸してくれるのか？』

『一緒に戦ってくれるか？』

エレナがこんな風に言ったのは、単に城に襲来した魔物を追い払うという時のことだけじゃない。

もっと大きな何か。

あいつはまた神に挑むつもりなのだろうか。

もしそうだとしても俺は……。

城を出てすぐのちょっとした広場では、すでに人だかりができていた。

帰還した兵士とそれを出迎える人々でごった返し、軽いお祭り騒ぎだ。お互いの無事を喜んでいるのだろう、所々からむせび泣くような声が聞こえる。

今度の隊は心なしか女性の数が多い気がする。女兵士は赤を基調とした装備に身を包んでいるので、一目でそれとわかった。

華やかな印象を受ける反面、おのおのが腕や足に包帯を巻く姿は痛々しい。

俺は一通り全体を見渡すと、人ごみの中からひときわ目立つ巨体

を見つけて歩み寄った。

「ダレル！」

「おう、来たか。ほれ、紹介するぜ、クラウンガードのレティアだ」

そう言ってダレルはとなりの人物に視線を向ける。

レティアと呼ばれた女性は、燃えるような紅の瞳でまっすぐ俺を見つめていた。その容貌からは美しくも力強さを感じる。

凛々しさと、繊細さが同居する、そんな印象を受けた。

俺を品定めするような目つきに、やや気圧され気味になっていると、彼女は胸に手を当ててうやうやしく頭を垂れた。

「アルフ様、お初にお目にかかります。レティアと申します」

顔を上げるとともに赤髪のポニーテイルがなびく。前髪は中央で分けられ、顔の輪郭をなぞるように垂れている。

今の動作だけでも、他の女兵士達とは一味も二味も違う存在感があった。

ほとんどの兵士が怪我をしているというのに、この人だけはキズ一つ負っていない。

それどころか、身に着けた銀の胸当ては新品同様で、その下に着込んでいるワンピース風の赤いクロスアーマーにも破けたような形跡はない。

腰元に剣を下げているところを見ると女剣士か。

おそらく相当に腕が立つに違いない。

「ああ。よろしくレティア。ご苦労だったね」

「おめえなに気取ってんだ？」

ダレルがすかさず訝しむように俺を見る。

……余計な事を言うな。確かに自分でもキャラを見失っている感はあるが、どう接すべきか困ってるんだよ。

「……ダレル、さっきからあなたの口の利き方は何なの？」

「ああ？ ……あゝこいつあ失礼」

レティアにじろりと睨まれ、頭をかくダレル。

ダレルのやつ少しビビってるぞ。情けないヤツだ、自分よりも一回り小さい相手に。

でもこの姉ちゃんも確かに怖えぞ、綺麗な顔してるけどどこか刺々しい。

「いやいいんだよ、好きにしてくれて」

ここは寛大な心を見せよう。ダレルのように舐められるのは避けない。第一印象は重要だ。

第一言葉遣いとかどうでもいいし、むしろみんなダレルのように接してくれた方がやりやすくていい。

「だよ」

「……ふん。どっちにしろあなたにはまだ話があるから、逃げないでよね」

レティアは明らかに不機嫌になったようだ。

俺のせいかな？ ここは嘘でも王らしくダレルを注意すべきだったか？

……いやいや、なんで俺がレティアのご機嫌取りしようとしてるんだ。

「ところでアルフ様、お会いして早々恐縮ですが、一つお願いがあ

ります」

「お願い？ うん、何でも言ってくれ」

お願い、だなんて少しは可愛げがあるじゃないか。いいだろう、臣下の願いを聞くのも主の務めだ。

「ぜひ私も勇者と聖剣の力を拝見したいのですが」

断る。

と反射的に答えそうになるのを何とかこらえた。

いきなりそんな事言ったら信頼度がガタ落ちになるぞ。

俺としては別に構わないんだが、エレナが首を縦に振るかどうか。顔を引きつらせないようになんとか笑って答えた。

「はは、そんな大したものじゃないさ。そんな見せつけるような大層なもんじゃないよ」

「聞くところによりますと巨大型の魔物をお一人で討伐されたとか。勇者アルフレッドと聖剣については話に聞くだけでしたので、どうかこの目で直接確かめたいと」

「か、構わないけどさ、力を見せるっていつでも巨大型の魔物はいないし、外出は禁じられてるし」

「回りくどくてすみません。端的に言うとエネルギーフィールドで私と手合わせして頂きたいのです」

なんだエネルギーフィールドって。知らねえよそんなん、専門用語使えばいいと思ってんじゃねえぞ。

嫌な予感しかない。

ていうかどうなってんだこの女。好戦的過ぎるだろ。なにがお願い、だ。

さすがのようにダレルの方を見ると、にやにや笑ってやがるだけで

助け舟を出す様子もない。

「な、何も今すぐってわけじゃないんだろ？ 君も長旅で疲れているだろうし」

「いえ、今すぐで問題ありません。私にはこれがありましたから」

そう言って腰元の剣に目をやる。

なるほど、魔力付きの武器か。確か回復効果を高める使い方もできるんだっけ。それで元気百倍、やる気満点ってか。

……やばい、後はおなかが痛くなっただぐらいしか言い訳が思いつかん。

「エネルギースフィアは部下に持ってこさせますので、もうしばらくお待ち……」

「ちよっと待ったあ！」

第二十五話

俺たちの間に勢いよく飛び込んできたのは昨日の通り魔スヴェン。すっかり忘れていたがこの付近で待ち合わせだとか言ってたな。

「アルフさんを倒すのは俺だ！」

「お前趣旨変わってるだろ」

元はといえばエレナに認めてもらうためについていう話だったろうに。

「スヴェン、久しぶりね。それにしても勇者を倒すだとか、ずいぶんなめた口利くようになったようね？」

「登り竜スヴェンとは俺のことですよ。悪いけど俺相当強くなったからね、もうレティアさんとつくに追い抜いてるかも」

レティアの顔がわずかに歪む。

俺の手前なるべく平静を装っているようだが、ビキビキきてるなこりゃ。

「もうおばさんは引退時じゃないっすかあ？」

「お、おば……私、あんたと三つしか違うないんだけど？」

「そーでしたっけ。その割には……。あれ？ ピアスなんかしてましたっけ。なんか微妙っすよそれ」

スヴェンは無遠慮にレティアの顔をじろじろ観察する。

やめろ、それ以上刺激するな。危険だ、爆発の予兆がするぞ。

だってこのお姉さんものすごい拳握り締めてるよ、小刻みに震え

てるよ。

「い、いいこと考えたわ。まず私があんたをぶちのめ……じゃなく
て勝負して、勝ったほうがアルフ様に挑むというのはどう?」

「別にいいすけど、今ここで?」

「私は構わないわよ、あんたが再起不能になってもいいならね」

「そりゃこっちのセリフですけど」

「……………こ、こんのがキ……………」

いきり立つ二人。いや、どちらかというレティアが一方的にヒ
ートアップしてるみたいだが。

おいおい、こいつらこんなところでおっぱじめる気か?

再起不能とか物騒な単語が飛び交ってるが、殺し合いする気じゃ
ねえだろうな……………。

「おい、おめえらちょっと落ち着けや。せつかく復興がすすんで元
に戻ってきたっていうのに、またぶっ壊す気か。やるならエネルギー
フィールドでやれ」

「そうっすよね。大ケガさせちゃうといけないし」

「…………それは私に向かって言ってるのかしら?」

なんか知らんがダレルがうまく収めたみたいだ。

さすがに年配だけある。

「んで、スフィアは?」

「スフィアは部下が取りに行ってるわ」

「じゃあその間に俺はエレナちゃんを探してこよつと。俺の雄姿を
見てもらわないと」

スヴェンは城内へ向かって走り去っていった。忙しいやつだ。そ

ういや今日はエレナの姿を見てないな。

待機状態になったところで、俺は苛立っているレティアの方を見ないようにしてこそこそとダレルに尋ねた。

「おい、エネルギーフィールドってなんだよ」

「……ああ？ そういや知らねえか。魔法で作られた空間だよ。エネルギースフィアっていうアイテムを使うんだぜ。どこの国からの贈り物でな、とにかく便利だ」

「魔法で作られたってどんなだよ」

「百聞は一見にしかずってな。口で説明すんのは面倒だからもうしばらく待ってけ」

魔法のアイテムか……。なんか楽しみだな。空飛んだりワープするようなものはないのかな。

この城も空飛べればいいのに。

広場は城から出てくる人と城下町方面から押し寄せる人が入り混じり、さらに人口密度が増してきた。

がやがやと話し声が一層騒がしくなる。

ダレルとレティアがなにやら話し込んでいる隣で、俺は手持ち無沙汰に立ちつくしていた。

何気なく城の入り口に目をやると、どこかアンバランスなメイド少女がきよるきよるしながら出て来る姿が目に残る。

俺がそちらに向けて大きく手を振ると、少女はこちらに気づいて歩み寄ってきた。

「すっごいなー、この人だから」

「エレナ、スヴェンと一緒にじゃないのか？」

「いや、違うけど。今日は見てない」

あいつどこに行ったんだ？　まだ城の中駆けずり回ってるんじゃないだろうか。

「そっぴやお前、昨日俺の部屋に来てすぐ出て行ったろ？　なんの用だったんだ？」

「え？　あ、ああ。あれはなんでもないんだよ。気にすんな。……じ、邪魔しちゃ悪いと思って」

「あっそ。……すごく気持ちよかったぞ。やっぱりすごいよリーナは」

「……き、気持ちいい？」

顔を真っ赤にしてうつむくエレナ。どうしたっていつんだ一体。

……あ、もしかしてこいつ……。

「そのメイド、馴れ馴れしいぞ」

すぐ横でダレルと会話していたはずのレティアが、目ざとくエレナを見つけて咎める。

「いや、こいつはメイドとかそういうのじゃないから」

レティアは俺がそう言うのを聞いて一瞬悩む素振りを見せたが、

「あっ、そうでしたか、失礼しました。そうとは知らずにとんだご無礼を」

そう謝るとエレナに近づいて軽く一礼する。

「よく見れば、な、なんて可愛らしい………はっ、いや美しい。あなたがアルフ様のお相手なのですね」

「そーだ、敵だ」

「おい、違つだろっ」

レティアが急ににこにこした。エレナのことか気に入ったのかどうか知らんが、なんだか気味が悪いな。

「おまたせ！」

その時スヴェンが風とともに舞い戻ってきた。

今度は腕にソフトボールほどの丸い水晶玉のようなものを抱えている。

「エレナちゃんも広場に行つたつて聞いたからさ」。慌てて戻ってきたんだよ」

スヴェンは玉を手を持ち替え、見せびらかすように言う。

「そんでこれ。途中でスフィア持ってちんたら歩いてた人がいたから奪い取つてきちゃつた」

俺はスヴェンが差し出した水晶玉をまじまじと眺める。

これがエネルギースフィアとかいうやつか。

占い師とかが持つてそうなんくさそうな代物だが、なんとなく神秘的なオーラを感じるような。

「では早速始めましょうか。ちょうど観客も集まっている事だし」

レティアが不敵な笑みを浮かべる。

観客つて見世物にでもする気か？

ダレルが周囲に注意を呼びかけ出したが、こんな小さな玉で一体なにを始めるつていうんだろっ。

「そーいやここにもあつたっけ、スファイア」

「エレナ、お前知ってるのか？」

「アルフレッドはあんま使わなかつたけどなー。結構便利だよ」

レティアがスヴェンの掌に乗るスファイアに触れた。そして二人は何かを念じるように、そのままの姿勢で硬直する。

すると、球体が激しく発光しだした。その陽の光よりも明るい輝きに広場全体の注目が集まっていく。

次の瞬間、二人の体が水晶の中に吸い込まれるようにして一瞬で消えた。

二人を飲み込んだスファイアは、膨張を始めるとともにひとりで空中へ浮かび上がっていく。

「う、これは……」

俺は思わず息を飲んだ。

膨れ上がった水晶玉に映し出されるのは、何も無い草原の上で対峙するスヴェンとレティア。

それはまるで形こそ丸いものの巨大なテレビのスクリーンのようで、全長十五メートルぐらいはありそうだ。

地上から三、四メートルほどの位置に浮かんでいて、真下からダレルが手を伸ばしても届かないだろう。

二人はその中の空間、こことはまったく別の世界に転移したみたいだ。

「あの中がエネルギーフィールド……？」

俺を含めその場にいる誰もが突如現れた奇妙な空間を見上げている。

広場に集まっていた人たちが、そのまま観客になった状態だ。歓声上がるものの、その声に驚きは含まれていない。皆にはすでになじみのある光景なのだろう。

やがて球体に少し変化が現れた。

二人が映るすぐ傍に、何かの文字と数値が表示される。

「HP750？ 魔力量1200？ なんだありやすげえ！」

俺は一人叫んでいた。

まるでゲームの中でバトルが始まるみたいだ。

それに魔業力？ 一体何のパラメータだろう？ やべえ、テンションが上がってきた！

ダレルに解説を頼もうとすると、フィールド内では早くも二人の戦いが始まるうとしていた。

第二十五話（後書き）

次回はバトルですが、主人公の一人称だときついで三人称になります。

第二十六話

演習結界空間、通称エネルギーフィールド。

それはある天使が作り出した魔力の結晶であるエネルギーフィールドによって生み出される。

戦いの意志を持って魔力を発しながらそれに触れる事で発生するこの異次元世界は、もっぱら腕試しの場として使われる。

それというのも、ここで受けたダメージは全て空間の魔力によって吸収されてしまうからである。

ケガや周囲の被害を気にすることなく全力で戦えるこの場所は、格好の決闘場となっている。

フィールド内はスフィアによって様相を変えるが、今回のものは無限に続く草原である。

どちらかのHPがゼロになるか、敗北を宣言するまでこの空間から脱出する事はできない。

なお、ここでの戦いの様子は数値化された能力値とともに外界へ映し出されるが、内部にいるものには情報が一部しか表示されない。ダメージ量なども数値化されるため、戦況が一目瞭然となる。

だがこの二人の場合は……。

「さあって、まずは小手調べしますか」

「偉っそうに」

スヴェンが両手に構えるのはやや小ぶりの双剣、雷迅風塵。どちらもやや湾曲した形をしている。

対するレティアの手には炎剣ファイアブランド。赤い刀身が燃え盛るように波打つ。

それらは紛うことなき魔力の源。天使から与えられた神器。

お互いが武器から迸る魔力を体にいきわたらせ、臨戦態勢に入る。

スヴェンの魔力量1500に対し、レティアの魔力量は1200。神器使いの戦いは、まずその魔力を自らのステータスに割り振り基礎能力値の底上げを図るところから始まる。

攻撃力、防御力、素早さ。それらに好きな割合で魔力を振り分ける事で、常人をはるかに超えた戦闘力が身につくのだ。

スヴェンは攻撃に300、防御に100、素早さに1100という偏った振り方であるのに対し、レティアはそれぞれに400ずつというバランス型の配置。

魔力の振り分けが、そのまま勝敗を左右する事もある。戦闘を開始する前に慎重に行うべき作業なのである。

両者にらみ合うこと数秒。

先に仕掛けたのはスヴェンだった。

素早い動きで一気に間合いを詰めると、右手の雷迅を袈裟がけに振るった。

剣でそれを受けたレティアの右脇を、連続して左手の風塵で払う。

「くっ」

レティアはわずかに後ろに身をそらして直撃を避けたものの、刃が腹部を掠めていた。

ダメージはフィールドに吸収されるため痛みこそ感じないが、本来なら今ので傷を負っている。

さらに追撃をかけようとするスヴェンを、突如現れた炎の壁がさえぎった。

レティアが構える剣から発生したものだ。

「つと」

慌てて後ろに大きく地を蹴るスヴェン。そこに彼の顔面ほどの大きさの火球が襲い掛かる。

体を大きくひねり紙一重でかわした。はずだったが、火の玉はスヴェンの左肩に直撃した。

スヴェンは一瞬ひるんだが、さらに距離をとって剣から連射されたもう二発の玉をかわす。

(うわっ、やばい、当たっちゃったよ。かわしたと思ったのに)

ただの火の玉なら恐れる事はないが、注意しなければならぬのは魔力が込められているということ。

魔力を割り振って物理攻撃や物理防御力を上げるのは初歩的な技術であるが、魔力に対する抵抗力を上げるには高度な魔力操作を要求される。

現段階において両者ともにその域に達していない。魔法防御を上げる事ができないのだ。

つまり魔力を含んだ特殊攻撃はお互いにとって致命傷になりうる。実際今の一撃でスヴェンのHPは850から650まで削られていた。

魔力がこもった火球は見た目以上に大きな殺傷力を秘めているのである。

軽快な身のこなしで追撃をかわしつつ、先ほどより距離をとった

スヴェンを見てレティアは少し感心していた。

（やっぱり動きはいいわね。魔業力は貴重だし、あまり無駄撃ちはしたくない）

魔力を行使するには、常に武器から発せられステータスを上げている魔力とは別に、魔業力というエネルギーが必要である。

魔業力を消費する大技などは、たいていが一発逆転の威力を秘めているため残量には注意しなければならない。

レティアは今の攻撃で15パーセントほど消費した。

「お得意のスピード特化でもかわせなかったのかしら？ 勝負は見えたわね」

「いやまだ本気じゃないつすよ？」

「強がっちゃって。どうすんのよそんなところから」

スヴェンは飛び道具を警戒し、大声でやりとりしてどうにか聞き取れるぐらいの位置まで下がっていた。

彼は基本的に遠距離用の攻撃手段を持たない。

雷迅を使い雷を落とすことはできるのだが、距離があるほど精度が落ちるため狙ったところに直撃させるのは本人の技術不足もあり成功率は低い。

発動には若干のタメが必要なうえ、魔業力を消費するのでデメリットが大きいの。

スピードで相手を圧倒する彼の戦闘スタイルにはそぐわない。

「ここは新技、見せちゃおうかな」

スヴェンは右手を上げて雷迅を空に向けて掲げた。するとその頭上のはるか彼方からイカヅチがスヴェンに降り注ぐ。

周囲が明るいのでほとんど視認はできないが、ズシャアアっと激しい轟音が響き渡った。

スヴェンの特技『迅雷光』。

彼は自身に雷を落とすことでそのエネルギーを雷迅を通して体に浸透させ、ダイレクトに素早さを上げることができる。

魔業力を消費してしまうものの、すでに魔力により強化された素早さをさらに強化する事ができるのである。

これはあくまで稲妻のごときスピードを得るという彼の精神的イメージから来ている。

そのイメージがこの技を効果的なものとし、彼の最大の特徴を生かすのだ。

ただし効果は重複しない。

「よつつしや行くぞお！」

足を踏み出し加速を始めようとするスヴェンを、火弾の群れが迎え撃つ。

弾は直線的に飛ぶだけでなく途中で軌道を修正し、その結果弧を描くようにスヴェンめがけて襲い掛かる。

(なんか前より弾が速くなってな……それにややホーミングしてくる。だからさっきは……。でもこの程度なら)

だがスヴェンは恐れることなく稲妻のようにジグザグに火弾を振り切りつつレティアに迫る。

あっという間に二人の間合いが詰まる。

レティアは予想以上のスピードにあせりつつも、それに対抗すべくとつさに魔力の割り振りを素早さを重視に変えた。

基本的に戦闘中いつでも割合は変更できるが、習熟度によって時間のかかり方が違う。

それが完了するかしないかの所で、レティアは稲妻のように接近したスヴェンによって振り下ろされた剣を受け止めていた。

（早過ぎる！ これじゃ全魔力を素早さに当てたとしても追いつかないわ。受けに回ったらダメ）

純粋な素の剣闘ならレティアの方が数段上である。

だが魔力による圧倒的なスピードの差があり、かつスヴェンの剣の方が取り回しが早い。

そのうえ二本の剣による圧倒的な手数。スヴェンはレティアをかぐ乱するようにまとわりつき、今度は間合いをとらせない。

レティアは攻めに転じようにも繰り出される連続攻撃に防戦を迫られる。

一撃一撃は軽いものの、徐々に蓄積されるダメージにたまらず剣を地面に突き立てた。

ゴオオオツ！ 次の瞬間レティアを守るように体の周囲から火柱が立つ。

それを予期していたのか、スヴェンはすでに彼女から離れ、楽々反撃をかわしていた。

火球を飛ばしても無駄と悟ったのか、レティアは追い討ちをすることなく体勢を整える。

さほど距離もとらぬまま余裕の表情でスヴェンは話しかけた。

「今のは結構魔業力使ったんじゃないっすか？ さっきの火の玉と
いい」

「……ちよろちよると余計にうざったさが増したわね」

「悪いけどこのままじゃやっぱり俺が勝っちゃうよ？」

「うん、思ったより成長しててビックリしたわ。でも成長したのはあんただけじゃないのよ？」

レティアはにやりと笑うと炎剣を構えなおした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8283t/>

今日、聖剣を抜きました

2011年7月30日18時36分発行